

ようこそ！
異界の門
へ

ノートスの奇跡

Thor

〈第1章〉 アルマ

「おごっ！」

ウォンの口から言葉にならない叫びが漏れる。

《しまった！ 針ばかりに気を取られて……》

こいつの毒針だけは食うわけにはいかないが、だからといって爪ならば良いというわけでもない。

ウォンの動きが鈍くなったことに気づいたのだろう。ジャイアントビーは腹を丸めると子供の腕ほどもある毒針でウォンを狙い澄ました。これはかなりまずい状況だ。

ビーが襲いかかってきた瞬間、ウォンは手にした剣を横に払った。それはビーの体には当たったが、硬い甲にはかすり傷しか付かない。いや彼の剣だからこそかすり傷がついたのだ。普通の剣ではそれこそ全く刃が立たない。だがそれでもとにかくビーの狙いを逸らすだけの効果はあった。

「この野郎！」

ウォンはそう吠えながら再びビーに剣を振り下ろす。だがビーはそれを軽々と躲(かわ)すと、再び上空へと逃げてしまった。

「逃げるな！ ゴルァ！」

そう叫んではみたものの、今の攻撃を凌げたのはかなりの幸運だった。こんなことがあと何度も続くわけがない。こいつらは固くて剣が効きにくい上すばしっこくて、とにかく始末が悪いのだ。

《やべえ！ このままじゃジリ貧だぜ》

脇腹からは豪快に血が噴き出している。このままでは何分もしないうちに行動不能になってしまうだろう。

そういうウォンの都合とはお構いなしに、ジャイアントビーは最後のとどめとばかりに襲いかかってきた。その時だ。

「イオ！ ウォンを！」

かん高い叫び声と共にずどんという音がして、ビーが弾け飛んだ。

「スー！ お前何を……」

一瞬ウォンは目を疑った。今攻撃したのは確かにスーチだ。彼女は僧侶なのだからそんなことをするはずがない。だがウォンが彼女の方を見ると、彼女は手を前にかざした状態で放心している。

「何考えてるんだよ！ 俺を直せよ！」

僧侶であっても気弾のような攻撃魔法は使える。だが実際のところその程度の魔法ではこの外骨格生物には何のダメージも与えられない。ジャイアントビーは一瞬とまどったような様子を見せたが、すぐまた立ち直った。

《ほら見ろ！》

ただその一発は結構痛かったようで、ビーは向きを変えると凄まじい羽音を立てながら彼女に向かって飛んでいった。

「きゃあああ！」

スーチが慌てて逃げ出す。確かにこれでウォンは危機を脱することができた。だが今度は彼女が危ない！ しかもここで僧侶がやられてしまったら全体的には更に悪い状況になる。

「バカ！ 当たり前だろ」

ウォンは最後の力を振り絞ってジャイアントビーを追った。彼女だけは救っておかなければ...
...その時背後から別な声が出た。

「ウォン！ これ使え！」

その声は魔法使いのイオだ。ウォンが振り返ると同時にイオはポーションの瓶を放り投げてきた。ウォンはそれを慌てて受け取りながら、スーチがあんなことをした理由を理解した。

スーチはイオがフェアリーダストのポーションを持っていたことをちゃんと覚えていたのだ。これなら即効性がある。

ウォンは走りながらポーションの蓋を開けると傷口に振りかける。ほとんど瞬時に血は止まり、傷口が塞がっていく。同時に体に力が舞い戻ってくるのが分かる。

「いやあああん！」

前方ではスーチがジャイアントビーに追いつめられて、その毒針を何とか払いのけたところだ。だがはっきり言って彼女の接近戦は誉められたものでない。今もメイスを振り回したらまたまた当たっただけだ。この次は確実に串刺しにされてしまうだろう。

だがその時にはウォンが十分間に合っていた。

「馬鹿野郎！ 俺様はこっちだぜえ！」

ウォンはジャイアントビーの急所である羽の付け根に愛用の魔剣を叩き込んだ。ぱっと黄色の毛が散って、透明の羽が一枚舞い上がる。それと同時にジャイアントビーはバランスを崩して地面に落ちた。

「こうなりゃこっちのもんだぜ！」

「ウォン！ 油断しないで」

「わかってら！」

飛べなくなったからといってこいつが即無力になるわけではない。ジャイアントビーの体は大変に固く、体節の間を正確に狙って攻撃しないと刃が立たない。だが地面を這いずってしてくれるのであれば、着実にポイントを稼ぐことは可能だ。

数分後ビーの体液でぐしょぐしょになりながらも、ウォンはとどめをさしていた。

「ふう、ひでえ.....」

「大丈夫だった？」

スーチが心配そうに声をかける。

「大丈夫って、お前、無茶するんじゃないよ！ 自分が囷になるなんてよ！」

「だって、あの場合呪文じゃ間に合わないでしょ？」

「まあ、そうだけだな」

確かに彼女の言う通りだった。あの時僧侶としての彼女には二つの選択肢があった。

普通ならば僧侶の専門である治療行為をするのが当然だ。だが先ほどの場合は治癒する速度よ

りダメージを受ける速度の方が確実に速そうだった。あそこでウォンが倒されてしまったら後はもうどうしようもなくってしまう。

そのためスーチはジャイアントビーを攻撃して自分の方に引きつけ、その間にイオが持っていたポーションで治療できるようにしたのだ。

その時後ろからがさがさ音がして黒いローブを着た男が現れた。

「スーちゃん。ナイス！」

「イオ君！ありがとう」

「どういたしまして。でも危ない賭だったな。こいつが間に合わなかったらゲームオーバーって感じだったぜ」

「大丈夫。間に合うって思ったから」

「運がよかっただけだって。こんな奴あてにしてたら命のストックがいくつあったって……」

それを聞いてウォンが突っかかった。

「イオ！ てめえこそ、今まで何してやがったんだ？」

「何って、休息」

「人がボロボロになって戦ってる間にか？」

「ああ？ だってそれがお前の役目だろ？ ひ弱な俺に殴り合いをやらせる気か？」

「せめて支援ぐらいできなかったのかよ？」

「最初で精神力切れちゃってね。回復させとかないとな」

そういいながらイオはビーの体液にまみれたウォンを眺めた。

「それにしてもお前、汚ねえなあ」

「誰のせいだと思ってんだよ！ お前が全部固めておけば良かったんだろうが！ なのに何だ？ 中から全部出てくる前にぶっ放しやがって！」

そう言ってウォンはイオを睨んだ。確かにこの作戦では奴らを巣からみんなおびき出してイオのブリザードの魔法で凍らせるはずだったのだ。ジャイアントビーは先ほどの戦いでも証明されたように物理的な攻撃にはやたら強いのだが、低温系の魔法には驚くほど弱いのだ。

「だってなあ。びっくりするだろ。あんだけ出てこられたら」

「だからって、もう少し待てなかったか？ 素人か？ お前は！」

「ああ？ 蜂の爪ごときで刻まれてる奴がなんだって？ 俺が薬をやらなかったらどうなったよ？」

二人はにらみ合った。それを見てスーチが仲裁に入る。

「ねえ、二人とも、うまく行ったんだからもういいじゃない。それに元はといえばあたしが急かしたのが悪いんだし……」

それを聞いてイオが答える。

「まあ確かに夜まで待つてればこんな作戦にしなくても済んだんだろうけど……いったい何急いでたんだ？」

するとスーチは言った。

「何って夕方にほら……ああ！ こんな時間。あたしもう出るわね。毛を乾かさなきゃいけないし……」

そう言うとスーちは口の中で何かぶつぶつぶやくと、すっと消え去った。

二人は一瞬ぼかんとして彼女の消え去った後の空間を眺めていた。それからウォンが言う。

「スーは何急いでるんだ？」

「さあ。ギィと約束があるんじゃないか？」

「ふうん」

二人はしばらく黙り込んだ。それからイオが言う。

「それにしても、今回はマジやばいかと思ったけど、スーはうまくやったな」

「ああ？ 俺から見ればまだまだだね」

ウォンが答えるとイオがからかうような口調で言った。

「ほう？ 俺としちゃ命預けるんならもうお前よりスーの方がいいけどなあ」

それを聞いてウォンはイオをにらみつけた。

「そりゃスーちゃんもこもこしてて抱き心地良さそうだしねえ。命だけでなく体預けるのにも丁度いいんじゃないか？ 人としてどうかとは思うけどな」

今度むっとしたのはイオの方だ。

「お前いい加減しつこいんだよ！ 大体それとスーとは関係ないだろ！」

「そして目覚めると心が寒い丘にいたってか？」

その途端にウォンの足下から炎の柱が立った。

「だあ！ 危ねえ！」

「あのなあ、同じセリフをしつこく何度も何度も何度も何度も……最近気づいたんだけどさ、お前ももしかして頭悪いんじゃないか？ 治療してやろうか？」

「上等じゃねえか！ この野郎！ 俺だってなあ、てめえのそのすました喋り方が嫌いなんだよ。二度と口きけなくしてやるぜ！」

二人は弾かれたように立ち上がると、ぱっと互いに飛び下がった。

ここはまばら林の中だ。所々に灌木の茂みがあるが、木々の間はおおむね広く、下草もほとんどない。もう陽は完全に落ちているが、代わりに梢の間から明るい月が地面を照らしている。明るさも十分だ。

ウォンは愛用の魔剣を鞘から抜くとイオに向かって構えた。いつものようにその柄はびたりと吸い付くようにウォンの掌に収まっている。

ウォンはじりじりとイオに迫った。もちろん魔導師のイオは逆に間合いを取ろうとして回り込んでいく。しばらくはそういった動きが続いた。

だがついにイオの行く手に灌木の茂みが現れた。これ以上は回り込めない。

《今だ！》

ウォンは一気にイオとの間を詰めようとした。だが彼はそのとき背後でがさがさという音がしたのを聞き逃さなかった。

「へん！ バカ野郎！」

そう叫ぶとウォンは弾かれたように横っ飛びした。それと同時に背後から真っ赤な光球が飛んできて、ウォンの今いた場所で炸裂した。

《後ろに転移しやがったか？ いつも通りにせこい野郎だ！》

ウォンは反転すると、剣を構えてすさまじい速度でイオに迫った。だがそれも十分に予期していたようで、イオは持っていた杖をさっと振り下ろすとまたあの光球がウォンに襲いかかる。

「ちっ！」

ウォンがそれを避けている間に、イオは別な茂みの中に姿を消した。

《追うか？ それとも先回りするか？》

ウォンは一瞬躊躇したがすぐに両方の考えを捨てた。イオ相手に単純に迫ったのではどんな罠が用意されているか分かったものではない。

その代わりにウォンはイオが姿を隠した茂みにまっすぐ突入した。

「うあららあああ！」

ウォンは手にした魔剣で茂みを両断する。茂みの上半分が一拳に吹き飛び、ついでに茂みの横の木までが両断されて大きな音を立てて倒れていく。

「うあっ！」

確かに向こうにイオがいる。ウォンは跳躍すると反転しながら一気に茂みを飛び越した。

「なに？」

「くたばりやがれ！」

叫びと共にウォンは魔剣をイオめがけて振り下ろす。剣は見事にイオを捉え、両断した……かに見えた。だが何の手応えもない。

《しまった！》

ウォンの全神経が危険を告げる。彼は何も考えずに全力で飛び下がる。

それとイオの幻が爆発するのはほぼ同時だった。ウォンは爆風でもんどり打って飛ばされてかなりのダメージを受けた。だが生きている。もう一瞬回避が遅れていたら粉々になっていたに違いない。

だがそんなことを喜んでいる暇はなかった。彼が生き残ったと見るや、イオは再び光球を連打してきたのだ。

「汚ねえぞ！ この野郎！」

「いいからさっさと死ね！」

「ほざけ！」

ウォンはイオの言葉に焦りを聞き取っていた。今イオが使ったイリュージョンやエクスペロドの魔法はかなり精神力を消耗する物だ。イオは先のジャイアントビー戦で精神力を使い果たしている。あれからさっきまでの回復分ではこれが精一杯のはずだ。イオは今の一撃に賭けていたに違いない。

《だったらこっちも行くまでだぜ！》

ウォンは光球を無視してイオの本体に突進した。そんなものが当たったからといってまだ即死するわけではない。この戦いは最後に立っていた者が勝ちなのだ。

「うっ！」

ウォンの意図を察してイオの腰が引ける。こうなると魔導師には分が悪い。接近してしまえば魔導師は剣士の敵ではないのだ。

「うおらああああ！」

避けられないと見たイオは持っていた杖でウォンの剣を払いのけた。だが魔導師の杖はそういう使い方には向いていない。イオは剣の直撃は避けることができたが、杖は瞬時にまっぶたつになってしまった。

「おのれ！」

「ふははは！ これでもう小細工はできまい？」

ウォンはイオの鼻先に剣を突きつけた。だがイオの表情には恐怖の代わりに驚きの色が見えた。

「お、おい！ ちょっと、後ろ！」

イオはそう言いながらウォンの後ろを指さす。

「バーカ！ そんな手にかかるか！ 死ねや！」

確かにこれはイオが今まで何度かやってくれた小細工だったのだが、この日に限ってはそうではなかった。

ウォンが剣を振りかぶったまさにその時、まばゆい閃光と共にウォンの剣に雷が落ちて、剣を粉々に打ち砕いてしまったのだ。同時にウォンはすさまじい力で地面に叩きつけられた。イオもあおりを食って吹っ飛んだ。

「な、なんだよ？」

ウォンの問いに答えたのは冷たい女の声だった。

「何だとは何よ？」

ウォンは驚いて振り返る。そこにあったのは宙に浮かぶ半裸の女性の姿だった。肌の上には様々な色形の奇妙な文様がうごめいている。普通の者であればまずそのことに驚いてしまうだろうが、ウォンの驚きは別なところにあった。

「ああ！ ラーンさん？ いったい何で？」

だがラーンと呼ばれた女性はウォンと後ろでぼけっとしているイオをにらみつけた。

「ウォン！ イオ！ あんた達、一体何してるのよ！ こんな所で？」

「え？ だって、今日はもう終わりだし……」

「終わり？ 朝言わなかったっけ？ 新人が来るって」

「だって新人が来るのは明日じゃ……」

「だから朝に、明日から来る新人を夕方に紹介するから残っとけて言ったでしょ？」

「へ？」

ウォンは混乱してイオの顔を見た。

「そうだったっけ？」

「そ、そういえばそんな気が……」

二人の背筋に冷たい物が流れた。

「思いました？ あたしは確かに言ったわよね？」

ラーンの声はますます冷たくなっていく。

その頃にはウォンの記憶にもラーンが朝言っていたことが蘇ってきた。だからスーチはあんなに急いでいたのだ……

「で聞くけど、何してるわけ？ そんなところで？」

ウォンとイオは顔を見合わせた。それから同時に答える。

「ええ？ このふざけた男に天誅を……」

「まあ、このとぼけた男の脳の治療を……」

二人はにらみ合うとまた同時に叫んだ。

「あんだと？」

「まだ言うか？」

それを聞いてラーンがついに爆発した。

「いい加減にしろっての！ 何度決闘してたら気が済むのよ！ さっさと出ておいで！ 10分以内に来ないとひどいよ！」

「ちょっと待って下さいよ、そんな早く後始末が……」

そういうイオの願いをラーンにはべもなく却下した。

「がたがたうるさいわね！ 死にゃしないわよ！ それとももう一発雷が欲しい？」

これ以上逆らっても無駄のようだった。だがウォンは一つ気がかりなことがあった。

「あの、一つだけ質問。いいですか？」

「何よ」

「僕の剣、砕けちゃったんですが……」

ウォンは柄だけになってしまった剣を見せた。

「そうみたいね」

「これ手に入れるの大変だったんですが……」

「知ってるわ。で？」

ラーンの声はもう氷点下273度というところだ。

「……やっぱりいいです」

「そう。じゃあミーティングルームで。あと……9分35秒」

そういうとラーンの姿は消え去った。

二人はしばし呆気にとられたようにラーンが消えた後の空間を見つめていた。それからはっと我に返ると、ぶつぶつと呪文を唱え始める。ウォンの場合はこんな具合だった。

『我が名はウォン・リンドゥーなり。ここに真の名を以て異界の扉を開かん！』

それと同時にウォンの頭の中に声が響く。無性的で機械のような声だ。

『我は汝の望みをかなえよう。汝の望みとは？』

『退出』

『了解した！』

それと共にウォンの目の前が急に真っ暗になった。同時に体がふっと浮くような感じがして、次いであらゆる感覚が消え失せる。

もちろんいつものことなのでウォンは全く慌てない。その無感覚の状態はほんのしばらく続いただけで、すぐにまた体の感覚が戻ってくる。だが今度彼がいたのは林の中ではなく、小さな個室の中の細長いケースの中だった。彼はそこに裸で寝ていたのだ。

ウォンは体を起こすと、首の後ろをまさぐった。首筋から背中にかけて白いシールが張り付け

られ、そこから伸びた導線がケース本体とつながっている。

ウォンはそれに手をかけるとシールをベリベリとはがした。

「痛てて、こういうことするなっていつもはうるさいくせに。俺達はどうなってもいいのかよ」

ウォンはケースから出るとのびをした。本体の方は数時間ほどぴくりとも動いていないはずだ。筋肉をゆっくりとほぐしていかないと、急につってしまったりすることもある。また汗もかいていてシャワーも浴びたい。だが今回そんな暇はない。

彼は個室の隅にあったロッカーを開くと、服を着直して、すぐさま個室を飛び出した。

イオもほぼ同時に出てきていた。ウォンはイオに言った。

「時間はあと何分だ？」

「さあ、ともかく走った方がいいな」



二人が息を切らしながらミーティングルームに駆け込むと、そこにはNSEゲームセンター“異界の門”のスタッフが勢揃いしていた。

部屋の真ん中には迷彩服を着てサングラスをかけた男が腕組みして座っている。彼が支配人のミスだ。その横にさっき出てきたランがいる。彼女の格好はさっきの幻影で見たままだが、ここではもう普通の光景なので誰も気にしない。

その反対側には20歳前後に見える若い娘と白衣を着た初老の男が並んでいた。彼らは親子ではなく夫婦で、ゼナとエイドリアンという。この4名が異界の門の創業四人衆と呼ばれている。

といってもここは零細企業なので上司と言うよりは兄貴分といった間柄に近い。だからそこまで畏(かしこ)まる必要はないのだが、それだけに怒らせたらさっきのウォンのように別な意味でひどい目に合わされるので気が抜けない。

蛇足ながら彼らは一番若いゼナでも50歳を越えている。とにかく見かけで判断してはいけない連中なのだ。

その反対側には何人かの他の従業員と共に、スーチとギメルが並んで座っている。ウォン達には見慣れた光景だがそうでなければこれもまた驚きの種だろう。

スーチはゲーム中で見た姿とは全く異なっていて、真っ白なふわふわした髪の毛をしており、同じような毛でできたショールとスカートを身につけているように見える。だがそれは服なのではなく百パーセント自前の毛なのだ。

気配を感じてスーチが振り返った。その顔だちを見れば彼女がどう見てもヒト族ではないことは明らかだ。だが彼女の吸い込まれるような美しい瞳は種族の垣根を越えて見た者に深い印象を与えずにはおかないだろう。

そしてその横には青みがかかった肌色をした、小山のように大きな男が座っている。彼も同時に振り向いた。彼もその怪物じみた顔を見るまでもなくヒト族でないことは明白だ。

ウォンとイオは息を切らせながらその横に滑り込んだ。

「一応時間通りに来たわね」

息が上がってせいぜい言っている二人を見てラーンが言った。

「じゃあ紹介するわ。彼女が明日からアシスタントをしてもらおうアルマ・マートル」

それと同時にラーンの後ろから赤毛の娘が出てきて黙って礼をした。彼女は正真正銘のヒト族のようだ。

それを見た途端ウォンの胸がきゅっといった。

《しまった！ 結構好みじゃん！》

最初の印象というのは出会いにとっては非常に重要だ。だがちょっと今の登場はよろしくないのではなかろうか？

だがまだ終わったわけではない。ウォンは彼女に何かサインを送れそうな機会を探した。しかし彼女はスーチとギメルの方が気になるようで横目でそちらばかり見ている。どうやらラーンはいつもの調子でおいしい所は後回しにしているのだろう。

ラーンはウォンとイオを紹介しそうな素振りを見せてから急に尋ねた。

「あら？ 彼女たちの方が気になる？」

ラーンにいきなりそう言われてアルマはちょっと飛び上がった。

「え？ あ？」

《うへ！ かわいい声出すじゃん！》

ウォンはそのとまどった声を聞いてまた心躍らせていた。

「そうね。あんなのより気になるわよね。じゃあ先にしましょう。彼女がスーチ・アイン。アシスタントだからまず彼女と一緒に仕事することになるわ」

ラーンがそう言うと慌ててスーチが立ち上がって手を差し伸べながら、高く澄んだ声で挨拶した。

「初めまして。スーチです」

「ア、アルマ……です」

おっかなびっくりでスーチと握手しているアルマを見ながらラーンが言った。

「スーチはユディ族っていうんだけど、見たのは初めて？」

「え？ はい……」

「後でゆっくり話さないな。いろいろおもしろい話が聞けるわよ。で、横にいるのがカリス族のギメル・アインね。彼はメインのエンジニアをしてくれてるわ。ここのシステムの事実上の責任者ね」

それと共にギメルが立ち上がった。身長は2メートルを優に超えている。

「ギメルです。よろしく」

アルマはほとんど声が出せないようだった。無理もない。その体格と面構えの上に腹の底から響くようなドスの利いた声なのだから。実は大変心優しい男なのだが。

それからラーンはウォンとイオの方を向いた。

「で最後に今来た二人だけど、右にいるのがイオ。左がさっき言ったウォンね。二人ともヒト族。でも明らかに人類の面汚しね」

それを聞いてアルマはくすつと笑った。

「ちょっと！ いくら何でもそう言う言い方は……」

イオがラーンに文句をつける。だがラーンは涼しい顔だ。

「だってあんた達が来る間どうやって間を持たせれば良かったのよ？ 時間通り来てれば問題はなかったのにねえ」

「い、いったい何言ったんですか？」

「大したことは言ってないわよ。休暇の有効な過ごし方についてとか……」

それを聞いて二人は真っ赤になった。

「な何てこと言うんですか！ これはやっぱり個人のプライバシーという……」

「プライバシー？ みんな知ってることなのに？ 彼女はもうここの仲間なのよ」

それを聞いてウォンとイオは互いに指さしながら叫んだ。

「こいつが人を悪の道に引きずり込んだんだ！」

「俺は後半はちゃんと旅行しようと思ってたんだ！」

それを聞いてラーンがにやっと笑って言った。

「どうして週末の過ごし方を話してただけでそんなに慌てるのよ？」

ウォンとイオはラーンに嵌められたことに気づいて、口をあぐりあけたまま顔を見合わせた。その様子を見てアルマはついに声を出して笑い始めた。

ウォンとイオはいったい何とフォローするべきか分からず、ただ彼女を見つめるしかなかった。しばらくしてアルマは見つめられていることに気づいた。彼女は顔を上げると苦しそうに一言言った。

「す、すまぬ」

「？」

「？」

ウォンとイオは一瞬混乱した。すまぬ？ 今のは彼女が言ったのか？

だがラーンも他のメンバーもそのことに関しては全く気にしていないようだ。アルマの笑いの発作が収まると、ラーンは二人に向かって言った。

「ええ、それはそうとあんた達、彼女のことは知らないの？」

二人は顔を見合わせた。それを見てラーンはくくっと笑った。

「まあそんなことだと思ったわ、それで自己紹介は？」

何のことだかよく分からなかったが、まずイオが自己紹介を始めた。

「あ、はい。僕はイオ・クロウリーです。インストラクターをやっています」

次いでウォンが言った。

「あ、ええ、ウォン・リンドゥーです。同じくインストラクターです」

そう言いながらウォンはアルマを眺めた。背の高さはかなりある方だ。髪の毛はやや癖のある赤毛だが、手入れは良い。それに結構スタイルもいいし、微笑んでいるところが何とも可愛い...これはもしかしたらチャンスかも知れない。ウォンがそんなことを考えていると、アルマが答えた。

「お初にお目にかかり申す。妾(わらわ)はアルマ・マートルじゃ。明日よりここにて働かせてもらうことになり申した。よしなにお頼み申す」

「……」

「……」

二人はしばらくぽかんと彼女を見つめた。この娘、いったいどういうキャラクターなのだ？ さっきランが彼女を知らないかとか言っていたが、もしかして芸人か何かなのだろうか？ 少なくともアイドルではなさそうだが……

そんな思いから最初に我に返ったのはイオだった。

「えっと、出身はどちらですか」

「ルフティ・ベイじゃ」

ルフティ・ベイとはこの街のことである。ここは相当変な場所ではあるが、こんな喋り方が流行っているという話は聞かない……彼女は二人のそういった疑問を察したようだった。

「すまぬな。妙な喋り方で。今様な喋り方はおいおい学ぶ故、しばらくは我慢してたもれ」

今様な喋り方？ おいおい学ぶ？ それを聞いて二人は何となく理由が分かった気がした。それを確かめるためにイオが尋ねた。

「ってことは、もしかして君、スリーパー？」

「そうじゃ」

これで疑問は氷解した。彼女がコールドスリーパーであれば、ズレた物の言い方をしてもおかしくない。だが彼女の喋り方はズレているというより、ほとんど古語なのだが……

「でもその言葉だとずいぶん前だよな？」

イオがそう尋ねるとアルマはなぜか悲しそうにため息をついた。

「然りじゃ。妾が眠ったのが4625年であるから、1500年ぐらいになるかな」

「1500年！」

イオは目を丸くした。普通そうだ。こんなに長くコールドスリープしたという話は聞いたことがない。いったい何でまたそんなに長く？

だがウォンの方はそういう風には考えていなかった。彼は彼女が“スリーパー”と分かった瞬間、かっと頭に血が上って見境がなくなっていたのだ。ウォンはこうなると脊髓反射レベルで行動するという悪い癖があった。ウォンは思わず彼女に言い放っていた。

「ふーん。そりゃまた裕福なお家だったんだね」

もちろんこれが誉め言葉のはずがなかった。彼女は訝(いぶか)しそうにウォンを見た。当然ながら彼女にはそんな皮肉を言われる筋合いはない。

「それはいったいどういう意味じゃ？」

アルマはそう言って真っ向からウォンを見返した。そう返されてウォンはさらにかちんと来た。

「聞いての通りさ。そんなお嬢様がどうしてこんな所で働こうってかな？」

普通いきなり初対面でここまであからさまな敵意を見せられると驚く方が先に来そうなものだが、彼女はこの程度で吞まれてしまうような性格ではなかったようだ。

「おのれ、何か妾に恨みでもあるかや？」

アルマは怯(ひる)むどころか刺すような目つきでウォンを睨む。それを見てウォンはますます腹を立てた。

「は！ スリーパーなんて、遊び半分で生きてるような奴だろうが！ そんな奴らにちゃんとした仕事なんかができるのか？ どうせ退屈しのぎなんだろう？」

——ここは少し説明がいるかもしれない。この当時コールドスリープは短期的なものであれば日常的に使われていた。例えば大怪我をして移送しなければならないような場合など、凍らせてしまった方が出血もなく生体への損傷が少なくて済むので、救急カーゴなどでは冷凍化設備が標準装備となっていたりする。

だが長期間のコールドスリープとなるとほとんど存在価値がない代物だった。宇宙飛行の際はワープ航法があるので飛ぶ側も待つ側も寝ている必要などない。また医学も十分に発展しているので未来でないと直らない病気なども存在しない。

そのため長期間のコールドスリープは、現在が嫌になったんで未来へさよならとか、年下の恋人より若くなりたいなどといった、そう言った原則どうでもいい使い道しか残っていなかったのだ。従ってそれを利用する者も限られているし、費用もバカ高い。数十年間利用するだけで結構な金額がかかるのだ。要するに長期コールドスリープとは金持ちの道楽だったのだ。

もちろんウォンが怒ったのは、この時代に生まれた者はこの時代を生き抜くことにより人生の意味を見つけだすべきだ、とかいった高尚な理由のためではなかった。かつて入れ込んだ女にそんな感じで逃げられたという悲しい過去のせいだったのだが.....それはともかく、周囲の者はそろそろ止めなければまずいと感じ始めていた。

だがそれは一歩遅かった。

アルマは唐突にウォンに詰め寄ると、いきなり強烈な平手打ちを食らわせたのだ。いや平手打ちと言うよりは掌打と言った方がいい。ウォンはもんどり打って椅子から転げ落ちた。

次の瞬間アルマはウォンに馬乗りになって胸ぐらをねじり上げていた。

「この下郎が！ おのれごときにそこまで愚弄される謂われはないわ！」

そうやって彼女はウォンの鼻っ柱に拳を叩き込んだ。

あっという間の早業だった。

ウォンは何もできなかった。自分の陥った状況が良く理解できていなかったのだ。その時やっと周囲の者が間に合った。

「やめなさい！」

そうやってアルマを後ろから抱きすくめたのはゼナだった。

「でもこの男！」

アルマはゼナの制止を振り切ってウォンにもう一発食らわそうとした。だがゼナはその腕をしっかりと掴んで再び言った。

「やめなさい」

二回目のゼナの命令には有無を言わせぬ響きがあった。アルマは渋々立ち上がった。

それから数秒間ウォンは床に倒れたままだった。それからいきなり弾かれたように立ち上がるとわめいた。

「このアマ、ぶっ殺してやる！」

ウォンはそのままアルマに飛びかかろうとした。だが今度はギメルにいきなり首根っこを掴まれて宙に持ち上げられた。

「ウォンさん、落ち着いて下さいよ」

「は、離せよ！ ギィ！」

ギメルは当然見かけだけではない。その気になればこの程度のことは朝飯前だ。

ウォンを吊り上げたギメルはミースの方を見ながら言った。

「どうします？」

「もう少しそうしとけ」

ウォンは何とかして逃れようと暴れた。だがその時ウォンの前にミースが立ちはだかった。

「いい加減にしろよ」

ミースはこの支配人をしているだけあって、こういったときには迫力がある。ウォンは一瞬で正気に戻った。それを見てからミースは低い声で言う。

「お前、今月は給料10パーセントカットな」

「え！ そ、そんな！ 殴られたのは俺ですよ」

「殴られて当然だ！ バカ者が！ 考えても見ろ。普通1500年もスリープするか？ 何か訳ありだとは思わなかったのか？」

「え？ あ！」

言われてみれば確かにその通りだ。途端にウォンは滅茶苦茶に理不尽な振る舞いをしていたことにやっと気がついた。

《やべ！ またやっちゃった……》

いつもそうだ。なぜか知らないが彼はここぞというところでこういうヘマをしでかしてしまうのだ。それを悟るとウォンはへなへたとペしゃんこになった。

それを見てミースはギメルに合図をした。ギメルはうなずくとウォンを下ろして元の椅子に座らせた。ウォンはいっさい逆らわずに、まるで空気の抜けた人形のようなようだった。

ウォンの落ち込みようは見ていて哀れになるほどだったが、そういうことは良くあることだったので、呆けているウォンを無視してミースは話し始めた。

「お前らどうも知らないみたいなんで説明しとこう。彼女はいわゆる犯罪被害者で、信じられないような目に会ってるんだ。この間ニュースでもやってたんだがな」

それを聞いてウォンとイオは、先ほどラーンが彼女を見たことがあるかと聞いた意味がやっと分かった。

「これがひどい話なんだな。お前ら、マリア・ヨゼファ号事件を覚えてるか？」

ミースはイオに向かって尋ねた。

「え？ 確か聞いたことがありますね。昔のハイジャック事件でしたっけ？」

「そう。トリスタン行きの宇宙船が乗っ取られて、乗員4500名が全員死亡って奴なんだがな……」

それからミースの語った内容はこうだ。

——元々アルマは30年そこそこのスリープ予定だった。理由は彼女の兄が系外惑星探査に行くためだという。この場合だと通常空間を高速に航行することもあって、固有時間がずれる場合も発生するのだ。アルマは他に身寄りがなかったのも、ちょっと贅沢をして兄の帰りを待つこ

とにしたという。

彼女にとって不運だったのは、ちょうどその時起こったのがこの事件だったということだった。彼女は運悪くその犯人の身分詐称にうまいこと利用されてしまったのである。

この時代当然のことながら戸籍の管理はかなり厳しく、偽の身元をでっち上げるというのはかなり難しい問題だった。なぜなら戸籍のデータベースをクラックすること自体が難しい上、データはあちこちにミラーリングされているため、いい加減に改変するとすぐつじつまが合わなくなってしまふのだ。

しかし既に存在している二人の身元を入れ替えるのであればまだ操作しやすかった。ただしそうは言っても二人でいろいろ示し合わせて、指先の皮膚と“チップ”ぐらいは交換移植していないとお話にならないレベルである。異なった二人が同じ人間であると主張したらやはり即座に問題が発覚してしまうのは当然であろう。

だがもし片方が大変おとなしくしてくれていて、通常の活動を全然しなかったとしたらどうだろう？ その場合は更に話は簡単になってくるわけだ。コールドスリープ中の人間は大抵のことには文句を言わない。こういう操作には打ってつけだったわけだ。

具体的には犯人の一人がコールドスリープに入る手続きをする。同時にアルマを覚醒させる手続きもする。しかし当然ここでアルマを本当に目覚めさせるわけではなく、ここで二人のデータだけを交換してしまうのだ。

こうして犯人は戸籍上は“アルマ・マートル”になって、あの事件を引き起こした。アルマの本体の方はその犯人ということになってずっと眠っていたわけだ。

更に犯人は当然ながらコールドスリープ料金を払うつもりはなかった。そのため管理データを改竄して、彼女は表向き存在さえしていなかったのだ。前にも言ったとおり、コールドスリープとはかなり道楽要素が強い。そのためデータの管理もかなり甘かったのだ。

その結果彼女が“発見”されたのは本当に偶然で、暇を持て余した管理人が数万個もあるスリープボックスを実際に一つずつ数えてみたら、管理データの個数と食い違ったことによる。しかも彼が自分の数えた個数が正しいとしつこく主張したためで、そうでなければ彼女があと何年寝ていたか、誰にも分からない——

それを聞いてイオが驚いた。

「ってことは、記録上は彼女が犯人になってるんですか？」

その質問にミースが答えた。

「その通り。こういう前例がないんで、今彼女の名誉回復でもめているところだ」

「でもその偽物は良く船に乗れましたね。系外に行く時にはチップ確認の他に、普通バイオ照合もしますよね」

「だからやられてたんだよ」

「え？」

「見つかったときはひどい有様だったそうさ。片腕はチップごとちょんぎられて、網膜認証用に目玉まで抜かれてたそうさ」

それを聞いてイオとウォンは返す言葉もなかった。だがその時小声でラーンが割り込んだ。
「ちょっと！ ミース。彼女がいるのよ」

ミースはしまったという顔でアルマを見た。だが彼女はミースに微笑みかけた。

「良いのじゃ。もう。それに新しい目や腕の方が調子も良いしな」

だがその笑みにはかなり無理が感じられる。

「すまん。まあ、そういうことなのだ」

ミースはばつが悪そうにアルマに微笑み返した。イオとウォンは恐る恐る彼女の顔を見る。

「もう慣れてしもうた。今更騒いでもせんなからう？」

こういう状況で返せる言葉などあるわけがない。もっと彼女と親密だったら、ぎゅっと抱きしめてやるぐらいだが……もちろん今のウォンには無理な話だ。

二人は黙ってうなづくしかなかった。

「その上彼女の財産もみんな使い尽くされていてな、今彼女は大変困った状況なんだよ。こういう事情だから生活保護が出ることは出るんだが、それじゃ旅費を貯めるまでにはいかないんでここで働くことになったんだよ」

「旅費？」

イオが訊き返すとミースが答えた。

「ああ。なんでもジェストコーストの、ええと、どこだったっけ？」

「アルガシティーじゃ」

「そうそう。アルガシティー。そこに行くそうだな」

ジェストコーストとは別ドミニオンである。このベレンからは4000光年ほど先だ。従ってさすがにかなりの旅費がかかるのは仕方ない。

「そこに知り合いでも？」

イオが尋ねるとアルマは答えた。

「たぶんおらんじゃろう……でもそういう伝言が残されておったのじゃ。他にどうすればよいというのじゃ？」

そう言って彼女はうつむいてしまった。

「いや、そう言うつもりじゃなくて、ごめん……でもどうしてここで働くことに？ 給料安いのに……」

その言葉でミースは明らかに気分を害したようだ。イオはそれに気づいて慌てて手を振った。

「いや、その、そう言うつもりじゃないんですよ。あはは」

それを聞いてアルマが言った。

「これは妾がお頼み申したのじゃ。どうせならば少しでも知っておる仕事の方が良いのでな」

そこで今まで黙っていたスーチが尋ねた。

「それじゃNSEゲームをやったことがあるんですか？」

「一応な。じゃが1500年も前のことじゃ」

アルマの言葉にイオとスーチは顔を見合わせた。そしてイオが尋ねる。

「1500年前って、ほとんど出だしの頃だけど……いったいどんなのをやってたんです？」

イオの問いにアルマは自信なげに答えた。

「ロクス・エテルナとベラトリックスじゃ」

だが彼女がそう答えた途端にイオとスーチ、ギメル、それにペしゃんこになっていたウォンまでが驚きの声をあげた。それもそのはず。この業界においてその名前を知らない奴はモグリだ。この二つは現在あるNSE(Neuro-signal Emulation)ゲームの元祖のようなものなのだ。

「すごーい！ 本当？」

スーチが思わず立ち上がって言う。アルマは驚いて半歩下がった。

「嘘は言わぬ。じゃが1500年も前のことじゃ……かような知識が役に立つかどうか……」

「たぶん大丈夫よ。だったらすぐ覚えられるわ」

そう言ってスーチは再びアルマの手を握った。

「本当であろうか？」

アルマはおっかなびっくりという感じでスーチの手を握り返す。

「もちろんよ」

「かたじけない……それではお頼み申す」

そう言ってアルマはスーチに微笑み返した。それを見てミースが言った。

「そういうわけなんで明日から彼女がアシスタントで入るからな。しばらくはみんな彼女をフォローしてやってくれ。いいか？」

「はいっ」

ウォンを除いた一同が一斉に答える。ミースは耳聡くそれに気づいていた。

「ウォン！ 返事はどうした！」

「は、はい」

ウォンは今の話を聞いて打ちのめされていた。いくら何でもこれはひどい。ひどすぎる。とにかくまず謝ろう。それしかない。

そう思うとウォンはふらふらとアルマに近づいた。

「あ、あの……」

「なんじゃ？」

アルマは冷ややかな目でウォンを見つめた。

「さっきは、その……ごめん」

「もう気にしておらんわ」

だがその表情を見れば、それが単なる社交儀礼であるのは明らかだった。

〈第2章〉 ファイナルブレード

ウォンはまた約束の時間に遅れそうになっていた。そのため階段の上り口から出た途端に、やってきたアルマにぶつかりそうになってしまった。途端にアルマは強烈な前蹴りを繰り出してくる。ウォンは慌てて避けはしたが、勢い余って尻餅をついてしまった。

「てめえ何しやがる！」

「言うたであろうが！ 妾に寄るなど！」

「お前が勝手に出てきたんだろうが！」

「妾は普通に歩いておっただけじゃ！」

そう言ってアルマはすたすた行ってしまった。

あれから10日ほど経つが、いまだに万事がこの調子だ。ウォンはアルマに近づく度にこういう目に会っていた。異界の門の建物はそんなに広くはない。近寄るなどという方が無理である。

だが、ミース達はどうもこの事態を面白がっているようで、ウォンが泣きついても全然取り合ってくれない。仕方なくウォンはなるべくアルマに近寄らないようにと自衛するしかなかった。

だが今回はちょっと問題があった。アルマが歩いていった方向はウォンの行きたい方向だったのだ。当然ウォンはアルマの後からついていく形になる。

「何故おのれは付けてくるのじゃ！」

「こっちに用があるからだよ」

「そんなもの後にせい！」

どうもアルマはウォンの理由を知らないようだ。ウォンはアルマに尋ねた。

「あのさ。これからスーチと潜るんじゃないの？」

「だったらどうしたというのじゃ！」

「俺も行くんだけど。聞いてないのか？」

「なんじゃと？」

目的の部屋はすぐそこだったので、アルマは中に駆け込んだ。ウォンもその後に続いて部屋に入る。

その部屋はNSEブースにつながるロビーで、中ではゼナとスーチが待ちかまえていた。入ってきたアルマに向かってゼナが言う。

「やっと来たわね。準備はいい？」

「ゼナ殿！ イオ殿はいかがなされた？」

それを聞いてゼナは苦笑いした。

「あ、それがやっぱり都合が付かなくなっちゃってね。でも最初に言ったでしょ。場合によったらウォンに頼むって」

「そういうことはなさそうだとおっただけではないか！」

「最近イオにも固定客がついちゃってね。むげにできないのよ」

それを聞いてアルマはとてつもなく残念そうにため息をついた。

「ううう。何故にこのような男と一緒に潜らねばならぬのじゃ……」

「いやならやめろよ」

「ふざけるでない！ 妾の方が先に約束したのじゃ！ そうじゃ、おのれイオ殿と代わってくるが良い」

「あのなあ……」

それを聞いてゼナが口を挟んだ。

「二人ともいい加減にしてよ。今回はスーちゃんの練習なのよ。これは業務と思ってほしいんだけど」

ゼナはなりは小娘なのだが実年齢はウォン達より遙かに上で、更にはインストラクター部門のチーフである。ウォンにとっては直接の上司だ。

だがそういった立場を越えて彼女の言葉には魔法のように有無を言わせない力があつた。ゼナの一言で二人は黙り込むしかなかったが、ついでにスーチまで緊張して固まってしまった。

「スーちゃんもいい？」

「え？ は、はいっ！」

スーチの声は明らかにうわずっている。

「ねえ、そんなに固くならないでいいのよ。本番形式だけど、あくまで練習なんだし」

「は、はい……」

スーチはこのアシスタントをしているが、現在インストラクターになるための訓練中なのだ。インストラクターとは別名ガイドとも呼ばれるが、要するに客と一緒に入ってゲームを楽しむために様々な手助けをしてやるのが仕事だ。当然アシスタントより高度な技能が要求されるのだが、もちろんその分実入りも良い。

「じゃあいいかしら？ スー、始めるわよ。いい？」

「はい」

「それとウォン、今回はあたし達は“素人”だってこと忘れないようにね」

そう言ってゼナがウォンを見る。

「やだなあ、分かってますよ」

「いつもそう言いながら暴走するから、釘を差してるのよ」

「大丈夫ですって！」

横でアルマがくすくす笑っているのを聞いてウォンは少しむかついた。

「アルマもいい？」

それを聞いてアルマはにこにこしながら答えた。

「良いぞ。なんだかわくわくするのう。じゃが、本当に妾は好きにしても良いのかや？」

「今のゲームを実際にするのは初めてでしょ？ とにかく見てみないと。でもゲーム中はスーの言うことだけは聞くのよ」

「もちろんじゃ」

「じゃ始めましょう」

そう言ってゼナはスーチに合図をした。スーチがうなずいた。

「それじゃ始めます。みなさんいらっしゃい。私が今回ご案内を勤めるスーチ・アインです」

ゼナ、ウォン、アルマの三人は客になったつもりでスーチに自己紹介した。

「これからご案内するNSEゲームは“ファイナルブレード”です。みなさん基本ルールに関してはお読みになって来られましたか？」

三人の代表でゼナが答える。

「ええ。一応」

「でしたら細かいことは中で説明した方がいいですよ。それでは早速入ってみたいと思いますが、その前にみんなの役割だけは決めておきましょう。えっと、何かご希望はございますか？」

それを聞いてアルマがすぐに手を挙げた。

「妾は剣士が良いぞ」

それを聞いて残りは顔を見合わせた。みんなアルマが昔こういうゲームを経験していることは知っていたが、忙しくて具体的な話を聞く暇が全然なかったのだ。

「え？でも剣士って常に敵と接触するんで、初めてだと大変なんですよ。それにこのゲーム、敵が結構強いんで剣士が一番難しいんです」

「さようか？とはいえ妾は剣士以外はほとんどしたことがなくてな」

スーチはいきなり難問を突きつけられて、困ったようにゼナの顔を見た。彼女もちょっと考え込んでいる。その時ウォンが言った。

「やりたいって言うならいいんじゃないかねえの？」

ウォンにとってはこれはなかなかのチャンスに思えた。彼がアルマにいいところを見せる絶好の機会ではないか！そういったウォンの下心を知ってか知らずか、ゼナも言った。

「そうね。じゃあウォンとアルマ、二人剣士でどうかしら？ガイドさん、何か困ることある？」

「え？でもシーフの……あ、そうか、はい。大丈夫です。ただちょっと魔導師が難しくなりますんで、私が魔導師になりますが、いいですか？」

「構わないわよ。それじゃ私が僧侶ね？」

それを聞いてアルマが口を挟んだ。

「何？妾とこ奴が同じ剣士かや？」

そう言ってアルマはウォンを指さす。だがウォンが怒鳴り始める前にゼナが割り込んだ。

「二枚看板の方が戦闘は楽でしょ？」

ゼナはそう言ってしまってから、この言い方では初心者には分からないかもしれないと思い当たった。普通四人パーティーの場合は前面には剣士と盗賊系が入るのが普通だ。危険なところを歩くには盗賊の技能が必要だからだ。だが伝統的に多くの盗賊技能が魔導師の魔法でも代用できる。そのため戦士二人という選択もある。もちろんどちらも一長一短なのだが。

普通ならこういったことを説明しなければならないところなのだが、アルマはそこのところは十分理解できているようだった。

「ふむ。そうじゃな。それに初めての場所じゃ。仕方あるまいな」

それを聞いてゼナ達は、アルマが彼らの想像以上にこういったゲームに慣れているのではないかと思い始めた。

「それじゃ役割も決まったので、こちらにどうぞ」

そう言うとスーチはロビーにつながる部屋の一つに三人を導いた。

その部屋は狭く、真ん中に透明のケースで覆われた細長い装置がある。スーチはそれを指して言った。

「これがNSEブース、すなわち異界への入り口です。そっちの扉はバスルームになっています。ブースに入られる前に用を足される方は足しておいて下さい。それから着ている物を全部脱いで頂いて、そこのロッカーに入れて下さい。ゲームは短くても数時間、長ければ数日に及ぶ場合もございます。ですのでその間本体の方も栄養を取ったり排泄する必要がございます」

それからスーチはブースのカバーを開いた。

「ではブースへの入り方を説明します。まずここの部分にまたがるように乗って下さい。それから右にある赤いスイッチをオンにして下さい。そうしますと股間にこれが自動的に装着されます。ちょっと変な感じがするかも知れませんが、すぐに慣れます。装着が終わると自動的に後ろのシートが倒れます。それから首から背中にかけて神経接続シールが張り付きます。前面パネルのバーが青くなるまでなるべく体を動かさないようにしてください。でないと神経接続が失敗することがあります。それから人によっては接続時にかゆみを感じる場合もありますが、そういう経験をされた方はいらっしゃいますか？」

それを聞いてアルマが言った。

「妾は結構そういうことはあったが……」

「あ、たぶん大丈夫よ。これってマニュアルに書いてあって、言っておかないといけないの。スキン作るときにちょっと入ったんでしょ？」

「ああ。あの時はなんともなかったな」

「スーチちゃん。アルマはお客様よ。マニュアルのことなんて言っちゃだめよ。それに馴れ馴れしすぎるわ」

「あ、すみません。えっと、問題はまずございません。ただかゆくなったり痛みを感じたりした場合は掻いたり引っ張ったりしないで、すぐその呼び出しスイッチを入れて下さいね」

「分かり申した」

「最終的に接続は5分ぐらいで完了します。前面パネルに接続状態が表示されます。この状態では絶対に背中の中のシールを引っ張ったりはがしたりしないで下さい。シールから出た大量の微細な繊毛が神経に接続していますので、最悪の場合神経を傷つける恐れがございます。よろしいでしょうか？」

三人は神妙にうなずいた。実際このシステムはこの部分が一番気持ち悪いところではある。だが実際にはシールをはがした所で繊毛がちぎれるだけで滅多に危険はないのだが、事故例がゼロではないので注意するに越したことはない。

「皆様の接続が完了したらこちらから合図を致します。そうしたらまず眠気を感じますが、安心してお眠り下さい。次にお目覚めの時は皆様はタウンの宿屋にいらっしゃるはずですよ。ゲームのルールに関しては、今回は私が同行しますので私に聞いて下さい。皆様方だけで行かれる場合は、酒場のバーテンがなんでも教えてくれるはずですよ。えっとそれで、一つだけ忘れてはならない呪文がありますが、おわかりですか？」

そう言ってスーチはアルマを見た。

「システムコマンドのことかや？ 確か『我が名はアルマ・マートルなり。ここに真の名を以て異

界の扉を開かん』じゃな？」

「はいそうです。その呪文を唱えると『我は汝の望みをかなえよう。汝の望みとは？』という声がします。ゲームから抜きたいときやセーブポイントから再開するときはここで終了したいとか再開したいと言って下さい」

「この呪文は妾の知っておるものと同じじゃな」

それを聞いてゼナが答えた。

「ロクス・エテルナは今のゲームの先祖みたいな物だもの。他にも共通点は多いと思うわよ」

「それは心強いのを。で、そろそろ入って良いのかや？」

アルマは入りたくてうずうずしているのが一目瞭然だ。

「あ、最後にもう一点だけ。戻ってこられたときの注意ですが、場合によっては汗をかいていたりして気持ち悪いこともあります。接続シールをいきなりはがしたりはしないで下さい。右のスイッチをオフにするとシートが戻り、切断処理が始まります。これも前面パネルに進行状態が表示されます。終わったら自動的にシールが剥がれますので、それからバスルームにどうぞ。これで説明は終わりますが、何かご質問はありませんか」

スーチはそう言って三人を見た。もちろんあるはずがない。

「それでは……本当はチケットに書いてある番号のブースにどうぞ、なんですが、今回はチケットはないので、アルマさんが12番、ゼナさんが14番、ウォン君が15番、私が18番です」

「ふむ。それでは中で会おうぞ」

そう言うとアルマはさっさと自分のブースに入ってしまった。他のメンバーはちょっと顔を見合わせたか、すぐにめいめいのブースに消えていった。



ゲームへの接続はスーチの説明通り全く問題なく成功した。

気がつくとアルマは薄汚れた宿屋の一室にいた。そこで横にいきなり見知らぬ女性がいたので彼女は少し驚いた。

「あの、調子はどうですか？」

アルマはその喋り方で彼女がスーチだと分かった。

「おお？ 汝がスー殿かや？ 見違えておるのう」

「ユディ族のスキンなんてないんで、中だとなっちゃうんです」

「ふむ。動きで困ることはないのかや？」

「ないこともないんですが、もう慣れました。そのうちギィにネイティブなデータを加えてもらおうと思うんですが、なかなか忙しくて」

NSEシステムとは要するに神経の信号を途中でフックすることで完全な仮想現実を実現するシステムである。感覚神経に偽の信号を与えてやることで、現実には存在しない世界を完全に実感させることができる。また運動神経への出力を解釈することで、仮想現実内の体を動かすことができる。この仮想現実内の体が“スキン”と呼ばれていた。

このスキンであるが、人の脳というのはやはり自分の体を操作するのに最適にできている。そのためまず各プレイヤー専用のスキンを用意する必要があった。

もちろん同じ人間の物であれば他人のスキンでも使えないことはない。しかし他人のスキンだと同種同性であっても結構な違和感がある。種族までが異なると身体感覚は耐え難いまでに異なっていると言って良い。だがスーチの属するユディ族ここでは少数種族なのでユディ族用のスキンは元々存在していなかった。彼女が今こうしてゲーム内にいられるのは、彼女が多大な苦労と特別な調整を行った結果、何とかヒト族ベースのスキンを扱えるようになっていたからだ。

二人がそういった話をしているところにウォンが現れた。彼の姿はチェーンメイルを着込んではいるが、実世界のウォンの姿そのままである。

ウォンは二人に向かって言った。

「おう、調子は？」

「どうもないわ。おのれがおらなんだらもっと良いがの」

「お前じゃなくてスーに訊いてるんだけど」

「なんじゃ？ 喧嘩を売る気かえ？」

いきなり雲行きの怪しい二人を見てスーチが慌てて言った。

「あの、二人とも、その、これから一緒に冒険するんだし……」

「分かっておるわ。スー殿には迷惑はかけぬ故、安心するが良い」

「あの、そういう問題では……」

そのときやっとゼナが現れた。ゼナは一瞬で状況を見て取ったようだ。彼女は二人ににこっと微笑みかける。それで十分だった。二人はややひきつきり気味に笑い返すしかなかった。

それを見てスーチはほっとため息をついた。それから気を取り直したように言った。

「みなさんお揃いになったようですね。体の調子はどうですか？ どこか動きとか感覚がおかしいところはありませんか？」

それを聞いてアルマが答えた。

「うむ。今回はどこも悪くなさそうじゃな。前はよく片腕が動かぬようなことがあったが」

「そ、そうなんですか？」

そう尋ねるようマニュアルには書いてあるものの、スーチはそんなトラブルが実際に起こったという話は聞いたこともなかった。だからアルマがさらっとそう答えたので驚いてしまったのだ。

スーチはゼナに突っかれて先を進めた。

「あ、それじゃこの部屋の説明をします。ここは宿屋です。ゲームを開始したらまずここに出きます。またゲーム中に完全に死んでしまった場合もここに現れます」

「ほう？ ならばここには冥界はないのかや？」

アルマの問いにスーチが訊き返した。

「冥界？」

「エテルナでは、死んだ場合は冥界に送られてな、そこから連れ出してもらえるか、仲間が全員死ぬまではそこにおらねばならなかったのじゃ。これだとすぐ戻って行けそうじゃな」

「へえ、そうだったんですか？」

それを聞いてゼナがついに口を挟んだ。

「ちょっと！ スーちゃん！ あなたがいちいち感心してどうするのよ。そういうのってお客様に不安を与えるのよ。相手が悪いとなめられて言うことを聞いてもらえなくなるわ。減点ね」

「あー、そんな……」

「はい。引き続き！」

ゼナの言葉にスーチは慌てて続けた。

「はい。えー、だから、そういうわけで冥界はありません。で、えっとそれじゃゲームを始めてみましょうか。このゲームの場合、最初は目的が定まっていません。そのため初心者の方は途方に暮れてしまう場合もあるんですが、そういう場合はまず誰かと話をしてみるのが基本です。ではまず下におりましょうか」

階下は酒場になっているようでたくさんの人の歓談する声が聞こえてくる。スーチは扉を開けて三人を階下に導いた。

階下は多くの冒険者達でごった返していた。

「結構混んでいますね。とりあえず席をみつけましょうか。それから情報集めの基本を実演して見せますね。えっと席は……」

「あっちで空いたぜ」

ウォンの言う方を見ると丁度四人の客が出て行くところだ。

「じゃあ、あそこに行きます。付いてきて下さい」

そういいながらスーチは人混みをかき分けて空き席に向かった。席を確保するとスーチは振り向いて説明を続けようとした。

「さて、まずこういうゲームで最初にしなければならないことは……って、アルマは？」

ゼナとウォンは付いてきているがアルマの姿がない。

「あら？ さっきまで後ろにいたのに……」

ゼナも驚いてあたりを見回した。

その時だった。派手な音と共にテーブルがひっくり返って男が一人床の上を転がっていった。

「ケンカだぞ！」

「ああ、お客さん！ 店の中でやめて下さい！」

三人は顔を見合わせる。こういうところでは良くあることだが……

「ははは！ NPCの分際で妾に楯突くからじゃ！」

「このアマ！ 言っているいいことと悪いことがあるぞ！」

「悪かったらどうだというのじゃ？」

あの声は……

三人は顔を見合わせると、慌てて野次馬をかき分けて声のした方に行った。

果たせるかな、そこではアルマが四名の屈強な男に取り囲まれている。男達は手には剣を構えているが、アルマは素手だ。

「ほう？ やる気かえ？」

だがアルマは全然動じていない。状況が分かっていないはずがない。だとするとよっぽど自信があるのだろうか？

「あのバカ、何やってるんだ？」

「ど、どうしよう？ ウォン君」

「まあ、身から出た錆って奴だね」

「そんなこと言ってないで……」

「ああいう身勝手な奴はちょっと痛い目に遭った方が身のためだぜ。それこそ1500年前の技なんて通用しないって思い知ったら、もちっと大人しくなるんじゃないの？」

「だめよ！ そんな！」

スーチは慌てて助けに入ろうとした。だがウォンが余裕たっぷりにそれを引き留める。

「まあ待てよ。俺に任せてなっ」

あの程度のチンピラが人を即死させることはあり得ない。またあいつら程度ならウォンであればいかようにも料理できる相手だ。

だからウォンは一番格好良く登場できるタイミングを見計らっていたのだ。

「このアマ！」

男達は一斉にアルマに斬りかかった。

「きゃあああ！」

スーチが顔を覆う。さてそろそろウォンの出番のようだ。

「おいおい、スー。お前今ガイド様だろ？ ちゃんと前を見て……」

だがそこまで言ったところで、ウォンはあぐり口を開けたまま動けなくなってしまった。横では同様に短剣を構えたゼナが目丸くしている。

アルマの様子を見ればこういう場面の経験が豊富なのは分かるが、ファイナルブレードの敵はザコといえども侮れない。だからウォンの予想ではアルマは最初の一人の攻撃ぐらいはかわすだろうが、すぐに店の隅に追いつめられて動きが取れなくなるはずだった。そこでおもむろに出て行ってアルマに恩を着せながらゆっくりと啖呵を切る予定だったのだが……

ところが男達が襲いかかったとき、アルマは身をかわす代わりにそのうちの一人に組み付いていったのだ。アルマはそのまま男の手首を取って剣を防ぐと、顎にパンチをたたき込んだ。男はそう出られるとは思っていなかったのだろう。見事にのけぞってそのまま失神した。

それからアルマは男の剣を奪い取ると、その後ろの男達に襲いかかる。見る間に二人が血を吹き出しながら悶絶する。

人々が息を呑み込み終わったときには、彼女は最後の男の喉元に切っ先を突きつけていた。まさに一瞬の出来事だった。

「なんじゃ？ 口ほどにもない！ その程度の腕で妾に楯突こうとは、片腹痛いわ！ あっはっはっは！」

男は真っ青になっている。誰も啞然として口を開かない。その時アルマがスーチ達に気が付いた。

「おお、スー殿、どうなされたのじゃ？」

名前を呼ばれてスーチは慌てて答えた。

「どうしたのって、あなたこそいきなり」

「ああ？ こいつかや？ これはな、ここでも昔良くやったガン付けが効くかどうか試してみたのじゃ。変わっとらんのを」

「えっと、あの、その……」

「そうじゃ。こ奴から何か聞き出せぬかな？」

「ええ？ いえ、あの……」

パニックになっているスーに代わってゼナが口を挟んだ。

「一体何を聞くって言うの？」

「こうするとな、どうでもよいことまでべらべら喋る奴が結構おるではないか」

「ちょっと無理じゃない？ 見てごらんなさいな」

アルマが男をみると、男は真っ青になってがくがく震えている。

「ほう？ どうしたのじゃ？」

「た、助けて……」

「言うことはそれだけかや？ 何か宝物の在処などは知らぬのか？」

そういうとアルマは剣先で男をつつく。

「や、やめてくれ！」

男はへなへなと地面に崩れ落ちた。

「なんじゃ？ おのれはそれでも男かや？ 恥を知れい！」

そう言ってアルマは男の両足の間に持っていた剣を突き立てた。

「ひい！」

それを見て男は気絶してしまった。

「ふうむ。なんと軟弱な……まあこんなおもちゃみたいな剣に似合いじゃな。どうしようもないのう」

それを聞きながらゼナとウォンは顔を見合わせた。どうも彼女に自由にやらせておくと、何をしでかすか分からないようだ。

「とにかくこっちにいらっしゃい。喉乾いたでしょ？ 何か飲まない？」

スーチが完全にパニックになっているのでゼナが代わりに言った。

「おお、そうじゃな」

四人はとりあえず席についてワインとチーズを注文した。

注文した品が来るまでの間にゼナはスーチにささやいていた。

『ちょっと、しっかりしなさい。あなたがガイドなのよ』

『で、でも……』

『予想外のこつてのはいつだってあるわ。ともかく今はどうすればいいの？』

『え？ あの、とにかくあまり羽目を外さないようにしてもらおうのと……』

『それから？』

『え？ ああ、彼女、あんなに強いなんて、その、ちょっとバランスが悪いかなって……いくら何でもあれは……』

『分かってるならいいわ。すべきことをするのよ』

『は、はい。でもどのぐらい上げたらいいいんでしょう？』

『それはあなたが判断するの』

『は、はい……』

スーチは小声でゲームのレベルを上げるためにギメルに通信を取り始めた。

その時ウェイターがワインを持ってきた。四人は早速乾杯をした。

「おお、これは美味じゃ。まるで本物のようじゃ」

それを聞いてウォンが答える。

「あたりめえだろ。それとも昔のってそんなにまずかったのか？」

「ああ。味だの臭いだのはかなりいい加減じゃったな。ワインなんぞは砂糖水のような味がしておったぞ」

「へえ。じゃあずいぶん今のって進歩してるんだ」

「そうじゃな。このテーブルの質感なども全然違うのう」

そのときスーチが通信を終えて顔を上げた。

「それはそうとアルマ、あなたとってもすごいのね」

「ええ？ そうかや？」

「一人で武器もなしに四人相手なんて、心臓が止まるかと思ったわ」

「いや、あやつら口の割には動きが鈍そうじゃったのでな」

それを聞いてゼナとウォンは顔を見合わせた。アルマはこの短時間に本当にそんなところを見抜いたのだろうか？

「そうよね。たまたまあいつらがザコで良かったわ」

「やはり、そうであったか？」

「そうなのよ。口ばかりで実力の伴わない奴ってのはどこにでもいるのよね。だからもうあんなに危ないことしないでね」

「ふうむ。すまぬ。ついはいやいでしもうたようじゃな」

「違うの。これで油断しないでねってことなのよ。今度出会う敵があんなに弱い保証はないから……でね、これからすぐ武器屋に行った方がいいと思うの。こんな騒ぎを起こしたらもうしばらくはトラブルの方からやってきてくれるわ。なのにあなたは武器も防具もぜんぜんないし」

「ふむ。道理じゃ」

彼女は今回が初入りなので、手元には本当に最低限の物しかない。服装といえば普通の村娘のようななりで、武器も小さな短剣があるだけだ。

「他の方もいいですか？」

アルマが同意したのでスーチはゼナとウォンに向かって言った。もちろん二人に異存のあるはずはなかった。この調子だとしばらくは喧嘩の売り買いが頻繁に起こりそうだ。さっさとアルマを武装させておかないと大変である。願わくば武器屋に行くまでの間に襲われないことを祈るのみだ。

世の中たまには祈りが通じることもあるようだ。この街の武器屋は宿屋から少し離れた区画にあるのだが、一行が行きつくまでの間には運良く悶着は起こらなかった。

「着いたわ。ここよ」

スーチは安堵のため息をつきながら一行を中に案内した。中に入ったアルマは感動したように

つぶやく。

「ほう。えらく高そうな物まで揃っておるな」

「あ、このゲームでは武器屋はここだけなんです。ショートシナリオ専門なので」

「ああ、なるほどな。で、妾はいかほど使えるのじゃ？」

「あ、えっと、2000ゴールドあるわ」

それを聞いてアルマは驚いた。

「そんなに使っても良いのかや？ かなり良い物が買えそうじゃが……」

「今回は初心者という設定なんで、初期の資金がたくさんあるの。それにあかし達の装備は、この間買ったのがあるし」

「そうか、ではおい。おやじ！」

アルマは店の奥にいた無愛想な親父に話しかけた。

「何だ？」

「そこな武器を手にとって良いかな？」

「ちゃんと戻しとくならな」

それを聞いてアルマはつつかと迷わずレイピアやエペ等の打突剣のコーナーに向かった。

それを見てウォンは思わず言った。

「ああ。おまえそんなのを使うのか？」

「使ったら悪いかや？」

「いや、それって突くしか脳がないだろ？ あっちのソードの方がいいんじゃないの？」

「最初はこれが軽いから、これが良いのじゃ」

「は？」

ウォンはアルマの言ったことがよく分からなかった。アルマは壁に掛かっている中からすらっとしたレイピアを下ろして手に取った。

「？」

だが彼女はそれを何度か振ってみて不思議そうな顔をした。

「どうしたの？ アルマ」

スーチがそれに気づいて尋ねる。

「いや、ちょっと軽すぎるのでな。そんな業物にも見えぬが……」

「どれ？」

アルマはスーチに剣を渡す。スーチは剣を振ってみたが何ら変わったところはない。

「こんなものじゃないの？ ねえ、ウォン」

今度はウォンがスーチから剣を受け取ったが、やっぱり同じだ。特に変わったところはない。普通のレイピアだ。

「そんなに軽いか？」

「まるでアルミでできているようじゃ。折れたりはずまいな？」

それを聞いてスーチはやっと思い当たった。

「あ、それ、実物の重さよりはるかに軽くなってるのよ」

「なんと？ それはまたどうして？」

「どうしてって、重いと扱いにくいからだと思うけど……」

それを聞いてアルマはしばらく考え込んだ。

「ふうむ。あの軟弱者の使っていた剣も、まがい物だから軽かったのではないのじゃな……ならばもう少し大きな剣でも良いのであろうか？」

そうやってアルマはレイピアを棚に戻すと隣の壁にかかっていたフラムベルジュを手を取った。巨大な両刃の剣で、歯が鋸のようになっている。だがアルマはそれを片手で振り回した。

「ふむ。これで丁度良いな。価格も手頃じゃし。いきなりパワーアップした気分じゃ」

「ええ？ いいの？ それ両手剣よ」

「とりあえずこれでやってみたいのじゃ。不都合であれば戻せばよかろう」

「いいんならいいけど……」

それから今度はアルマは防具のコーナーに行ってレザーアーマーを物色し始めた。

「ねえアルマ、残っている金額ならスケールメールでも買えるわよ」

「あれはかちゃかちゃうるさくてすぐ見つかるので嫌いなのじゃ。火を噴かれたときにも焼け付くしな」

「そう？ ならいいけど……」

このあたりの手際はウォンやゼナも口出す隙がなかった。そのころにはみんなもしかしたらアルマはゲームに慣れているというよりは、実は非常に熟達したプレイヤーなのではと思い始めていた。

果たせるかな、それはすぐ証明されることとなった。

一行が買い物を終わり武器屋から出てきた時だった。

「こいつらだ！ こいつらだ！」

そういう声と共に多数の男達に取り囲まれてしまった。男達は20名以上はいるだろうか？ それを見てアルマは驚くどころか喜びの声をあげた。

「おお、スーチ殿の言った通りじゃな！ ついに出てきおったか」

だがスーチの方は肝を潰していた。

「ど、どうしてこんなに出るの？」

そのつぶやきをゼナは聞き逃さなかった。彼女はスーチにささやいた。

『ちょっとスーチちゃん。どういう調整したのよ？』

『敵の能力クラスをエキスパートにして、それから出現レベルを4上げてって……』

『4？ そりゃいくら何でもやりすぎよ。敵は5割増で増えていくのよ』

『え？ 2割増じゃ？』

『それはダークブレード』

「ああ！」

スーチは思わず声を出して叫んでしまった。それを聞いてアルマとウォンがスーチの顔を見る。

「どうしたんだ？ スーチ？」

ウォンの問いにスーチはしどろもどろで答える。

「え？ ちょっと、その手違いが……」

「ああ？ どんな？」

「その、7～8人ぐらいのつもりが、20人ぐらい出ちゃったの……」

「なんだって？」

ウォンもそれには驚いた。ウォンはスーチがレベル調整していたことには当然気づいている。そうした敵がこんなに出てきたとあれば、相当マジになってやらないとやばいかもしれない。

だがアルマは相変わらず平然としている。

「なんじゃ。そんなことかや？ やっつければ良いではないか」

「ええ？ でも……」

スーチは目を白黒させている。

「アホ！ 簡単に言うけどな」

「何じゃ？ おのれは怖いのか？」

「誰が怖いか！」

「ならば良いではないか！」

「あのなあ、こんだけいたらお前をフォローしきれないっての！」

「おお？ フォローじゃと？ そりゃまたご親切に。だが結構じゃ。おのれの命の心配だけしておれ！」

「寝ぼけるな！ こいつらはさっきみたいなザコじゃねえの！ 死ぬぞ！」

「それはおもしろいわ。久々に暴れられるというものじゃ！」

スーチとゼナは何とか取りなそうかと考えていたが、もはやこれは処置なしである。

その時男達の中からリーダーとおぼしき男が前に進み出た。他の奴らより一回り大きく、見るからに強そうだ。

「ああ、てめえか？ 酒場でうちの子分をシメてくれたアマってのは？」

それを見てまるで当然のようにアルマが進み出る。

「ほう。おのれがあのお弱者の親玉かえ？」

「何だと？」

「ふうむ。見かけ通りに頭の悪そうな奴じゃ。どうせ話しても通じぬのじゃろう？ だったら、さっさと有り金おいて立ち去れい。さすれば命までは取らぬぞ」

なんだかどちらが悪役か分からない。

「な、なんだと？ このアマ！」

「せっかく人が友好的に話しておるのに、物の道理の分からぬ奴らじゃ」

はっきり言ってこの場合、道理は相手の方にある。当然ながらそれを聞いて親玉は真っ赤になった。

親玉は剣の柄に手をかけると部下に指令を出そうとした。

「てめえら、このアマをやっち……」

だが親玉はそれ以上のセリフを言うことはできなかった。なぜならその時親玉の開いた口にはアルマのフラムベルジュが突き刺さり、胴体はウォンの大剣でまっぴたつに両断されていたためである。これではちょっと続きは言えないだろう。

そしてアルマとウォンは驚いたような顔で互いに見つめ合っていた。

これだけ人数差のある戦いでは敵の頭をまず取るしかないが、戦いが始まってからでは困難だ。先手を取るにはあのタイミングしかなかった。こういった瞬間を見切ること、それは剣士に最も必要とされる能力だ。

そして互いにその瞬間を逃さず完璧に行動したことは疑いようもなかった。しかも最初の一撃で倒し損なうと状況は更に悪くなるが、共に十分にその目的を達していたことは明らかである。

この瞬間二人は互いに認め合わざるを得なかった。

それからアルマはウォンにこっと笑いかけた。

「ではそちらの半分、頼むぞよ」

「おう！」

ウォンは何だか知らないが最高の気分だった。

その言葉と共に大乱戦……というより大虐殺が始まった……

〈第3章〉 アルガシティー

その日の夜遅くに下界に戻ってからは、ゼナは落ち込んでしまったスーチを慰めるので精一杯だった。はっきり言って今回のプレイはスーチの初心者誘導訓練にはならなかった。

「ねえ、スーちゃん、気を落としちゃだめよ」

「でも……あたし全然自信がなくなってきました」

「あなたは良くやってたわ。あたしだって今回はどうしようもなかったのよ。こんなのリブシェとジシュカがぶっ飛んで以来よ」

「そ、そうなんですか？」

「その上完全な不意打ちだし。だからあなたはもう忘れちゃった方がいいわ。ビギナーガイドの練習はまたしましょう」

「ううう……でも……」

その時隣の部屋からアルマとウォンが大声で喋りながら出てきた。

「なに？ 33匹じゃと？ おのれ！ 5匹足りぬわ！」

「はっはっは！ 俺の勝ちだな！」

「ふん！ 妾はここは初めてじゃ！ 負けて当然じゃ！」

「でも負けは負けだよな。100アウルム出しな」

「おのれ、本気で妾から取り立てる気かや？ 何と業晒しな奴じゃ！」

「お前こそ約束破る気かよ！」

二人はぎろっと睨み合う。その後二人はどっちがたくさん敵を倒せるか競争を始めた挙げ句そんな賭までしていたのだ。

それから二人がまたわめき始めようとしたときゼナが割って入って、いきなりウォンの耳たぶをひねり上げた。

「うあああああ！ 何しやがる……んでしょうか？」

ゼナの表情が本気で掛け値なしに心の底から怒っている時の物だとウォンが分からないはずがない。

「アルマ、ちょっとスーちゃんと先に行行っててもらえる？」

「あ、はい」

アルマもその表情に一瞬たじろいだが、それが自分に向けられたものではないと分かると、すぐにウォンに向かって舌を出してからスーチと一緒に行ってしまった。ウォンは何か言いたかったが、ゼナに耳をひねられたままだ。

二人が見えなくなるとゼナはきつい声でウォンを叱りつける。

「ちょっと！ あなた何年インストラクターやってるのよ！」

「え？ でも今回は……」

「そうよ！ 今回はスーちゃんの訓練だったわよね？」

「え、まあ、そうですが……」

「だったら何なのよ。このお祭り騒ぎは！」

「え？ いや、だってアルマが突っ込んでくし……」

「アルマはいいのよ。でもどうしてあなたまで一緒に突っ込んでくのよ？」

「いや、その……」

「ああいう場合もっと他にやりようがあるでしょ？ あなたがアルマを抑えてくれても良かったし、黙って退いてスーちゃんに任せてもいいし。ぶち切れてるのがせめて一人だけだったらスーちゃんでも何とかできたかもしれないでしょ？」

ウォンはアルマにつられて街を破壊しまくった以上、反論のしようがなかった。

「その、すみません」

ゼナはウォンの耳を離すとため息をついた。

「ウォン。あなたの技術はみんな認めてるのよ。でもこういうところがイオ君に遅れてるの。だから本当に気をつけて欲しいのよ」

ウォンは返す言葉がなかった。

そんな調子でウォンがしぼられながらミーティングルームに戻ると、もう深夜零時近いというのに先に戻ったスーチとアルマの他に、イオ、ギメル、それにランまでが残っていた。

二人が部屋に入るとちょうどイオがアルマに言っているところだ。

「……てすごかったじゃない。びっくりしちゃったよ」

「それほどでもないと思うがのう……」

「ファイナルブレードってレベルが上がると急激に相手が強くなるんだよね。ギメルなんか絶対死ぬって言ってたけど。ウォンだったらともかくね」

それを聞いてギメルも言う。

「絶対外からは手を出さなされて言われてたので、気が気じゃありませんでしたよ」

その時入ってきたウォンが割り込んだ。

「なんだ？ お前何でこんな所にいるんだよ？」

「今回は早く終わったんだ。帰ろうと思ったらギメルに引き留められてさ。でもすごかったじゃないか。剣聖ウォン様が新人に5ポイントしか勝てなかったって？」

「うるせえなあ！ ほっとけ！」

それを聞いてアルマがウォンを驚いたように見つめる。

「何？ こ奴が剣聖だとな？」

「ん？ 知ってるの？」

「ロクス・エテルナの称号ならばな。最も強く最も高潔なる者に与えられる称号じゃったが」

「あ、こっちのも何かそんな感じだね」

イオがにやにやしながら言う。

「ほう？ で、そのような高潔なるお方が妾から100アウルムふんだくろうとしておるのかや？」

「賭けようって言ったのはてめえだろ！」

ウォンはアルマをにらみ返した。

「哀れな初心者の娘に対して本気を出してからに！ 最初は花を持たせるのが当然であろうが！」

「敵ボス瞬殺しといてお前、何が初心者だよ！ 図々しいっての！」

それを聞いてラーンが突っ込む。

「ああ？ ウォン君？ 給料日はまだなんだけど、無一文の子からお金を巻き上げようとしてるのかしら？」

ウォンはあたりを見回した。だが味方になってくれそうな奴はいない。

「……わかった、わかったよ」

ウォンがそう言った途端だった。

「うむ。おのれはなかなかうい奴じゃな。まあ今までの非礼も含めてこれで我慢しておれ」

アルマはそう言ってウォンにパック入りのコーヒーを投げて寄越したのだ。ウォンは慌ててそれを受け取ると反射的に礼を言ってしまった。

「あ、サンキュ……」

それからしばらく考えてからウォンは叫んだ。

「今までの非礼？ 何発もぶん殴られた代償がこんだけかよ？」

ウォンはアルマに詰め寄った。その途端にアルマはウォンの手をねじり上げる。

「いてえええ、うああ、折れる！」

「おのれは、誰が近寄って良いと言うたかや？」

ウォンはぶつくさ言いながらアルマから一番離れた席に退散した。やられた割にはあまり腹が立たないの不思議がりながら。彼はそういうことは疎かったので、このあたりのアルマの行動の意味に気づいたのは、それからずいぶん後のことだった。

そんなウォンのささやかな幸せなど他のメンバーにはどうでもよいことだった。みんな興味があったのはもちろんアルマの方だ。

「それにしてもアルマ、見てたわよ。あれってプロ並みじゃない？ 昔のこともっと聞かせてちょうだいよ？」

ラーンがまず尋ねる。続いてゼナも尋ねる。

「やったのはロクス・エテルナとベラトリックスって言ってたけど、本当にそれだけなの？」

「妾の時にはそれしかなかったのじゃ。ただずいぶんやったのは確かじゃな。ロクス・エテルナは5回ぐらい通したかの」

「5回？」

ウォンとスーチを除く全員が一斉に言った。それを聞いてスーチがギメルに尋ねる。

「え？ それってそんなにすごいの？」

「ロクス・エテルナって、クリアまでには全速でプレイしても半月はかかるんだよ。普通のペースだと1～2ヶ月はかかると見た方がいい」

「へえ！」

ギメルの答えを聞いてスーチは目を丸くした。これは現在の基準から言うと極めて大規模なゲームということになる。

だがそれを聞いてアルマはぼかんとした顔で言った。

「いや、慣れれば1週間で何とかなるぞよ」

「そんなにやってたの？」

ゼナが驚いて尋ねる。

「だからそれしか無かったのじゃ。4～5回目になるとほとんど惰性じゃ。他にあればそっちをやっておったわ。それにシステムのテストのためにも何度も繰り返す必要があったのじゃ」

アルマはみんながどうしてそんなに驚くのかよく分からない風だった。だが突っ込みは更に続いた。

「システム？ テスト？」

今度はラーンが不思議そうな顔をして尋ねる。それに対してアルマはさらっと答える。

「パラシータ通りのアジトにNSEシステムを入れたのじゃが、その時まともに動かせる物はロクスしかなかったのじゃ。だから妾はタダでやりまくることができたのじゃが」

「えっ？ パラシータ通りのアジトって？ まさか……」

ラーンの顔がますます真剣になっていく。

「ああ、すまぬ。チームDXの開発本部じゃ。カイと妾がおったところじゃ。カイがロジックを担当しておったのじゃ。妾はずっとテストプレイと言いつつ遊んでおった」

「チームDX？」

それを聞いて今度は全員が突っ込んだ。その剣幕にアルマもたじたじとなる。

それも仕方ないだろう。チームDX。NSEゲーム業界でその名前を知らない者はいない。例えて言えば物理学者にとってのインシュタインに相当するとでも言えば分かりやすいだろうか？ そして、先週雇ったアルバイトが『一般相対論を作るときお手伝いしてました』と言っているようなものなのである。

「いや、隠すつもりではなかったのじゃ。ただ何となく言いそびれてな」

しどろもどろのアルマにラーンが更に尋ねる。

「じゃ、テストプレイしてたってのは、ベラトリックス？」

「ベラトリックスが動き出してからは、そうじゃ。あのころはパンタシオと言うておったが」

そして宇宙を語るときには相対論が欠かせないように、現在のNSEゲームを語る時チームDXの作った“ベラトリックス”というゲームを抜きにしては語れないのだ。現在当然のように使用されている様々な仕組みがこのゲームによって確立されたようなものなのだから。

「何でもっと早く言わないのよ！」

ラーンが叫んだ。アルマは小さくなって答える。

「でも、1500年も前のことじゃ！ スリーパー社会復帰センターの者も、そんな昔の技など今の時代には全く通用せんと言うておったし……」

確かに一般論としてはその通りなのだが……

「まあ、とにかくこれで分かったわ。上手なはずだわ」

ゼナがつぶやいた。ベラトリックスのシステム開発時のテストプレイヤーであれば、当然と言えば当然である。

謎が一つ解けて全員が納得した所で、スーチがぼそっと言った。

「あの。でもそれだったら、アシスタントとかじゃもったいなくないですか」

それを聞いてゼナがはたと手を打った。

「そういえばそうよね。アルマ、あなたインストラクターをやってみる気はない？」

アルマはぼかんとした顔で問い返す。

「あの、いま一つよく分かっておらぬのじゃが、インストラクターとはゲームの中でいったい何をしておるのじゃ？ 妾の頃にはそのようなものはなかったのじゃが……スー殿がされておったような案内かや？」

「それも一つの仕事だけど、それだけじゃないのよ。他にもエキスパートゲームでのサポートとか、ゲームマスターをする場合もあるの」

「？」

そこでゼナはインストラクターの役割について説明を始めた。

「インストラクターっていうのは、スーちゃんがやってたのを見れば分かるように、まずは初心者誘導の仕事ね。お客様に何度も来て頂くためには、このゲームがおもしろいって思ってもらえないとだめでしょ？ そのためには上手な誘導がとても大切なのよ」

「ふむ。それはそうじゃな」

アルマはうなずいた。それを見てゼナは続けた。

「でもね、それだけじゃなくて今度はとても難しいゲームをプレイするときにもインストラクターが必要なの。エキスパートゲームって言うけど。そういうところに一緒に行ってあげて、プレイヤーの手に余るところをやってあげたり、サポートしてあげたりね。こういう依頼も結構あるのよ。だからインストラクターはゲームに深く習熟してないとお話にならないのよ」

「アルマの場合そこは心配ないものね」

スーチの言葉にアルマはまだ半信半疑のようだ。

「そうじゃろうか？」

「ウォン君とタメ張れるんなら大丈夫よ」

それに対してゼナも太鼓判を押す。アルマはウォンの顔をちらっと見る。そこでウォンが彼女に笑いかけると彼女はそっぽを向いてしまった。

「それからゲームマスターだけど、スーチがちょっとやってたわよね？ 最初あなたがザコを何人か叩きのめしたとき、彼女はゲームのレベルを調整したでしょ？」

「ああ、それで敵がたくさん出過ぎたというあれかや？」

「すみません……」

「まああれはともかくね、インストラクターと一緒に行けば、知らない間にプレイヤーのレベルに合わせてゲームバランスを調整してあげることもできるわけ。また状況に応じて設定にない事件を起こしてあげたりすることもあるわ。こうやってうまく介入してあげることで、ゲームをずっとおもしろくしてあげられるのよ」

ゼナの説明にアルマは納得したようだ。

「ほう。そんな仕事じゃったのか……じゃがそのようなことが妾にできるじゃろうか？ 妾は客相手の商売などは疎くてな」

「最初からみんなできる人はいないわよ。あなたの場合ゲームの熟練度は十分じゃない。何するにしてもまず熟達したプレイヤーであることが必須条件なのよ。後はすぐ覚えられると思うわ」

「ふむ……しかし妾がインストラクターになってしまったらスー殿は？」

アルマはちらっとスーチの顔を見た。彼女が一生懸命勉強しているのは見ての通りだ。それを

横からやってきてさらってしまうような気がしたのだ。だがゼナは笑って手を振った。

「あ、それなら全然大丈夫よ。今でも手が足りないぐらいなのに、近々拡張しようかという話もあるの。そうなったら二人増えたって十分忙しいわよ」

それを聞いてアルマは笑みを浮かべた。大いに興味が出てきたようだ。

「ふうむ。で、インストラクターになるにはどのくらい時間がかかるのじゃ？」

「人によりけりね。でもやっぱり一人前になるには速くても1年はかかるかしら……それまではアシスタントをしながらトレーニング期間ね。何年経っても仕事を覚えてくれない人もいるけどね」

そう言ってゼナはウォンの顔を見る。

「そ、そんなことないでしょ。俺だって頑張ってるんですから」

「別にあなたのことを言っていないじゃない？」

ウォンは返す言葉もなく黙り込んだ。だがアルマはその間考え込んでいた。

「ふうむ。妾にできるというのであれば、是非やってみたいものじゃ……」

アルマはそうつぶやいたが、すぐに大きな声を上げた。

「ああ！でもだめじゃ。妾はジェストコーストに行かねばならなかったのじゃ！」

それを聞いて他のメンバーもアルマの当初の目的を思いだした。スーチがアルマに尋ねる。

「ねえ、行ったらもう戻ってこれないの？」

「それが、全然分からんのじゃ」

それを聞いてイオが言った。

「いくらうちが安月給でも、1～2年働けばそのぐらいの旅費は溜まるよねえ。ってことはアルマがいられるのはそのぐらいの期間でこと？」

「安月給は余計でしょ！」

そう言ってラーンがイオをにらみつける。

「ううむ、そんなトレーニングまでしてもろうて、すぐ出ていってしまうというのはあまりにも恩知らずじゃのう。やはりアシスタントに留めておくしかなさそうじゃ」

そう言ってアルマはがっくり肩を落とした。それが残念なのはゼナも同様だった。

「でもあまりにも惜しいわ。営業スマイルなら練習ですぐ身に付くけど、ゲームに熟達するには時間がかかるし、才能がいるわ。あなたなら十分なのに」

といってもどうしようもないものはどうしようもない。重苦しい沈黙が場を支配した。

その時それまで黙っていたギメルが言った。

「ねえアルマさん。アルガシティーに行く理由は、そういう伝言があったからだって言いましたよね。それだけが頼りだと」

「そうじゃが？」

アルマは訝しそうに答える。

「他には何もなかったんですか？」

「なかったとは？」

「いちいち現地に行かずともここでも調べられることはたくさんありますよ。その辺はみんな調べられたんですか？」

「といってもメッセージが一つあっただけじゃ。社会復帰センターの者も、これでは行ってみるしかないだろうと言うておった」

「アルガシティーに來いと一言ですか？」

「正確にはな、『ジェストコーストのプーマ地方の首都。良く知ってるところだ。俺はそこにいる』とかいうメッセージじゃったがな」

「え？」

それを聞いてギメルは少し驚いたような声を上げて、それから不思議そうに尋ねた。

「あの、本当にそういうメッセージだったんですか？」

「ああ。間違いない。で調べたら、プーマ地方の首都がアルガシティーじゃった」

ギメルはちょっと考え込むと、手首に手をやった。すると壁にモニターが現れる。

ギメルの指の動きに合わせてモニター上に情報が流れていく。すぐに画面上にはプーマ地方の地図が現れた。それを見ながらラーンが言った。

「間違いはなさそうね」

「そうですね……でも何か引っかかりませんか？」

「ええ。びんびんにね」

そう言ってラーンがにやっと笑う。

「あの、一体何が問題なのじゃ？」

よく分からないという風のアлмаの問いに、ギメルが答えた。

「だって何でそんなナゾナゾみたいな言い方したんでしょうか？ 素直にアルガシティーで待っているって言えば良さそうなのに」

それを聞いてイオが口を挟んだ。

「首都って変わってないの？」

それを聞いてギメルがまた指を動かす。同時に地図が1500年前のアлмаが生まれた時代の物に変わった。

「首都の場所は変わってませんね……あ、ただ名前が違いますよ。ローウェルタウンだって。この辺の街が合併してアルガシティーになったんでしょうかね。それ以外には別に変わったことは……」

だがその途端にアルマが弾かれたように立ち上がった。

「ローウェルじゃと？」

一同は驚いてアルマを見る。彼女はしばらく宙を見つめるようにして両手を握りしめていたが、やがて大きな声で笑い出した。

「あそこか！ あっははは！ それならば納得もいくと言うものじゃ！」

「あの、分かるように説明してちょうだいよ」

笑い続けるアルマにラーンが尋ねた。

「ローウェルタウンじゃ。アリエス島にある街じゃ。最初はゴーストタウンになっておってな、夜になったら幽霊がわんさと出てくるので、うっかりキャンプしたら大変なのじゃ。でも昼間は景色はいいのじゃ」

それを聞いて一同は思った。幽霊が出てくるゴーストタウン？ 彼女は正気なのか？ だがなぜか

同時に異常に親しみの湧く場所でもあるのだが……

「ちょっとアルマ！そこってもしかして、どっかのゲームの中？」

ラーンの言葉にアルマは平然と答える。

「そうじゃ！ローウェルタウンとはベラトリックスの中にある街じゃ」

それを聞いて一同は呆気にとられた。

「そうじゃ、ラーン殿、ここにベラトリックスはござらぬか？」

アルマの問いにラーンは目を見開いた。

「ちょっとアルマ、ってことはその伝言の主はゲームの中にあなたに対するメッセージを残したってこと？」

「カイのことじゃ。間違いござらん！ベラトリックスのロジック部はカイが手がけておるのじゃ。そのようなことは朝飯前じゃ！」

「今手元にはないんだけど、ちょっとギィ、探してみて。多分そう簡単には手に入らないと思うけど……」

「わかりました」

それからギメルはあっちこっちにつないではベラトリックスを検索した。しばらくしてギメルが顔を上げたのでラーンが尋ねる。

「どうだった？」

「うーん。あることはありましたが、やっぱり移植じゃなくてリメイク物ですね」

「オリジナルは？」

「バイナリのアーカイブは見つかりましたが、ソースはなしです。どっちにしろ動きませんが」

「そう。やっぱりね……」

それを聞いてラーンは残念そうに言った。

「どうなったのじゃ？」

アルマの問いにラーンはばつが悪そうに答えた。

「実はね、今から600年ぐらい前にAPIセットのメジャーバージョンアップがあったのよ。それでそれ以前のバイナリはもう動かないの。今動いてるベラトリックスはその後に仕様を元にどこかがもう一度作り直した物なの。だからあなたへのメッセージはまず無いわね。それが仕様書にあったんなら別だけど」

その言葉にアルマの顔が曇った。

「ということは、動くベラトリックスのオリジナルはもうござらんとすることかや？」

「まあ、そう言うことになるわ」

「さようか……お手数をおかけしたのう……」

それを聞いたアルマはどよーんと沈みこんでしまったが、誰も彼女にかける言葉が見つからない。それからしばらくしてイオがギメルに言った。

「なあギィ。アーカイブはあるって言ってたよな。コードからそのメッセージを探せないのか？」

だがギメルは首を振る。

「そりゃちょっと無理ですよ。140ペタもあるのに。それに暗号化されてたらどうしようもありませんし」

「だよな……」

だがその時ラーンがふっと顔を上げるとギメルに言った。

「ねえギィ。あなたアルマがかわいそうだと思う？」

「え？ いったいどういうことですか？」

ラーンは何故か妙に嬉しそうな顔をしている。アルマを除く周囲の者は嫌～な予感がした。この顔はラーンが何かとてつもないことを思いついたときの顔だ。

「しばらくあたしの仕事の分も働いてくれない？ 1週間ぐらいでいいと思うんだけど」

「そんな、死にますよ。いったい何されるんです？」

彼の場合人間とは違うので顔色はよく分からないが、いわゆる“真っ青”という状態だっただろう。こういう場合一番しわ寄せが来るのがギメルだ。

「あのさ、ちょっとエミュレータ作ってみようかなって。うまく行けばそのぐらいで動かせるんじゃないかしら」

「マジですか？ 1週間で？」

「あたしを誰だと思ってるのよ？ そんなに信じられないの？ 大体基本的な部分のエミュレータはあるんだし、本体がネイティブでしか動かないっていても、UNSFから逆コンバートしてつなげばうまく動くはずでしょ？」

「確かに理論的にはそうですが……」

ギメルは頭を抱えている。

「二人ともいったい何を話しておるのじゃ？」

何か妙な風向きになってきたのでアルマはゼナに尋ねた。だが、ゼナが答える前にラーンがアルマに言った。

「アルマ、あなたそのカイのメッセージを聞きたいんでしょ？」

「え？ それはそうじゃが」

「だったら私に任せなさい！ 1週間後にはベラトリックスに入れるようにしてあげるわ」

「でもラーン、1週間後は予約が一杯なんだけど……」

慌てたようにゼナが口を挟む。

「そんなのキャンセルよ！」

「できるわけないでしょ！」

「何言ってるのよ。キャンセルして頂くのよ！」

「ラーン、まさかあなた……」

ゼナは青くなって止めようとした。だがラーンは取り合わない。

「何よ！ 才能あるインストラクターを雇えるかどうかの瀬戸際でしょ！ ゼナ、あたしはあなたのためを思ってやってるのよ！」

「ああ！ もう……」

ゼナは諦めた。こうなってしまったラーンが誰にも止められないのはもう長年のつき合いで明らかなのだ。

「じゃあ準備があるんであたしは帰るわ」

そう言ってラーンはさっさと帰ってしまった。

残った者はぼかんと互いの顔を見合わせるばかりだ。

「あの、いったいどうなったのじゃ？」

そう言うアルマの問いにゼナが諦めたように答える。

「聞いたでしょ。ラーンがやる気になっちゃったの。たぶん来週本当にベラトリックスに入れるわ」

アルマの顔がぱっと明るくなる。

「ほ、本当かや？」

「ええ。間違いなくね。ついでにギィが半死半生になって、予約入れてたお客さんの元に悪い知らせが行ったりするかもしれないけど……」

その言葉の意味が理解できるまでアルマはしばらくかかった。

「ちょっと、ちょっと待たれ！ そ、そこまでせずとも……」

だがアルマを取り巻く一同の顔には何か悟りのような表情が浮かんでいた。それを代表するようにギメルが言う。

「まあいつものことです。気にしないで下さい」

「……」

「それより少し質問があるんですがいいですか？」

いまだに状況が掴めずぼかんとしているアルマにギメルが尋ねた。

「何じゃ？」

「コールドスリープの目覚めのメッセージってやっぱり重要ですよ。でもあなたの兄君のカイさんですか。そんな重要な物を、どうしてゲームの中なんかに残したんでしょう？ 冗談やってる場合じゃないと思うんですが」

「う……それは……」

なぜかアルマは言葉に詰まった。更にギメルは畳みかけた。

「それにゲームの開発をしていた彼がどうして系外惑星探査に行ってしまったんですか？ あなたがコールドスリープに入った理由は確かそうでしたよね？」

「……」

アルマは下を向いて黙り込んでしまった。周囲の者は互いに顔を見合わせる。

「あの、すみません、何かまずいことを聞いてしまいましたか？」

あまりにもアルマが黙り込んでいるのでギメルが恐る恐る尋ねる。それに対してアルマは顔を上げて答えた。

「ううむ……どうせ短いつきあいじゃと思っておったから隠しておったが……こうなっては話しておいた方が良さそうじゃ」

アルマは一同の顔をゆっくり見渡しながら言った。

「実はな、カイが系外惑星探査に行ったというのは嘘じゃ。コールドスリープの申し込みをするときでっち上げたのじゃ」

「嘘？ それじゃどこに？」

ゼナが驚いて言う。

「それは知らぬ。どうせ人には言えぬ所であろう。カイが妾を眠らせたのは、足手まといにならないようにしたのじゃろうて」

「足手まとい？」

イオが繰り返した。足手まといといえば足手まといだろうか？ これってよく聞く言葉だが、使われる文脈が結構限定されるような……

「妾が捕まって人質にでもされたら、カイは動きが取れぬようになる故」

それを聞いて全員が凍り付いた。

「ちょっと、アルマ、あなた……」

ゼナが何か言おうとしているがろれつが回っていない。素直な質問をしたのはウォンだった。

「人質？ おまえそんなやばいことに首突っ込んでたのか？」

「妾ではない！ カイじゃ。妾はカイにひっついておっただけなのじゃ」

「はあ。でそのカイは何でゲームなんか作ってたんだ？」

「追っ手を欺くためじゃ。最初はチームDXなど田舎の零細企業であったから適当だったのじゃろう。元々カイが何をしておっただのかは知らぬ。物心付いたときには妾はカイと共に暮らしておった。カイはしょっちゅう仕事や住む場所を変えておった。思えばあのころからずっと逃げ回っておったのじゃな」

「逃げるって誰からだよ？」

「妾は知らぬ。ただ何度か怖い輩に襲われたことは覚えておる。それ故カイは妾に身の守り方なども教えてくれたのじゃ」

「って、人のぶん殴り方か？」

「そうじゃ。ついでに言うなら、刃物や銃の使い方もな。おかげでゲームをするときにも困らずに済んだし、おのれの毒牙にもかからずに済んだのじゃ！」

そう言いながらアルマは笑った。どうやらウォンの質問はアルマの緊張を解くには非常に有効だったようだ。

「あっはっはっは、良かったな。役に立って」

ともかくアルマの過去がこんなだったとは全くの予想外だった。ウォンのせいで少し場は和んだにしても、基本的に状況が重たいことには変わらない。またみんなは黙り込んでしまった。

しばらくしてイオが言った。

「でもそうするとそのメッセージって、結構やばい情報だったりしないか？」

それを聞いてウォンが言い返す。

「やばい情報ってどんなんだよ？」

「ええ？ 例えば……どこかの犯罪組織の名簿とか……秘密取引の情報とか……」

一同は顔を見合わせた。

「アルマ、何か思い当たることある？」

ゼナの問いにアルマは首を振る。

「……妾にはさっぱりじゃ」

「本当にそんなのがあったらみんな狙われたりしないの？」

スーチがおびえたような顔で言う。だがそれを聞いたギメルが落ち着いて答えた。

「多分そういうことはないんじゃないでしょうか？」

それを聞いたゼナが言った。

「どうしてなの？」

「ゲームの中って、そういう物の隠し場所としてはあまり適してないでしょう？ 個人宛のメッセージでもオペレーターからは丸見えですよ」

「たしかに、それはそうね」

「それにそもそもこれって1500年も前の話ですよ」

それを聞いて全員が吹き出した。いかにもそうだ。アルマが目の前にいるのでつい先日のような気になっていたのだ。

安堵したウォンが言い出しっぺのイオに突っ込む。

「何だよ！ イオ！ てめえもう少し考えてから物を言えよ！」

「ああ？ 一緒になって心配してたのは誰だよ！」

二人は口論を始めたがもちろん誰も気にとめない。そんな物は無視してゼナはアルマに言った。

「アルマ、ありがとう。話してくれて」

「すまぬな。嘘をついておって」

「気にすることないわよ。これからはね。でも公式にどう記録しておくのがいいかはちょっと考えた方がいいわね。これは明日ミスやエイドリアンと相談しましょう」

「かたじけない」

「それじゃ今日は遅くなったし、明日からはギメルは忙しくなるでしょ？ 今日は終わりにしましょう」

確かにインパクトのありすぎる話で、みんな頭がくらくらし始めていた。もっといろいろ聞きたいことがあるような気もしたが、今日はそろそろ限界のようだ。

一同は立ち上がって帰り支度を始めた。だがウォンは最後の最後にまたボケをかましてしまった。

「お前も結構大変だったんだな」

「ああ、大変じゃったな」

「ま、ここにはろくな奴はいないけど、悪い奴はいないからな。でき、でそのカイってそれからどうなったんだ？」

それを聞いた途端にアルマの目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

「え？ え？ うわ！ いてててて！」

ゼナがまたウォンの耳をひねりあげたのだ。

「お、俺が何か悪いことしましたか？」

抗弁しようとするウォンにゼナは以下のように一言ささやいた。

『殺されたのよ！』

「！」

カイは危険を避けるためにアルマを眠らせたのだ。当然危機を脱してほとぼりが冷めたら彼女を迎えに来るはずだ。だが彼はついに彼女を目覚めさせることはなかった。彼のおかれた立場からその理由を考えてみれば、結論はただ一つ。そう。来たくても来られなくなってしまったのだ。

ウォンは慌ててフォローしようとして更に墓穴を掘る。

「あ、アルマ、まあそう気を落とすなって」

その時どんなお気持ちでした？ と聞くよりはまだましだったとはいえ、デリカシーのない慰めである。アルマは黙って背を震わせている。

「えっと、なあ、アルマ……」

その時アルマが冷たい声で言った。

「ゼナ殿、このたわけを絞め殺してよろしいか？」

「しょうがないわね。死体の後始末はちゃんとやってよ」

「承知した」

「おい、待てよ、ちょ、ちょっと！」

もちろんだれも待ってはくれなかった。

〈第4章〉 黒水晶

アルマは異界の門のHQ(総司令部)と名付けられた部屋で半球型をした3Dモニターを眺めていた。モニターにはどこかの森の中で重装備のウォンが歩いているのが映っている。彼の後から何人かの客が緊張した様子で続くのが見える。

アルマはコントローラーでウォンをマークすると彼にささやきかけた。

「ほう？ なんじゃ？ その馬鹿でかい剣は？」

その声を聞いてウォンが目を見開くと、同じく低い声で答える。

『ああ？ 何でてめえがモニターしてるんだよ？ 仕事はどうしたよ？』

「たわけ！ これが今の妾の仕事じゃ」

『はあ？ ギィはどうしたんだ？』

「ギメル殿は今休息を取られておる。その間の代わりじゃ」

それを聞いてウォンもふっとため息をつく。彼もここの状況がどうなっているかはよく知っている。

『あーあ。しょうがねえなあ。じゃあちゃんと見とけよ』

「もちろんじゃ。剣聖殿のお手並みをよ～～く拝見させてもらうのじゃ」

アルマの笑い声にウォンはむっとした顔をする。

『けっ！ 見てろよ！』

そう言ってウォンは接続を切った。アルマはまたくくっと笑うと、大きくのびをしてから振り返って部屋の中を見渡した。

ここはその名の通り異界の門の中枢部でもある。だが見てくれはほとんどただの機械室だ。部屋の壁はぎっしりと機械で埋められ、部屋の中にもタワー型の装置が林立している。まるで機械の怪物の腹の中に呑み込まれたようなそんな雰囲気だ。

その間を埋めるように半球形の3Dモニタが幾つも並んでいて、それぞれに異なったゲーム画面が映し出されている。

部屋の隅ではギメルが横になってぐっすり眠っている。無理もない。あの晩から今日で4日目になる。ラーンはあの次の朝から今までずっと不眠不休でベラトリックスの調整を行っている。そのため通常なら交代制で行うシステムのモニタリングはギメル一人の役割になっていたのだ。すなわち彼もまた4日間ほとんど寝ていないのだ。彼がカリス族だからといってそういう状況に耐えられるわけではない。

その時ラーンが中央の大モニタをのぞき込みながら叫んだ。

「ゼナちゃん！ どう？ どう？ 大丈夫？」

モニターの中からゼナの声がする。

『ええ。手足はちゃんと正常に動くわ』

「OK！ OK！ きゃははははは！ これでバッチリ！ きゃははははは！」

ラーンは徹夜続きと眠気覚まし——要するに覚醒剤だ——のせいで完全にハイになっている。この時代の覚醒剤は昔と違ってそんなに習慣性があったりはしないが、それでも不健康なことに変わりはない。

それはともかく調整作業はうまくいっているようだ。

「ラーン殿。今度は動いたのかや？」

アルマが尋ねるとラーンはVサインを出しながら答えた。

「ええ。今度はもうバッチリ！ゼナちゃん、もうダンスしなくてオッケーみたいよ！きゃはははははは」

「そ、それはよかったのう」

アルマは苦笑いした。先ほどまでの馬鹿騒ぎは横にいたアルマも引いてしまっていた。同時にモニターからもゼナの怒った声がする。

『ラーン！誰のせいだと思ってるのよ！いい加減にしてよね。で、次は？』

ここでの会話は中でテストプレイしているゼナにも筒抜けだ。

「分かった分かった。分かったわよ。じゃあ今度は顔の表情のテストね。まず笑ってみて」

それを聞いてゼナはモニターの中で笑おうとした……が、その顔は歯をむき出して威嚇しているようにしか見えない。それを見てラーンが爆笑した。

「きゃははははははははは！ゼナちゃん、ゼナちゃん、それ、笑顔ちがう、ちがう！きゃはははははははははは」

『私だって分かるわよ！あんたわざとやってないでしょうね』

ゼナの口調は怒っているが、その表情はにやけて鼻の下を伸ばしているようだ。それを見て更にラーンが爆笑する。

今日の朝やっとテストプレイができるようになってからずっとこの調子だ。アルマは何だかゼナが可哀想になったが、これは彼女が口を出せる問題でもない。それにゼナの方も口調は怒っているようだが、その実結構楽しんでいるようにも見える。

アルマがしばらくそんな二人を眺めていた所に、スーチが少し慌てた様子で入ってきた。

「あの、ラーンさん。コネクションできないってミスさんが怒ってらして……」

スーチの言葉にラーンは平然と答える。

「ああ？切ってるんだから当然でしょ」

「切ってるって、それじゃメールとか何も見てないんですか？」

「当たり前でしょ。そんな暇あるわけじゃない！きゃはははははははは」

「え？それじゃ“黒水晶”にシミュレータを送る件はどうなってるんですか？」

それを聞いてラーンの顔が凍り付いた。

それからたっぷり10秒間ほど沈黙してから、ラーンは答えた。

「忘れた」

「ああ！もう！」

スーチが少しオーバー目に天を仰ぐ。それを見てラーンも慌ててフォローする。

「あ、でもインストールは済んでるのよ。持ってくださいよ。だから取りに来てもらえば？」

「今日の4時って約束なんですよ。今もう3時だし」

それを聞いてラーンがまた少し固まってから答えた。

「じゃあスーチちゃん、ごめん。ちょっと持ってってくれない？」

スーチもその答えは予測していたようで、はあっとため息をついてから答えた。

「わかりました。で、どれですか？」

「あれ」

そう言ってラーンは部屋の隅に鎮座している高さ1メートルほどもある装置を指さした。

「これ一人ですか？」

「んー、じゃあアルマにも手伝ってもらって？」

いきなり振られてアルマは少し驚いた。その作業が嫌なわけではなく、彼女は今別な仕事だったからだ。

「ええ？ 妾は構わんが...じゃがそうすれば、このモニターはどうすればよいのじゃ？」

そう言ってアルマはウォン達の映っているモニターを指さした。だがラーンはまた高笑いして答えた。

「そこの大きいのをたたき起こせばいいのよ。きゃははははは！ そうそう。たたき起こしちゃいなさいよ！」

アルマとスーチは顔を見合わせた。ギメルも昨晩は徹夜で今やっと仮眠に入れた所なのだ。だがこうなってしまった以上もう仕方がない。

スーチはギメルの横に行って彼の耳を引っ張った。

「ギィ君、ギィ君！」

「んー」

低くうなるような声がする。アルマはその声がまるで怒っているように聞こえてちょっと身を退いた。だがギメルはそのままふっと起きあがるととろんとした目であたりを見回した。

「ああ？ スー、寝過ぎたか？」

「違うの。ちょっとアルマとお使いに行かなきゃならなくなって」

ギメルはそれを聞いて時計を見る。今の時間を知ると彼はがっくりと肩を落としたが、文句は言わなかった。

「う一分かった」

それを聞いてスーチが訊ねる。

「大丈夫？ あれあげようか？」

「いや、まだいいよ」

そう言って彼は立ち上がるとぶるぶる体を震わせた。彼はどうやら寝起きはいいようだ。彼に向かってスーチが言った。

「それじゃ黒水晶に運ぶシミュレータを屋上に上げてもらえる？」

それを聞いてギメルが目を見開いた。

「え？ まだ運んでなかったのか？」

「ええ。だからあたし達が持ってくるの」

それを聞いてさすがのギメルも表情が変わった。

「ラーンさん。そのために僕はタベ寝られなかったんですよ！」

部屋に響くような低音だ。アルマはまたびっくりして身を引いた。だがラーンは涼しい顔だ。

「ごめんごめーん。あたしだって寝てないんだから。終わったら特別手当あげるから。ね」

「もう。いつもこうなんだから」

ギメルはぶつぶつ言いながらシミュレータの結線をはずし始めた。アルマはかなり驚きながら彼らの振る舞いを眺めていた。この時期、特にルフティ・ベイであれば異種族など珍しいわけではないが、彼女は今まで異種族とこれだけ身近に接したことはなかった。だがここの彼らはまるでヒト族と行動パターンが変わらない。そして彼女は今ではなぜかこの二人と一番和んでいたりするのだ。

もちろんそれは彼らがこのベレンの人間社会の中で生まれ育ったからそうなのだが、やはりにわかには信じがたいことだ。

そんなことを考えているとスーチがアルマに言った。

「アルマ、カーゴ呼んどいて。あたしファイル取ってくる」

「その黒水晶というのが行き先で良いのかや？」

「ああ、そうなの。同業さんなのよ。うちと同じでファンタジー専門の。それでいろいろお付き合いがあるの。予約が余った時なんかは回してあげたりして」

「なるほど。承知じゃ」

二人がこれだけ一生懸命働いているというのに、彼女だけがぼっとしているわけにはいかない。アルマは左手の甲に意識を集中させると、その上を右指でピアノを弾くように叩き始める。それと共に手の甲の皮膚上に文字が現れてきた。アルマはそれを確認するとまたリズムカルにその上を叩く。これでカーゴの予約は完了で、あと数分もしたら屋上にやってきてくれるはずだ。

これは別に特別なことではなく、アルマの左手に埋め込まれた“チップ”の機能だ。これはちょっとしたバイオコンピュータで、この当時の人間なら誰もが体内のどこかに入れている。こんな風にネットを操作してみたり、クレジットカードや身分証として使ったりなど様々な機能がある。このあたりの仕組みは1500年間変わっていないので全く迷うことはなかった。

予約が終わるとアルマがギメルに言った。

「ギメル殿。手伝いをしようかや？」

「いや、一人で大丈夫ですよ」

「ふーむ。怪力じゃのう」

「それよりそこのコードを持ってきて下さい」

「了解した」

アルマは落ちているコード類を集めると、ギメルの後を付いて異界の門の屋上に向かった。来てみるともう予約したカーゴスライダーは到着している。

「それ開けて下さい」

アルマは言われるままにカーゴの荷台の扉を開ける。ギメルがそれにシミュレータを積み込んでいると下からスーチも上がってきた。

「ありがとう。ギィ君」

「ああ。でも下ろすときは大丈夫か？」

「アルマがいれば大丈夫だと思うの」

それを聞いてアルマも胸を叩いた。

「任せておれ。新しく付けた腕じゃが、前のよりパワーアップしておってな。この程度なら一人

でも運べそうならいいのじゃ」

それを聞いてギメルはうなずいた。

「じゃあ気を付けて」

「行ってきます」

スーチとアルマはカーゴに乗り込んだ。このカーゴは荷物用なので二人乗ると結構狭い。アルマは席に着くと安全ベルトを締める。スーチがパネルに触れて目的地を確認する。

「いい？」

「了解じゃ」

それと共にふっと体の重さがなくなって、カーゴスライダーはふわっと斜め上に向かって浮き上がった。窓の外を見ると地上がどんどん遠ざかっていく。

それから周囲の高い建物の間を抜けていくと街の上空に出た。十分な高度に達すると、スライダー上部の翼が開き滑空を始める。それと同時に重力がまた戻ってくる。このあたりも昔と同じだ。

アルマはカーゴスライダーの窓から眼下の景色を眺めた。

この街はルフティ・ベイという。その名の通り入り組んだ湾の奥にある街だ。ここはテラ連邦の第一植民星(ドミニオン)である“ベレン”の首都だ。現在テラは地球の他にこの“ベレン”、“トリスタン”、“ジェストコースト”という三つの植民星を持っている。このベレンは植民星の中でも最も古く、ヒト族が初めて地球外に移住したのがここだという由緒ある惑星なのだ。

だがそれも3000年以上前の話である。最初の頃は宇宙開拓の前線基地として賑わっていたこの街も、やがてそんな熱気も薄れていって今ではそれとは別な方面で、すなわちこの銀河のなかでも一二を争う“怪しい”都市として名を馳せていた。

アルマは振り返って後ろを見る。異界の門の建物がどんどん小さくなっていく。

「なあ、スー殿。前から訊こうと思っておったのだが」

「なあに？」

「うちの建物はどうしてあんな毒キノコ型をしているのじゃ？」

アルマの言ったとおり、NSEゲームセンター“異界の門”は街の中に立った巨大なベニテングタケという様子をしている。

それを聞いてスーチは妙な表情をした。アルマももう彼女が困惑している時にそんな顔をするのに気づいていた。

「そう言えばそうねえ。どうしてかしら」

実はスーチがそう言うのも無理なかった。もしこれが普通の建物群の中にぽつんとそんなキノコがあったのならば、彼女もそんな疑問を抱いたことだろう。だがここはルフティ・ベイだったのだ。異界の門などそれが何かと分かるだけまだましな部類で、それ以外の建物はもっとへんてこな物ばかりだったのだ。

まず異界の門キノコの横にあるのは巨大な石像だ。高さは異界の門の3倍はあって時々姿勢を変えるのだが、その度にぎりぎりとうるさい音を立てて迷惑だ。反対側にあるのは銀色の球体が512個ほどつながった大きな四次元立方体だ。ここも同業だが“大いなる西部”という名前がち

らは古代地球のアメリカ開拓物専門だ。

今はその向こうに古代ギリシャのガレー船がゆっくりと飛んでいる。これはレストランでルフティ・ベイ中をよく分からない経路で移動している。別な方を向くとちょっとした広場になっているが、そこには大きな恐竜が何頭か歩き回っているのがここからでもよく見える。

更に別な方に目を向ければ半透明のきらきら光る何だかよく分からない不定型なものがあって、その側面には大きな丸い穴が空いている。その穴を地下5キロメートルほど下るとおいしい喫茶店があるというのだが、アルマは噂を聞いただけでまだ行ったことがない。

これは現在のルフティ・ベイの極めて一部の実にささやかな光景にしか過ぎなかった。だからここを見慣れた者であれば、ベニテングタケなどごく普通だと思うことだろう。

だがアルマが育った頃は、既にそういう傾向は現れてはいたがまだもう少しはましだった。「うーむ。妾のいた頃はこうではなかったからのう。建物などもアップタウンにあるものとそうは変わらなんだ」

もちろんベレンにある都市がみんなこのようにイカれているわけではなく、まともな所の方が断然多い。

「そうみたいねえ。こんなになり出したのは500年ぐらい前だって話だし」

スーチの答えを聞きながらアルマは1500年という時間を実感していた。彼女にとってはまるで一瞬だったのに、その間に街は全く見慣れぬ姿に変貌してしまっていたのだ。彼女は元々兄との逃亡生活で各地を転々としていたがために、知りあいがいなくなっていたことにはまだ耐えられていた。だがルフティ・ベイがこんなにも変わってしまったことは少し堪えていたのだ。

そんな彼女の気持ちに気づいたのかスーチは話題を変えた。

「そう言えばあたしが来たときラーンさん何をあんなに騒いでたの？」

「ああ、あれかや？今ゼナ殿が入ってテストをしておるのだが、まだマッチングがうまくいっておらぬようなのじゃ」

「マッチングがだめって、じゃあ体が変に動いたりとか？」

「そうじゃ。最初は右半身と左半身が逆になっておってな」

「ええ？それじゃ」

「そうじゃ。まるでゼナ殿が妙な踊りを踊っているようにも見えて、ラーン殿が大爆笑しておったのじゃ。それが直ったあと、表情のチェックをしておったのだが、これも滅茶苦茶でまるで福笑いのようにおってな」

それを聞いてスーチは笑い出した。アルマは少し驚いた。

「ちょっと、スーチ殿、あまり笑い事ではないぞよ」

だがスーチは手を振りながら答えた。

「ごめんなさい。ちょっとあたしの時を思い出しちゃって」

「ええ？スーチ殿が？」

アルマは驚いて尋ねた。

「あたしのスキンを調整するときも最初はそんな調子だったのよ。だってユディ族のスキンってないでしょ？」

それを聞いてアルマも納得した。

「おお！言われてみればそうじゃったな。と言うことはスー殿も手足が動かんとか、前屈みになろうとしたら反り返ってしまったとかされたのかや？」

「ええ？アルマもそんなことあったの？」

「ああ。妾の時はそもそも今のように出来合のスキンなど無かったから、システムごとにそういう目に会っておったわ」

「まあ、そうなんだ。イオ君とかウォン君なんかに話しても全然理解してくれないのよ。この苦勞」

こればかりは体験してみないと分からない。

「うむ。あれは慣れるまでが大変じゃからなあ。にしてもウォンのたわけはともかく、イオ殿まで分かってくれぬとは」

アルマの言葉にスーチが首を振る。

「だって今はUNSF標準でメジャーな種族の基本ドライバはあるから、スキンに困ることなんて普通無いのよ。手足が逆さまに動くみたいな苦勞ってもうあたしだけかと思ってたわ」

「UNSF標準？そう言えばあの時ラーン殿も言われておったようじゃが、一体それは何なのじゃ？」

「ああ、これね。ユニバーサル神経信号フォーマット(Universal Neuro-Signal Format)って言ってね、ヒト族とかリリア族とかヴィン族っていったメジャーな種族全部の特徴を持った、仮想的なヒューマノイドの神経パターンなの。NSEシステムをこのUNSFベースで作っておいてね、各種族の実際の神経信号パターンをUNSFにコンバートするドライバを作れば、どんな種族でも簡単に同じゲームに入れるようにできるのよ」

スーチの説明にアルマはしばらく宙を見つめていたが、やがてぽんと手を叩くと言った。

「おお、そういう仕組みであれば、ゲームごとにスキンの調整は不要じゃな。1500年も経てばさすがに進歩しておるのう」

「まあ、ね」

二人がそんな話をしているとカーゴスライダーが高度を下げ始めた。

「行き先が近いのかや？」

「ええ。あそこよ」

スライダーは街から離れて海岸線の上を飛んでいる。アルマが前方に注目すると岩でごつごつとした半島が見えてきた。半島は岸から突きだした岩山といった感じで、その先端部はすんと切り落とされたような断崖になっている。その崖の中途部分に黒光りする大きな六角形の結晶のような物が突きだしているのが見えた。

「ほう。だから黒水晶というのじゃな」

現在の交通機関はこのカーゴスライダーだったから、建物の立地というのは別に平地にこだわることはなかった。なので特にこういった遊興施設だとわざわざこのような変な場所に造ることは良くあった。

カーゴスライダーはその上の平たくなったエアポートに着陸した。そこでは既に男が一人待ちかまえていた。痩せて背が高く、髪はもう真っ白になっている。

二人がカーゴスライダーから降りると男が言った。

「やあ、スーちゃん。元気そうだね」

そう言って男は気さくな笑みを浮かべた。

「あら、ユーゴさん。お久しぶりです。私が来ること分かってたんですか」

「ああ。ギメル君から聞いてね」

どうやらギメルが気を利かして彼女たちが荷物を届けることを知らせておいてくれたようだ。

「お約束のシミュレータです」

そう言ってスーチがカーゴから降りる。ユーゴはスーチの後から続いて出てきたアルマに目を留めると、ちょっと眉をひそめた。

「あれ？ そちらは？」

「ああ、彼女が今度うちで働くことになったアルマです」

それを聞いてユーゴが目を見開いた。どうやらミスあたりから彼女のことを聞いていたのだろう。

「アルマって、もしかしてあの？」

彼女が長い眠りから目覚めたという話はちょっとしたニュースになっていたからこういった反応にはもう慣れていたので、アルマは落ち着いて答えた。

「お初にお目にかかり申す。妾はアルマ・マートルじゃ。この度異界の門にて仕事をさせてもらっておりますのじゃ。お見知りおきたもれ」

といってもまだ現代風の言い方はマスターできていない。その喋りを聞いてユーゴは微笑んだ。

「はは、噂には聞いてたけど本当だったんだ。でもヴィジョンで見るのよりずっと可愛いんじゃない？ どうだい？ ミスの所は。ラーンにいじめられたりしてないか？ 何だったらうちに来ないか？ うちみんな優しいぞ」

いきなりの勧誘にアルマは少したじたじとなった。

「い、いや、とりあえずは結構じゃ。ラーン殿にも、直接には被害にあっておらぬし」

それを聞いてスーチが突っ込んだ。

「あー、被害だなんて、そんなこと言って！」

アルマは慌てて手を振る。

「スー殿。今のは秘密じゃ！」

「どうしようかな〜？」

そんな様子を見てユーゴがまた笑った。

「ははは。スーちゃんもずいぶんラーンの奴に感化されてるんじゃないの？」

「え？ ええ？ そんなことありませんよ」

今度はスーチが慌てて手を振る。黒水晶と異界の門のスタッフはかなり親しい間柄らしい。

「冗談だって。さて、それよりさっさとそいつを搬入しなきゃな」

そう言ってユーゴはシミュレータを指さした。

それから三人はシミュレータを抱えて黒水晶の中に運び込んだ。ギメルだと楽々持っていたように見えたのだが、三人でも結構重い。あの時はアルマはああ言った物の、ユーゴが来てくれて

感謝していた。

こういった場合このぐらいのサイズの貨物が一番始末に悪い。もっと大きければ反重力カートをレンタルする気にもなるのだが、このぐらいではそれも大げさすぎる。結局こういった太古からの方法になってしまうのだ。

搬入と設置が終わった時アルマはこぼした。

「うーむ。この辺はもっと楽になっておるかと思っておったが、ぜんぜん前と同じじゃな」

それを聞いてスーチが答える。

「無理なんじゃない？ シャルムシステムをもっと小型化できたりしたら、それこそ星が買えるわよ」

「そういうものじゃろうか？」

シャルムシステムとは反重力とか空間転移などを行う基本的な機関なのだが、そのテクノロジーはこの数百万年ほど全く進歩していない。だからちょっとでも改良できたりしたらそれは凄いことなのだ。こういった所はスーチの方が遙かによく勉強している。アルマは曖昧にうなづくしかなかった。

そこにユーゴが戻って来ると言った。

「久しぶりだしお茶でも飲んでくかい？」

「ええ？ でも工作中だし」

スーチが一応断るが、ユーゴはそれを遮って言った。

「仕事、忙しいのかい？」

「いえ、そこまでじゃないんですけど……」

「じゃあいいんじゃないか？」

二人も急ぎの用があったわけではなし、ユーゴも気さくで話しやすいので、そのままなし崩しにお茶をごちそうになることになった。

二人が通されたのは水晶の門のロビーだ。壁面にはびっしりと様々な種類の宝石が埋め込まれていて、それが夕陽に反射してきらきら輝いている。アルマはびっくりしてあたりを見回した。目覚めてからこのかたこういうことばかりだ。

窓際の海がよく見える席に二人を誘うと、ユーゴが尋ねてきた。

「そう言えばウォンの小僧はどうした？ 元気してるか？」

「ええ。すごく」

少々苦笑い気味にスーチが答える。それを聞いてアルマは反射的に答えていた。

「ああ？ ユーゴ殿はウォンをご存じなのかや？」

それを聞いてユーゴがアルマを見て答える。

「ご存じも何も、前うちで働いてたんだよ」

アルマは驚いて尋ね返した。

「ほう？ して何故にお宅を辞めたのじゃ？……と、聞いて良かったかの？」

「おや、何か気になるかい？」

ユーゴはそう言ってにやっと笑った。

「いや、そういうわけでは」

そう言いながらアルマは少し顔が火照ってきたような気がした。

そんな彼女の様子に気づいたかどうかは分からないが、ユーゴはスーチに尋ねた。

「彼女知らないのかい？」

「え？ ええ。まあ……」

スーチが曖昧にうなづく。

「みんな知ってることだからね。喋っちゃっていいかな？」

スーチはちらっとアルマの顔を見て、それからうなずいた。

「ええ？ まあいいんじゃないでしょうか」

それを聞いてユーゴはアルマの顔を見た。

「ウォンの奴ね、最初はここでアシスタントしてたのさ」

「ほう？ 最初から異界の門ではなかったのじゃ？」

アルマは興味津々だった。表向きはウォンをからかうネタが手にはいるのであればそんな嬉しいことはないと言うふりだったが、その実ウォンのことを詳しく知りたい気になっていたのだ。ユーゴも彼女がこの話題に普通以上に興味を持っていることに気づいていて、説明の言葉に力が入る。

「ああ。あいつがこの業界に入ったのはね、フリーダムバケーションの間ずっとここで潜ってたのがきっかけなのさ」

「ええ？」

アルマの驚きの声を聞いてスーチが付け加えた。

「そうなの。ウォン君と実はイオ君もなんだけど、フリーダムバケーションはずっとここに入り浸ってたんだって」

フリーダムバケーションとはこの時代の習慣なのだが、義務教育期間が終了した若者達に与えられる特別なボーナス期間だ。

学校を卒業した少年少女達には1年間という期間が与えられる。この期間は原則として本人が好きに使っていいことになっている。またそれだけでなくこの期間に限っては本人のしたいことをするための費用を連邦が出してくれるのだ。もちろん無制限にとはいかないがそれでもかなりの金額だし、限度額をオーバーしたとしてもその分は無利子で長期返済できるようになっている。

このボーナス期間をどう利用するか、それは完全に本人の自由裁量に任されている。だから多くの者はまずこの時でしかできないことを考える。

一番多いパターンが宇宙旅行だろう。銀河にはたくさんの星があり文明がある。だがそれを巡るとなるとさすがにかなりの費用がかかるから、そこまで気楽にできる物ではなかった。しかしこの期間であれば自由にそれができるのだ。こうやって様々な異星文化に触れることはもちろん極めて大きな意味を持っている。

だがそれが全てではない。当人が何をするかは誰も強制することはできない。だから中にはずっと自分のしたい研究をする者もいるし、ボランティア活動に勤しむ者もいる。中にはひたすら趣味に打ち込む者もいる。

いずれにしても重要な点はその1年間をどう使うかは本人が決定するということだ。それを後

の人生に生かすも殺すも本人次第なのだ。

……とまあこういうシステムになっているのだが、要するにウォンとイオはその期間をずっとゲームして過ごしていたとそういうわけなのだった。

アルマは最初にウォンとイオに紹介された時、ランが休暇の過ごし方の話をしたら二人が泡を食ったことを思い出して吹き出した。

そんなアルマを見てユーゴが言った。

「全くバカなんだから。あいつら。でもまあ、おかげでこの道で食ってけるみたいだからな。全く意味なかったわけでもないようだな」

「ハハハ。そ、そうじゃな。で、それはともかくウォンの奴はどうしてここを辞めてしまったのじゃ？」

「うん。それがなんだが、あいつも最初はみんなと同じようにアシスタントをしてたんだ。最初のうちはまあまじめにやってたんだが、そのうち客の一人とえらく懇意になっちまってな。確かエクアとかいう名前の女だったな」

「ふむふむ」

アルマは身を乗り出した。どうやら面白そうな展開になりそうだ。

「その女なんだが平日の昼間っからずっと入り浸ってたりして、まあなんていうかあまり堅気じゃなかったわけよ。でもあいつのことだからそんな女に見境なくのぼせちまってな、予約を優先してやったりしているぐらいなら良かったんだが、そのうちプレイ代の肩代わりまでしてやったりして。なのにその見返りがデートの約束だけってんだから、もうなんて言うか、な、分かるだろ？」

それを聞いてアルマは吹き出した。

「わっははは。あの男がそんな純情少年だったのかや？」

「はははは。そうなんだよ。でな、そのデートなんだが行ってみたらそこで別な男と鉢合わせしたとかで、大喧嘩になった挙げ句結局ボコられて帰ってきてな、泣いてんだよ。そこで」

そう言ってユーゴはロビーの隅の方を指さした。

「ハハハ……そりゃまた哀れな」

「でさ、俺が問いつめたらあいつ、女の代金肩代わりしてて明日からの生活費もないとか言うし。さすがに俺もこのままじゃまずいと思ってね、ともかくさっさとプレイ代を回収して別れちまえて言ったんだな。で次の日あいつが女の家に行ったらな、今度はそこであいつをボコった男が泣いてたそうさ」

「はあ？」

驚いたアルマににやにや笑いかけながらユーゴが続ける。

「聞けばそいつもその女にずいぶん金を貸してたらしくて。ところがその女と来たらさっさと雲隠れしていなくなったらしくて。それでウォンの奴、それっきりだったんだ」

「それっきりというと？ それっきりかや？」

ユーゴはうなずいた。

「ああ。それっきり帰ってこなかった」

「ハハハ……」

「実はな、その女のゲーム代のつけ、あいつの給料じゃ埋め合わせもできなくなってたんだよ。そんなこんなで思い詰めちまったんだらうな」

「あ、ああ……そうじゃな」

アルマはもう少し軽い話を想像していた。だがこれはからかうネタとしてはちょっと可哀想すぎる……アルマの笑いも少しトーンダウンし始めた。

「でもさ、それじゃこっちもやっぱり困るわけよ。せめて理由でも言ってくればともかく、いきなり一月以上も無断欠勤されるとね。未払い分は結局損失になるし、契約もあったしで、結局クビにするしかなくってね」

そう言ってユーゴはちょっとため息をついた。

「そ、そうじゃったのか……してどうしてあ奴は異界の門に？」

「ああ、アングラでふらふらしてる所を偶然イオと出会ったらしい」

アングラとはアンダーグラウンドの略でルフティ・ベイの一番怪しい界隈の通称だ。

「イオも最初はウォンと一緒にここで雇ってやろうかと思ってたんだけど、その時ちょっと空気がなくってね。で、異界の門に紹介してやってたんだ。ミスには色々貸しがあるからな。で、まあ後からあいつも謝りに来てね。経緯を知っちゃったらこれ以上怒るわけにはいかないしね。でもうちはもう別な奴を雇っちゃった後だったんで、結局あいつもミスの所に行くことになったのさ」

「ははは。そうじゃったのか。全くバカじゃのう。あの男は」

と言いつつアルマはもうからかい口調ではなくなっていた。

「それはそうと、その女はどうなったのじゃ？ 見つかったのかや？」

「ああ。ランが調べてやったら、しっかりコールドスリープ中。あと50年は手が出せないって分かって、ウォンの奴怒り狂ってたよ」

それを聞くとアルマが爆笑した。

「あ！ あはははは！ そうか、そうじゃったか！」

それを見てユーゴが訝って尋ねる。

「ん？ 何がおかしいんだ？」

「いやな、初めて紹介されたときのことじゃ。あの男め、スリーパーがどうか言っていていきなり因縁を付けてきおったので、一発かましてやったのじゃ。おかげでその後はおとなしくなったがの。どういうわけかと思えばそんなことじゃったのか！」

それを聞いてユーゴも吹き出した。

「ぶははは。あいつも多難だな。でもまあそういうわけだし、あいつバカだけど悪い奴じゃないんだ」

「あははは。それは承知じゃ」

とそんなやりとりをスーチは苦笑いしながら見ていたのだが、ふと手がむずむずしたので自分のチップに目をやると慌てて顔を上げて言った。

「あら！ ゼナさんが帰ってこいって。どうしたのかしら？」

それを聞いてアルマも長居しすぎたことに気が付いた。

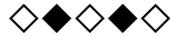
「ああ？ 帰りが遅くて怒っておられるのか？」

二人は顔を見合わせると、弾かれるように立ち上がる。

「それじゃユーゴさん。ごちそうさまでした」

「ああ。また来いよ」

二人はユーゴに挨拶すると大急ぎで黒水晶を後にした。



アルマとスーチが戻って来ると、HQではゼナが戻って来ていて彼女たちを待ち構えていた。

「す、すみません。遅くなって」

スーチが慌てて謝る。アルマもその後ろで同様に頭を下げる。二人はてっきり怒られるのだと思っていた。だがゼナは怒っているというよりは何だかうなだれているように見える。

「あ、二人とも戻った？ だったらちょっと話があるのよ」

その口調も怒っている風ではない。二人は少し混乱して顔を見合わせた。

「えっと、あの、何でしょう？」

スーチの問いにゼナは答えた。

「実はね、あたしちょっと本番に行けなくなっちゃったのよ」

「本番に行けないって、ベラトリックスにですか？」

「ええ。そうなの」

それは二人とも全く予想だにしていなかった話だった。

「それって一体、どうしてなんですか？」

スーチが驚いて尋ねるとゼナがため息をつきながら言った。

「それが何かね、急に市長が割り込んできたのよ。明後日から」

「ええ？ そんな！」

「なんじゃと？ 市長じゃと？」

それを聞いてアルマが割り込むと、ゼナが答えた。

「ええ。そうなの。うちのお得意さんで、ちょっとむげにはできないのよ」

「でもゼナさんが一緒に行く必要があるんですか？ 市長さんて凄く上手でしょ？」

スーチの問いにゼナは首を振る。

「それが今度は“ハンド・オブ・グローリー”に挑戦したいって言うのよ。それでぜひあたしにガイドして欲しいって……」

「ええ？ でも……」

「普段ならこんなおいしい話はないんだけど、どうしてピンポイントにかぶってくるかしら」

そう言ってゼナはまたため息をついた。

「やっぱり抜けられませんよね？」

「市長には色々口聞いてもらってるし……それにあたしが抜けたら市長の相手誰がやる？ スーチちゃんやってみる？」

スーチは慌てた様子でぶるぶる首を振った。

「そんな！ハンド・オブ・グローリーって、この間一緒に行ってあたし全然だめだったじゃないですか。盗賊物であれより難しいのなんてあるんですか？ そんなののガイドなんて無理です。相手は市長さんなんでしょ？」

それを聞いてゼナはうなずいた。彼女も本気でスーチにやらせようとは思っていなかったようだ。

「そうなのよ。で、アルマ、相談なんだけど」

いきなり話を振られてアルマはびくっとしてゼナの方を見た。

「え？ 何じゃろう？」

「ローウェルタウンに行くのに、スーチちゃんじゃやっぱり難しいと思う？」

「え？」

アルマはちょっと考え込んだ。だが横のスーチがゼナに言う。

「え？ あたしが行けるんですか？」

そう言ってスーチがゼナにすり寄った。彼女の目が何か期待で輝いている。それを押しとどめながらゼナが言った。

「それはアルマに聞いてみないと」

「ねえ、どう？」

今度はスーチがアルマににじり寄ってくる。何だかそんな様子は子犬が尻尾を振ってじゃれついてくる所を思わせる。彼女が心底ゲーム好きなことはこの短いつき合いでも明らかだ。

アルマは考えた。ローウェルタウンに行くのは決して簡単なことではないが、スーチもまた素人ではないはずだ。それにベラトリックスであれば彼女の庭のようなものだ。いくらでもフォローのしようはあるだろう。そう思ってアルマは答えた。

「うむ。多分問題ないと思う。あの方面はどちらかと言えば盗賊より戦士の方がきついしの」

それを聞いてスーチの目がきらきら輝いた。

「いいんですか？ いいんですか？」

それを見てゼナが言った。

「このゲームを一番知ってるアルマがそう言うんだから大丈夫なんじゃない？」

「余裕は3日もあるし、無理せず行けば大丈夫だと思うのじゃ」

「きゃあ！ ありがとう！」

そう言ってスーチはついにアルマに抱きついて頬をすり寄せてきた。彼女は人間と違って体中が柔らかな毛で覆われていてふわふわして心地よい……というのはともかく、アルマはスーチの喜びように少々驚いていた。

「それじゃその前にあなたのスキンを調整しないと。急だけど今から入ってもらえる？」

ゼナの言葉にスーチは元気よく答える。

「もちろんです。分かりました。ブースは何番ですか？」

「6番があたしの使ってた所よ」

「はい！」

そう言ってスーチは駆け出した。だがドアのところまで走ると、急に立ち止まって振り返った

。「あ！それじゃ受付どうしましょう？」

それを聞いてゼナがちょっと考えてから答えた。

「ああ、そうね。じゃあアルマ、ちょっとお願いできる？」

それを聞いてアルマが少し戸惑いながら言った。

「え？妾でよいのか？まだその、ほら喋り方がこんな調子で」

彼女はここに来てまだ日が浅く、まだ内部の雑用しかしていない。受付に本格的に座るのはこれが初めてになるのだが……だが他に代われる者もいなかった。

「予約はしばらく入ってないし、もう少ししたらイオ君達も出てくると思うから」

ゼナの言葉にアルマはうなずいた。

アルマは彼らと別れると、異界の門の受付フロアに下って、ブースの中に座った。キノコの根元の壺に相当する部分だ。

だが彼女は落ち着かなかった。受付のやり方はこの間教わったから一応理解しているはずだが、彼女はまだ一人で長時間その仕事をこなしたことはなかった。それに彼女は今までこの類の仕事をしたこともなかった。そのことを思い起こすと何だか急に心配になってくる。

《客が来たらどうすれば良かったのじゃ？》

アルマはその場合の手順を頭の中で復習したが、やればやるほど失敗しそうで不安になってくる。

だがゼナの言ったとおり予約はしばらく入ってなかったので、誰もやって来なかった。異界の門は完全予約制なので、受付とは予約客を確認して誘導するのがメインの仕事で、フリーの客の相手をするようなことは意外に少なかったのだ。そのうち彼女は段々退屈になってきた。

「ふうむ」

アルマはブースの中でため息をついた。時計を見るともうそろそろ終わりの時間だ。結局待っている間誰も来なかった。そう思うと緊張していたのが馬鹿らしくなって来る。

《これなら別に妾が待っておらなくとも良いのではないか？》

アルマがそう思った時だった。入り口から誰かが入ってくる気配がする。

《全く！そう思った途端にこれじゃ！》

アルマは慌てて顔を上げる。

そしてそのまま彼女は驚きのあまり凍り付いてしまった。来たのが普通の人だったとしても上手くできたか疑わしいというのに、この客人はとんでもなかった。

最初その姿は背の高い金髪の女性に見えた。だが頭の上に飛び出した大きな耳がそのシルエットに特徴を付けている。その体は上半身は白く、腰からは黄金色の柔毛で覆われている。そしてヒト族では絶対あり得ない長い尻尾が歩くたびにゆらゆらと揺れている。

アルマは緊張の余り全く声が出せなかった。

「……」

その女性の一挙一動が全て完璧だった。彼女はただ歩いて入ってきたただけなのに、その瞬間にこの空間全てを支配したかのようだった。

固まっているアルマにその女性は話しかけた。

「イオはいますか？」

その声にうっとり聞き惚れないようにするには最大限の努力が必要だった。

アルマは慌てて答えた。

「は？ イオといえばその、イオ・クロウリーでございましょうか？」

「はい。そうです」

アルマはがくがくとうなずくと、震える手でイオを呼び出そうとする。だが焦って何度もしくじってしまった。

ヴィジョンの先にイオがやっと映ったとき、アルマは心底ほっとした。

「イ、イオ殿、お、お客様なのじゃ」

アルマがしどろもどろなのを見て多分イオは状況を察したのだろう。

『え？ ああ、わかった。すぐ行くよ』

イオは軽くうなずいて、すぐに接続が切れる。顔を上げるとその女性がアルマを見つめていた。アルマは完全に上がってしまった。

「す、すぐに来られるとそう言っておるのじゃ」

その様子を見て女性はくすっと笑みを浮かべる。

「もしかしてアルマさんですか？」

いきなり名前を呼ばれてアルマは更に顔に血が上る。

「え？ は、はい、でございます」

「あなたのことはイオから聞いてますわ。ウォンさんと同じぐらい強いそうですね」

「え？ は、その、どうもかたじけない、でございます」

「スーチさんは今日はどうしたんですか？」

「え？ は、はい。ちょっとスキンの調整にて潜っておるでございます。ベラトリックスに共に入ることになったゆえ」

それを聞いて女性がちょっと驚いた表情をした。

「え？ 彼女が？」

「は、はいでございます。なんと市長が割り込んで来やがって下さいまして」

それを聞いてその女性は声を上げて笑った。アルマはもう目の前がぼうっとしてきた。このままでは脳がオーバーヒートしてしまう、と思ったときやっとイオがやってきた。

「あ、ティルナ、待った？」

イオは全く自然にティルナと呼ばれた女性に話しかける。

「いえ。全然」

彼女も同様に全く自然に答える。

「じゃ行こうか」

「ええ」

それからティルナはもう一度アルマに微笑みかけると、そのままイオと連れだって行ってしまった。

アルマは呆然としてその後ろ姿を見送った。頭の中は真っ白だ。そのせいで後ろからウォンがやってきていたことには全く気が付かなかった。

「おい！」

「うわああああ！」

そのあまりの反応に脅かしたウォンの方がびっくりして飛び下がる。

「な、なんだよ」

振り返ったアルマはたっぷり5秒ほど口をぱくぱくさせてから、やにわに叫びだした。

「ゼノス族じゃ！ゼノス族じゃ！ゼノス族じゃ！ゼノス族じゃ！！」

「いや、だからそのさ」

「ゼノス族じゃ！ゼノス族じゃ！なんとこんな間近でゼノス族を見てしもうた！ほとんど触れそうじゃった！こ、こんなことは生まれて初めてじゃ」

アルマがパニックになってしまったのも無理はない。ゼノス族とは現在の銀河で最も尊敬されている種族だったからだ。

まず彼らは非常に美しい種族だった。だがもちろんそれだけが彼らに対する崇敬の理由ではない。彼らがそうされるのは、彼らが今現在銀河文明で最も古い歴史を誇ることによる。

例えばヒト族は銀河に進出してからまだ3000年ちょっとしか経っていない新参だが、ゼノスは少なくとも15000年以上の歴史を誇る。それだけでなく、地球人がエジプトやメソポタミアなど最初の文明を築けたのは、実は彼らがやってきて指導していたからだったのだ。あの当時の神話に出てくる様々な神は、実はこのゼノス族とかマメン族——彼らはケンタウロス型をしていた——の姿を映した物だったのだ。彼らがそういった活動をしていていなければ人類はまだ地球の上で原始生活を送っていたのは間違いないとされている。

すなわち地球人にとって彼らはまごうことなき“神”だったのだ。それだけでなく、例えばリアとかヴィンといった他の銀河文明も同様に皆、文明化の際にはゼノスによる初期教化活動(プレ・ミッション)があったことが分かっている。

要するに彼らは現在の銀河における大長老にあたる種族だったのだ。

……と言ったわけでアルマは舞い上がってしまったのだが、ウォンの方はあまりそんな感慨は抱いていないようだった。

「あ、そうかい。そりゃ良かったな。でさ、ちょっと言いたいんだけどさ……」

ウォンが何か言おうとするのをアルマは遮って尋ねる。

「なあ、あの方は一体どなたなのじゃ？」

「彼女はティルナってって、エボカシオンでダンサーをしてんのさ」

「なに？エボカシオン？それはどこじゃ？」

アルマは真剣な表情でウォンに尋ねる。これも無理もない。なぜならゼノス族は宇宙一の踊り手として知られているのだ。

「こっからちょっと北に行ったところにあるよ。でさあ……」

「いつ出演なさるのじゃ？ゼノスの舞をナマで見られるのかや？」

ウォンはなかなか言いたいことを言わせてもらえない。

「ああ。見たきゃイオに言えばチケットは手にはいるぜ」

「おお？ほ、本当かや？」

「嘘なんか言わねえって」

それを聞いてアルマが不思議そうな表情になった。

「して、どうしてイオ殿がティルナ殿と行ってしまったのじゃ？」

その問いにウォンはあからさまにむっとした表情をした。

「どうしたのじゃ？」

アルマは無邪気にウォンに尋ねる。ウォンは渋々答えた。

「どうしてって、要するにイオのこれだからさ」

そう言ってウォンは小指を立てた。

「はああ？」

アルマは信じられないといった表情でウォンを見返す。

「だからイオの恋人なんだよ。ティルナさんは」

それを聞いてアルマも大口を開けたまま絶句してしまった。おかげでウォンはやっと彼女に言いたかったことを言うことができた。

「だからここじゃゼノスなんて全然珍しくないんだよ。それよりおい、お前俺のモニターしてたんじゃないかよ？」

そう。ウォンはあれからアルマにいい所を見せてやろうと、思いっきり無理をしていたのだ。わざわざ難しいコースを通り、敵のレベルまで調整して最高の見せ場を用意したのだ。ところがもちろんその最高にかっこいい場面で彼に答えてくれたのはアルマではなく眠そうな声をしたギメルだった。

「せっかく俺が必殺のテクを見せてやろうって、おい！」

だがアルマは全然聞いていなかった。

「はあ……美しかったのう」

惚けた表情でアルマがつぶやく。

「おい、聞ってるのかよ？」

「どうすればあんなに綺麗になれるのじゃろう？」

「はあ？何を世迷い事を。DNAレベルで問題外だろ！」

それを聞いてさすがにアルマもウォンを睨んだ。

「なんじゃと？言うに事欠いて」

「プ！まさかお前本気でティルナさんに張り合おうってか？寝言は寝て言えって……うご！」

ウォンの叫びはもちろんアルマに一撃食らったからに他ならない。

「何じゃ！せっかく人がおのれに慰めの言葉でもかけてやろうと思っておったのに」

アルマの言葉にウォンも言い返す。

「何で俺がお前に慰められなきゃならないんだよ！」

「だからユーゴ殿におのれの哀れな過去を聞いたからじゃ」

そう言った瞬間さすがのアルマも手で口を押さえて凍り付いた。

二人は絶句して見つめ合う。

一番痛い心の傷を突かれて、ウォンはかっと怒りがこみ上げてきた。

だがそれよりもアルマの逆ギレの方が早かった。

「なんじゃ！おのれは！悪かったな！どうせ妾はスッポンじゃ！ティルナ殿のように綺麗になどなれぬのじゃ！」

そう言ってアルマは駆け去っていく。その後ろ姿を見てウォンの怒りは瞬時に消えてしまった。

《え？またやっちゃったか？》

ウォンの心の中がなぜか後悔で一杯になる……よく考えてみれば怒るべきなのは彼の方だったのだが。

〈第5章〉 ベラトリックス

それから更に3日経った。

HQの中央にある大モニターには、相変わらずランが張り付いて内部を一心に覗いている。その周囲には様々な機械のコードや部品、それに1週間分の食べ物のかすなどが散らかり、まるで光り物の好きな大鴉の巣のようになっている。

「どう？ 調子は」

ランの背後からゼナが心配そうに尋ねる。

「もうカンペキよ！ ほら、ほら」

モニターの中では緊張した面もちの四人、すなわちアルマ、スーチ、イオ、ウォンが一列になって歩いているのが見える。彼らはちょうど街の門を出ていくところだ。アルマは剣士、スーチが盗賊、イオが魔導師、そしてウォンが僧侶の格好をしている。今回のパーティーはすったもんだの挙げ句こういった構成に収まっていたのだ。

あれからちょうど1週間。ランの言葉に偽りはなかった。彼女はほとんど一睡もせずに働いて、ベラトリックスをインストールしてスキンの調整も完璧に終わらせたのだ。その腕前はゼナも再認識せざるを得なかった。

「まったく、こんな時になんで市長が遊んでるのかしら」

ゼナはいまだにぼやいている。

「おーっほっほ！ ゼナちゃん人気者だから！ お客様は大切にしなきゃだめよ！」

ランはあれから更に3日分の徹夜と覚醒剤でハイを通り越して躁状態になっている。部屋の隅のソファの上ではギメルが完全にのびている。

「そのお客様のためにそろそろ行かなきゃならないんだけど、アルマは大丈夫？」

「今のところはね。でもまだ始まったばかりだけど」

ゼナはまた大きくため息をついた。今回のメンバーはやはりどうも不安だ。

「まあアルマちゃん、結構しっかりしてるみたいよ」

「だといいいんだけど」

ベラトリックスというゲームはその名前は有名だといっても、さすがに現在稼働している所はない。従って今ベレンにいる者でアルマ以外の経験者は一人もいない。こういう場合最も経験のある者がリーダーになるのは当然なのだが……

「ウォンは？」

「今のところ口げんかを二回ぐらいしただけね。両方ともスーちゃんが仲裁してたけど」

ゼナはまたため息をついた。

「イオとスーで手に負えなくなったら遠慮なく雷落としていいわよ」

「それがね、このモニターシステム、古いからそこまで介入できないのよね」

ゼナはまたまたため息をついた。

「ゼナちゃ〜ん、心配しててもしょうがないわよ。あの子達を信じてやりなさい！ あっはははは」

「あなた、今幸せでしょう？」

「だってこんなにおもしろかったこと久しぶりだもの。ゼナちゃんに一番乗りさせてあげたじゃない！」

「分かったわよ。ともかく後をよろしくお願いね」

「OK！ OK！ きゃはははは！」

意味もなく笑い転げているラーンを残してHQを後にしながらゼナは思った。

《まったくラーン！ あなたの方がもっと心配なんだけど》

パーティーの経験が足りないことは想定内の範囲だ。たとえ彼女が付いていった所で、ベラトリックスというシステムでは初心者でしかない。だから問題があったときは外部からの補佐が重要になるのだが、その外部モニターが今のラーンというのも不安要素の一つだった。せめて誰か他の者がモニターできればまだ違うのだろうが。しかしミスもエイドリアンも他に頼れそうな者は今回のどさくさで多忙を極めており、ここにずっと詰めることなど論外だ。

後から考えればこの時市長を放り出してでもゼナが残っておくべきだったのだが……現実世界というシステムはなかなか優れ物なのだが、リロードが効かないという欠点があった。



急造パーティーは最初から前途多難だった。彼らは今戦闘を一つ終わらせたばかりなのだが、ウォンとイオはそれだけで疲れて座り込んでいた。

「こら！ ウォン！ かようなザコ相手に何じゃ？ そのざまは！」

「うるせえな、勝手が違うんだからしょうがねえだろう！ なんでこのメイスはこんなに重ってえんだよ！」

「メイスなんじゃから当たり前じゃろうが！」

このベラトリックスという1500年前のシステムは、現在のシステムの基礎になっているだけあって、様々な点でなじみのある仕組みになっていた。だが反面やはり同じぐらい多くの点で現在のシステムと異なっている。

ウォン達にとって最も苦勞なのが、このゲーム内の法則が必要以上に“リアル”である点に尽きた。

例えば武器の重さだ。ここの武器を基準に考えれば、アルマが以前武器が軽いと言っていたのは当然のことだ。だが実際の重さにはこちらの方が近いのだ。

「大体な、これでも2割ほどは軽くなっておるのじゃ。贅沢を申すでない！」

「ともかくちょっと休ませろよ。このままじゃ身が持たないぜ」

「そのような物をぶんぶん振り回せば疲れて当然じゃ」

また大きな違いはこのゲームでは疲労度がかなりシビアに設定されていることだった。現在のゲームではテンポ良く進められるように、少々暴れ回ったぐらいでは疲れなくなっている。だがこの世界ではそうではなかった。そのため重たいメイスを思い切り振り回していたウォンはあっという間にへとへとになってしまったのだ。

「それにしても結構これはきついよな。ちょっとやり方考えないとまずいぞ」

同じく息を切らしながらイオが言った。イオの場合は魔導師なので直接戦闘はしなかったが、簡単な魔法をいくつか使っただけで精神力が尽き果ててしまったのだ。

「魔導師はな、精神集中が大事なのじゃ。集中力が高ければ高いほど魔法の効力も上がるのじゃ」

「集中力っていったいどうするんだ？」

「妾はあまり魔導師はしたことがない故詳しいことは言えぬが、カイの言うことには脳波やら何やらをモニターして、雑念のないときに破壊力が上がるというておった」

それを聞いてイオは天を仰いだ。

「そんな所を見てるのか？ それって滅茶苦茶難しくないか？」

「そうかや？ じゃが妾と共に潜っておったオブルは上手じゃったぞ。彼が言うには誰でも練習すればうまくなると言うておった」

「そんなものかね？」

「オブルが言うには、まず明かりを灯す魔法で練習するのが良いと言っておったぞ。これならば効果が目に見えて分かるし、それができれば他にも応用はすぐできるとな」

「ふーむ。まずやってみるしかないかな」

まだしばらくウォンがここを発てそうもないので、イオは言われたとおり明かりを灯す練習を試みる。確かにちょっと慣れてくると前より少し明るくなるようだ。

「ふむ、まだまだじゃが、その調子ならすぐに上達しそうじゃ」

そう言ってアルマはまだ荒い息をしているウォンを見下した。

「それにしてもおのれはだらしのない。スー殿を見てみよ。ぴんぴんしておるではないか。彼女を見習うがよいぞ」

ウォンがわめき出す前にスーチが言う。

「あの、アルマ、あたしあんまり参加しなかったから……」

「そのようなことはないぞ。スー殿も一人倒したではないか。見たところ盗賊が板についておるようじゃが、それが好みなのかや？」

「あたしのって言うより、ゼナさんの好みなだよ。マンツーマンでしっかり訓練されたから……」

「ほう？ ゼナ殿が盗賊じゃと？」

「そうなの。女盗賊シャルカ様って言ったら、その筋じゃスターだったのよ」

「シャルカ？」

「ああ、字名(あざな)ね。メガマルチのゲームでは特別なハンドルネームがあって、選ばれた人しか名乗れないの。これを持ってる人はトップクラスなのよ」

「メガマルチとは？」

「ああ、一度に何万人も入れるゲームのことよ。ネバーランドなんか有名だけど。それだけ人が入っていると、そこでトップを取るのはとても大変なのよ。だから字名っていうのはそういう人たちのための名誉の証なの。ミスさんは闇のジシュカだし、ランさんは暴風魔導師リブシェだし、エイドリアンさんは無抵抗のヴァーツラフなのよ」

「ほう。スー殿は持たぬのかや？」

スーチは慌てて手を振る。

「とんでもない！ イオ君やウォン君も持ってないのに」

それを聞いてアルマはウォンの方をちらっと見た。

「ほう？ じゃがあの男は剣聖ではなかったかえ？」

「剣聖みたいな称号は条件さえ満たせば誰でももらえるのよ。もちろんそれはそれでとっても難しいけど。でも字名をもらうのはもっともっと難しいの」

「ふーむ。それにしても一時にそれだけ入れるシステムがあるとは、あの頃とはマシンパワーが段違いなのであろうな……」

アルマとスーチがそんなことを話しているうちに、ようやくウォンとイオの体力が回復した。

「アルマ、そろそろ行けるよ」

イオの言葉にアルマがウォンを見ながら言う。

「そちらの男はどうなっておる？」

「ああ？ 俺も大丈夫だぜ」

「じゃあ行く？」

そう言ってスーチが立ち上ろうとする。だがアルマはそれを制して言った。

「その前に少し戦い方を指南してやる必要がありそうじゃな」

「え？ 本当？ アルマが教えてくれるの？」

「スー殿は今のままで十分じゃ。問題なのはおのれじゃ」

そう言ってアルマはウォンを睨んだ。

「なんだと？ 俺の戦い方が下手とでも言うのか？」

「どこをどうやったらそんな世迷い言がほざけるのじゃ！ おのれがくたばってしもうたら、パーティーがどれほど危険になるか分かっておるのか？」

アルマは胸ぐらを掴まばかりの剣幕でウォンに詰め寄った。またウォンがわめき出しそうになるところにイオが割って入る。

「まあまあ、ウォンはいつも通りに勢いで言ってるだけだよ。実際こんなに簡単にへ口へ口になっちゃまずいよな」

「……」

その事実を一番感じていたのはウォン自身であったから、それ以上何も言えなかった。むっとしたウォンの顔を見てアルマは言った。

「まあ、おのれは筋は悪くないのでな、ちょっとこつを掴めばすぐ慣れよう」

「そりゃどうも。で、どうするんだよ。精神集中でもするのか？」

「まあそれもあるがな、まずはそれ以前じゃ。そのメイスを貸してみい」

そう言ってアルマはウォンからメイスを受け取ると、大きく上段に構えた。

「このように構えてな」

「ああ」

ウォンはアルマの一挙一動を見逃すまいと目を見開いた。だが彼女はそのままメイスを振り下ろしただけだった。

「こうして一気に打ち下ろすのじゃ。これならば武器の重さも相まって、このあたりのザコであ

れば一撃で吹っ飛ばせよう」

そのあまりにも当たり前の説明に、ウォンはしばらく言葉が返せなかった。

「そ、それだけかよ？」

「ああ、それだけじゃ」

「そんなんで外したらどうするんだよ」

「その場合は死ぬのじゃ。故に外さぬように打て」

「お前、簡単に言うけどな……」

「ああ？ 敵の動きをよく見れば、タイミングなどすぐ分かるはずじゃ。分からぬ時はまずは相手の攻撃をひたすら受け流せ。さすればどう来るかは分かるようになるし、それで突っ込まれるような相手であれば、さっさと逃げた方が身のためじゃ」

それを聞いてスーチが言った。

「あら？ それってあたしもよく言われるわ。ゼナさんは口を酸っぱくして、相手の動きを読めって言うのよ。盗賊のような非力なキャラの場合はそうしないと生き残れないって」

「盗賊に限らず接近戦をする者にとっては当然のことではないのかや？」

それを聞いていたウォンが怒ったような声で言う。

「あのなあ、動きを読むなんて当たりめえだろう？ 人を馬鹿にしてんのか？ 俺がそうしてないとも言うのかよ！」

「だったらどうしてそんなに下手なのじゃ！」

二人がまた口論になりそうな所でイオが割ってはいる。

「ちょっと待った、なんか分かったような気がするぞ」

三人はイオの方を見た。

「何が分かったんだよ」

「この間お前らがファイナルブレードでバッサバサ斬りまくってたじゃない。外からみてたんだけどな。お前とアルマが同じ戦士でも何か違うよなって思ってたんだよ」

「当然じゃ。このような者と一緒にするでない」

「あんだと？」

それを聞いてわめきだそうとするウォンを押さえながらイオは続けた。

「まあまあ、それはともかく置いといて、ウォン、別にお前が動きを読むのが下手な訳じゃないんだよ。それどころが、何て言うかすごく効率よく戦ってるんだよな。例えば一人やっつけたら返す刀で別な奴がやれるようになって、そういうことまで考えてるだろ？」

「当たり前じゃん」

「でもアルマの場合は一人一人を着実にやっつけてるんだ。だから敵をやっつけるスピードではお前が勝ってたんだけど……でもそれってお前の剣が良く切れるからこそできる芸当だよな」

それを聞いてアルマが付け加える。

「そうじゃ。イオ殿の言う通りじゃ。おのれは良い剣を使いすぎじゃ。あんなに軽くて切れ味の良い剣に慣れておるから、こういった普通の武器で困るのじゃ。ああいう剣であればただ相手の体に当てさえすれば良いのじゃが、このような武器ではそうはいかぬ。特に下から薙ぎ上げても

ほとんどダメージは与えられぬわ」

言われてみるとウォンも納得できる話だった。戦闘になるともう自動的に体が動いてしまうので気づいていなかったが、確かにウォンは重いメイスを持ってそのような戦い方をしていたのだ。確かに一見獅子奮迅という様相だったのだが、ザコ相手にやっていたのでは身が持たないのも事実だ。

「じゃあ何か？ あんなザコどもを一匹ずつ、ぷちぷちやってけてのか？ ダセエぞ！」

「がたがた申すな！ あんな戦い方はグラムかエクスカリバーを得た者のみに許されるのじゃ」

それからまた二人の口論が始まってしまったので、出発はもう少し遅らせなければならなかった。



それからしばらくして一行は薄暗い森の中をかき分けながら進んでいた。

「ここ何も出ないのよねえ？」

スーチが心配そうに言う。

「大丈夫じゃ。外を通った方が遙かに剣呑じゃ」

一行がこのようなところを通っている理由の第一は、なるべく敵が少ないルートを探る必要があったからだ。普段なら特にウォンは絶対そんなことは拒否しただろう。だが今回はそうもいかなかった。

先ほどのアルマの指示は結果的にかなり効果的だった。またウォンやイオは一応このタイプのゲームのプロだという意地もある。2回目以降の戦いは1回目に比べて遙かにましになったと言って良い。だがましだとは言ってもそれは比較の問題で、いつもに比べたらど素人レベルだ。敵を蹴散らしていくことなどほぼ不可能と言って良い。

それにそもそも今回プレイしている理由は、アルマがカイからのメッセージを聞くためにローウェルタウンまで行くためである。こんな所のザコ戦で時間の浪費をしているわけにはいかない。

そして理由の第二は森の先に絶対行かなければならない場所があったからだ。

ローウェルタウンに行くためにはかなり強力な怪物達がうろついている場所を通り抜ける必要があった。そういった場合、普通ならゲームのレベルを落としたりすることで対応できたのだろうが、こんな古いシステムにそんな便利な物はない。いやあったのかも知れないが、少なくともラーンの解析はそこまでは及んでいなかった。

そこで彼らは仕方なく一から始めるしかなかった。そして手っ取り早くそんな怪物達とやり合えるぐらいに強くならなければならなかったのだ。

そのために作戦会議の時にこのようなやりとりがあった――

「妾はベラトリックの中のことであればよく知っておるが故、ローウェルに行くだけであれば、急げば1日はかからんと思うぞよ」

「そんなに短時間で固有レベルが上げられるの？ ここって相当敵のレベルが高い所でしょ？」

それに対してゼナが質問した。この時はまだゼナが行く予定だった。

「効率の良い上げ方があるのじゃ。最初の街の周辺では得られる経験点もたかが知れておる。だからさっさと隣の大陸に渡ってしまうのが良いのじゃ」

「そんなところにいきなり行って大丈夫なの？」

「腕さえ良ければ何とかなる強さじゃ。そこな男はそれしか取り柄がないじゃろう？」

「お前の言い方いちいち引かかるんだよ」

このキャラクターに固有レベルがあるという考え方も、最近のゲームでは珍しい物だった。NSEの場合レベルとは一般にプレイヤー本人の実際のスキルのことを指す。だがこういう初期のゲームの場合はもっと古いゲームのシステムを引きずっていて、本人のスキルとは別に“固有レベル”という物が設定されている場合もある。

具体的には固有レベルが低いと動きが制限されたり相対的に敵の動きや攻撃力が高くなったりで“弱さ”を演出する仕組みが大半だ。この固有レベルは敵をたくさん倒していけば段々上がっていく。言い換えるとどんな下手な人間でもやっていたら必ず強くなれるわけだ。

だが最近のシステムの場合、ショートシナリオが主流であることもあって、そういうややこしい仕組みは忌避される傾向にあった。そのためウォン達は固有レベルの付いたゲームはほとんどやったことがなかったのだ。

「分かったわ。それじゃアルマ、その短時間でレベルが上げられるってルートについて、もっと詳しく教えて」

「もちろんじゃ。まず最初の街で装備を調えるのじゃが……」

——今彼らが目指す場所はそのときアルマが説明したルートの最初の鍵となる地点だった。

トップを歩いていたアルマが止まれという合図をした。見ると森が切れてその向こうに堀立て小屋が見える。スーチがそこをじっと観察しながら言う。

「あそこが野党の根城なの？」

「そうじゃ。この時間は手下どもは街道の方に稼ぎに行っておるので根城は手薄じゃ」

「でも見張りが立ってるわよ。こんな開けた所じゃすぐ見つっちゃうわ。夜まで待つのか？」

「そんなことをすれば手下が戻ってきてしまう。しばらく待つだけでよいのじゃ。必ず夕立が降るのでな」

「ええ？ 本当に？」

そう言ってスーチは空を見上げる。確かに暑いがいい天気だ。半信半疑ながらも夕立が来たときに襲撃する手順について一行は相談した。

しかししばらく待っていると本当にアルマの言った通り、にわかにかが暗くなって雷鳴が轟いてきた。

「もうすぐ土砂降りになるぞよ。その時には示し合わせた通りに頼むぞよ」

一行はうなずいた。さすがにウォンもこういうときにアルマをからかうほどバカではない。

凄まじい雷鳴と共に、一気に大粒の雨が降り始めた。

「それ、行くぞ！」

それと共にアルマが飛び出した。一行もそれに続く。

見張りは雨に気を取られていて、最後の瞬間まで迫ってくるアルマ達に気がつかなかった。気配にやっと気づいた見張りは、振り返った瞬間にスーチによって喉笛を切り裂かれていた。

一行はそのまま小屋に突っ走る。アルマが小屋にたどり着くと中を窺いながらイオにサインを出す。イオはおもむろに扉を蹴破った。

小屋の中には数名の野党とボスとおぼしき大男がいる。イオは挨拶も抜きに部屋の中にファイヤーボルトを打ち込みまくった。敵を傷つけるためというより、部屋の中の可燃物に火を付けるためだ。

野党達は突然の襲撃に混乱を来し、燃え上がった小屋から脱出できてまともな迎撃体制を取れたのはボスと子分が二人だけだった。作戦は見事に成功したと言って良いだろう。

「よっしゃ！ いただき！」

ウォンに限らずみんなそういう気分だった。しかしそれにも関わらず以降は想像もしなかった苦戦となった。

雨の中の戦いは予想以上にやりにくかった。だがさすがにそのぐらいは想定の内だ。最初のミスは、ウォンとスーチが同時に一人の子分を攻撃してしまったことだった。その瞬間フリーになったもう一人の子分が、魔力の切れたイオに襲いかかったのだ。

またイオもここで逃げていれば良かったのだが、ついうっかり応戦してしまった。いつもなら何とかできたかもしれないが、このゲームはそんなに甘いものではなかった。

「うわあ！」

イオは攻撃を避けきれずかなりの深手を負った。それを見て慌ててしまったスーチとウォンは、二人掛かりなのに相手を倒し損なってしまった。

その間アルマはボスにかかりっきりだった。いかなアルマであってもこのレベルで対一では防戦一方だ。

またそれに輪をかけるようにウォンはイオを助けに走ってしまった。冷静に考えればこの際見殺しにしていた方がまだ良かったのだ。もう一発食らってイオが昏倒しても、そのまま即死するわけではないし、傷を治したからといってこの状況でイオが役に立つわけではない。

「やーん！」

ウォンが離脱したためスーチが今度は手下と対一になり、一気に押し込まれてしまう。

「何をしておるのじゃ！」

だがアルマは助けに行ける状況ではない。ウォンもやっと状況を把握し、再びスーチを助けに行く。その途端イオを狙っていた子分がウォンに後ろから襲いかかる。

「危ない！」

その子分に対してイオが捨て身のタックルをしたおかげで、ウォンは致命傷を食うことはなかったが、今度はスーチが支えきれなかった。

「きゃあああ！」

「スー殿！ うわあああ」

スーチがやられるのを見て焦ったアルマがボスの攻撃を受け損ない……といった調子で、そこから逆転できたこと自体が奇跡に近かったが、とにかく何とか敵を全滅させたときには全員が半

死半生の状態だった。

ウォンの治療魔法が効いてくる間、四人は荒い息をしながら呆然と見つめ合っていた。何とか回復してくるとイオがぼそつと言う。

「よく生きてたな……」

「ねえ、これって厳しすぎない？」

スーチの問いにアルマも考え込む。

「ううむ。ここは確かにきついところではあるが、こ奴らにこんな苦勞をするようでは……」

「隣の大陸に行ったら敵はもっと強いんだよね？」

「ううむ。物によってはな。ここのボスはここでは相当に強い方じゃが」

確かにゲームを知悉した熟練パーティーであれば、アルマの言っていたルートも可能かもしれない。だが今のメンバーではかなり厳しそうだ。

その時ウォンが言った。

「ま、ともかくそれでそのチケットってのは取ったのかよ？」

「おお、忘れておったわ。ここで忘れては洒落にならぬな」

アルマはそう言ってボスの死体を探ると、銀色に輝く三角形の板を取りだした。

「それがそうなの？」

「ああそうじゃ。これがあれば七つの大陸どこにでも渡ることができるぞよ」

一行がここを襲撃した理由はこれを手に入れるためだった。このチケットは買うこともできるが、かなり高価だ。買えるだけの金を貯めている暇はない。ここのボスは必ずこれを持っているのだ。

「でも片道なんでしょ？ 行って戻れなかったら？」

「大丈夫じゃ。あっちに渡ってしまえば、儲かる仕事はたくさんある。チケットぐらいつぐ買えるようになるのじゃ」

「でもなあ、それ以前に生きてられるかって方が問題だよなあ」

イオの言葉に全員考え込んでしまった。

「やっぱり地道にやってた方がよくない？ 無理して全滅しちゃったらすごいロスでしょ？」

「確かにスーチの言うことも尤もなんだが……だとすると3日でできるのか？」

イオの言葉にみんな顔を見合わせる。今回のプレイのために一応3日間の余裕を見ていた。だがそれを捻出するためにあちこちのスケジュールにしわ寄せがいつているため、これで失敗したら次は早くも数ヶ月先になってしまう。

それを聞いてアルマは考え込む。

「うーむ。ローウェル周辺にいる怪物どもは、こんな奴らの比ではないのじゃ。そいつらと戦えるまで真っ当にやっついては1週間かかるやもしれぬ」

「じゃあどうする？」

イオの問いにアルマはしばらく考え込んだ。それからふつと顔を上げると三人の顔を見回した。

「あれは使えるじゃろうか？」

「あれって？」

イオの問いにアルマが答えた。

「無敵コマンドじゃ。それをかけておけばこのようなザコは蹴散らして行けるわ」

「無敵？ どんな奴らでもやっつけられるようになるのかい？」

「いや、やられなくなるだけじゃ。自分の強さは変わらぬので、膠着してしまうこともあるがな。でも今よりはずっとましであろう？」

確かに死なないだけでは相手を倒せることにはならない。だが戦闘ごとに半死半生になるよりはよっぽど良いだろう。

「そんなのがあるんならどうして最初から言わねえんだよ」

ウォンがそういうとアルマは答えた。

「これは本来デバッグ用のものじゃ。どうしようもない場合にのみ使えと言い含められておる。それに無敵になどなってしまったらゲームがつまらぬであろうが」

「まあ、そうだけどな……」

それを聞いてイオが言った。

「でもそんなデバッグコマンドがリリース版に残されてるのか？」

「分からぬ。残されていれば使えるじゃろうし、使えなければ残されていないのじゃろう」

一同は絶句した。なんだかすごく行き当たりばったりな感じがする。だがせっかく苦勞してここまで来たのにまた数ヶ月も待つというのも嫌だった。

しばらくしてウォンがアルマに言った。

「まあ、何か怪しいっぽいけど、今は結構どうしようもない状態なんじゃないのか？ どうせならやってみたら？」

「ええ？ 大丈夫？」

それを聞いてスーチが心配そうに言う。

「やるんだったら、せめてラーンに見ててもらった方が良くないか？」

イオも心配そうにそう付け加える。

「それが道理じゃな。ではしばし待たれよ」

そう言ってアルマはラーンに通信を始めた。



ラーンはこの日まで1週間ほとんど不眠不休で作業していた。作業の成果が出て万事うまく行きだしたとあれば、当然彼女が採る行動は決まっていた。

すなわちアルマがラーンを呼び出したとき、彼女はコンソールに突っ伏して熟睡していたのだ。彼女が目を覚めたのは数度目のコールがあっただけだった。

『ラーン殿、ラーン殿！』

「ふあーい……」

『おお、やっとながった、ちょっと見ていて欲しいのじゃ』

「はあ？ ぬあにを？」

『これから妾は無敵コマンドを使おうと思うのじゃ。妖しげなことが起こらぬように見ていて欲

しいのじゃ』

当然ながらラーンの脳細胞は10パーセントも活動していない。

「ふおーい。OKよう」

それを聞いてアルマはなにやらややこしい呪文を唱え出す。それを聞きながらラーンの頭は徐々に稼働し始めていた。そしてとんでもないことにOKを出してしまったことに気づいたのと、派手な効果音と共に3Dモニタがフラッシュしたのとはほぼ同時だった。

「ちょ、ちょっと！アルマ」

『すまぬ。だめであった』

「はあ？」

見るとアルマ達はさっきと全く同じ状態でそこに座っている。

『やはりそのようなコマンドは無効のようじゃ』

「い、今光ったのは何よ！」

『これはデバッグコマンド用の特殊効果じゃ。失敗しても光ることは光るのじゃ』

ラーンは思いっきり安堵の息を吐いた。

「びっくりさせないでちょうだい！それとやっぱり今後そういうのはだめ！禁止！」

『すまぬ。手間をとらせたの』

そう言ってアルマは通信を切った。それから一行は立ち上がると街に向かって歩き始めた。

《無敵コマンド？まったく、無効で良かったわよ。んなもん動かされたら何が起こるか分かったもんじゃないわ！》

ともかく結果的に何も起きなかったのは幸運だった……そう思った途端にラーンは安心してまた眠ってしまった。



「ラーン殿、ラーン殿！」

『ふあーい……』

「おお、やっとつながった、ちょっと見ていて欲しいのじゃ」

『はあ？ぬぁにを？』

「これから妾は無敵コマンドを使おうと思うのじゃ。妖しげなことが起こらぬように見ていて欲しいのじゃ」

『ふおーい。OKよう』

通信は周囲の者にも聞こえていた。

ラーンの返事を聞いてアルマはなにやらややこしい呪文を唱え出した。

「ラーンさん、寝てたみたいね」

スーチがつぶやいた。

「まあ、ずっとやってたからな。あのパワーはどこから出て来るんだろうね」

イオが答える。その時呪文が終わったようだ。派手な音が鳴り響き、目の前が一瞬真っ白にな

った。

視界はすぐに戻ってきたが、正常な点と言えればほとんどそれだけだった。

《おい、体がうごかねえぞ！》

途端にそこにいたアルマ以外の三人は体が麻痺してしまった、というよりいきなり身体感覚が全く消え失せてしまったのだ。体を動かそうにもその体がどこにあるのかさっぱり分からないのでどうしようもないのだ。

三人はアルマを見つめた。というより彼女を見ていた状態で凍り付いていた。アルマもまたびっくりとも動かないように見えるが、他のメンバーと違って口元が動いている。何か話しているようだ。

それからまたびっくりするようなことが起きた。なんと全員の体から霊体が離脱したのだ！もちろん本当にそうなのではないが、とにかくそうとしか表現しようのない現象だった。その“霊体”は実物に違わぬほどリアルだった。

《！》

叫びたくとも声は出せない。離脱した霊体は立ち上がると、そのままアルマを先頭に街の方に歩いて行ってしまった。

三人はしばらく呆然とその姿を見送った。それからめいめいに心の中でつぶやき始めた。例えばウォンの場合はこういう感じだ。

《一体何が起きたんだよ？》

ウォンはまず自問自答した。これがアルマの呪文のせいだというのはほぼ間違いないが、それだけでは何の説明にもなっていない。こういう時は状況確認が第一だ。

《我が名はウォン・リンドゥーなり。ここに真の名を以て異界の扉を開かん！》

どのような状況でも、例え言葉を封じられた状況でもこのシステムコールの呪文だけは効く。というか効かなければならない。そういうようにできているのだ。そして聞こえるはずの天の声に対して『状況確認』と言ってやればいいのだ。そうすれば彼らが現在陥っている状況に関して何らかの情報を与えてくれるはずだ。

ところが今回だけはそうはいかなかった。ウォンが何度その呪文を唱えても、全く何の反応もなかったのだ。聞こえるべき天の声は聞こえてこない。

その状況がどれほどまずいことか、いかに楽観的なウォンでも理解できた。すなわち今の彼は本当に何もできないのだ！

それからどのぐらいの時間が経ったか分からない。多分そんなに長い時間だとは思えないが、三人には無限のように長く感じられた。それはアルマの次のような叫びによって唐突に破られた。

「アホンダラァ！ さっさと戻さんかい！」

それと共に三人の体の自由が戻った。彼らはしばらく自分の手足を動かしてみて、それが現実だと確認していた。それから声を合わせて言った。

「アルマ！ 何だよ？ こりゃ！」

「アルマ！ 何したんだ？」

「アルマ！ なに？ これ！」

だがアルマはそれには答えず、その場にへなへたと崩れ落ちてしまった。そしてその横の空間にいきなり男が湧いて出たと思ったら、ぺらぺらと喋りだしたのだ。

「やあ、君たちがマーの友達かい？ 僕はカイ・ヴェッセルだ。もし君たちの誰かがマーと結婚したいんだったら、僕のことをお兄さまって呼ぶことになるんだ。分かったかい？」

分かるはずがない。

〈第6章〉 カイ

この時点での三人の感想は“何だかひどく疲れた”というものだった。

彼らは見事にはめられたのだ。どうやらアルマの兄貴が仕掛けた悪ふざけにひっかかってしまったらしい。だがそれを怒ってもしょうがなかった。このたぐいのイースターエッグはどういうゲームでも一つ二つは仕掛けられている物なのだ。

三人はしばらくぼかんとして出てきた男の顔を見つめていた。

それからウォンがこっそりとアルマに尋ねる。

「おい、アルマ。なんだよ？ これ」

「だから……カイじゃ」

アルマがうつむきながら答える。

「お前の兄貴ってこんなバカだったの？」

「まあ……そう言われても仕方ないぞな……」

スーチも同様にアルマに尋ねる。

「お兄さんってこんな顔だったの？」

「それは……うり二つじゃ」

最後にイオも尋ねる。

「君、マーって呼ばれてたんだ」

「……ああ、そうじゃ」

そして三人は口々に言う。

「こりゃちょっと洒落にならなかったぞ」

「全く驚かさないでよ」

「死ぬかと思ったぞ！ コラァ！」

ところがそれを聞いてもアルマはうつむいたままだ。いつもならすぐ何か言い返すはずなのに。

「えっと、アルマ？」

スーチが心配そうにアルマの顔をのぞき込んだ。その途端アルマがスーチに抱きついて泣き始めたのだ。

「すまぬ！ すまぬ！ 妾は取り返しのつかぬことをしてしもうた！」

「ど、どうしたのよ、アルマ？ ねえ、どうなったの？」

驚いたスーチがそう言った途端、それまで黙っていたカイがアルマに向かって喋り始めた。

「おや？ マーは何だか取り乱してるようだね？ どうしたんだい？」

それを聞いてアルマは振り返ると大声でわめいた。

「お、おのれのせいじゃろうが！」

「そう言われてもなあ」

カイはそう言って肩をすくめる。

「おのれは、どうにかできんのか！」

「さっきも言ったとおりそりゃ無理だって。僕は単なるシェルなんだよ。人格は付いてるけどね

。物事を判断して実行する機能なんてないんだよ。っていうか、僕みたいなAIが大切な判断を下してしまったら、怒るのは君たちだろう？」

「そんなことは聞いておらぬわ！ コマンドを中断する方法はないかと聞いておるのじゃ！」

「ああ？ そうは取れなかったけどなあ。まあともかく、残念だけどそれはできないみたいだね。繰り返すけどカイはこのコマンドをすごく短時間でハックしなければならなかったんだ。だから行くところまで行かないと止まらないようにできてるんだな」

再びアルマはへたりこんだ。

周囲の者は二人の会話がどうもかみ合っていないことしか分からない。そこでスーチが割り込んだ。

「あの、アルマ、なんなの？ これ……」

アルマは大きなため息をついた。

「おお、妾は頭痛がしてきおった。カイ、おのれ、こ奴らにもう一度状況を説明せい」

「ふむ。それならば簡単だ。頭痛の処置はいいのかい？」

「放っておけ！」

アルマが凄い顔でカイを睨む。だがカイは相変わらず涼しい顔をしている。

「それなら仕方ないね。でもひどくなったら言うんだよ。じゃあ説明しようか。その前に君たちの名前を覚えてくれないか？ どのメモリーの隙間に突っ込まれたのか知らないんだが、君たちのことアクセスもできないんだ」

呆気にとられながらも三人は名前を教えた。

「うんそうか、イオ君にスーチちゃんにウォン君だね？ それじゃ説明しよう。まず僕たちの置かれた状況だね。これはこういうことのはずだ。マーはコールドスリープから目覚めた。ところが起こしに来たのは最愛の兄ちゃんじゃなくて、どこぞの見知らぬ怖いおじさん達だった。あ、もしかしたらお兄さんとかおばさんとかかもしれないけど、おじさんにしとくよ」

三人は顔を見合わせた。こいつ何を言っているのだ？

「おじさん達はマーを無理矢理に連れ出して、ベラトリックスに突っ込んだ。おじさん達は少しは頭が回ったんだね。マーをジェストコーストまで連れていく代わりに、本当の場所を見つけちゃったんだから。そしてマーに強制したんだ。ローウェルタウンまで行って、カイのメッセージとやらを聞いて来いって。実はここには奴らにとって有用なメッセージなんてないんだけど、奴らがそんなこと知ってるわけがないだろ。だからこそこうしてマーを連れてきたんだけど、とにかくそういうわけでマーは宇宙で一番孤立無援な女の子になっちゃったわけだ」

「……」

「でもその時にマーはすてきなことを思いついたんだ。おじさん達にとってささやかな誤算だったのは、マーが宇宙で一番ベラトリックスに詳しい女の子だったってことなんだ。だからマーはこんな時に使えそうな素敵な呪文を知ってたんだ。これはとつても秘密の呪文だったんで、僕とマーしか知らなかったんだね。その呪文の効果はいろいろだった。必要に応じてどんどん入れ替えられてたからしょうがないけど。確か最後はみんなが無敵になる効果だったかな？ あのブルードラゴンの谷を手っ取り早く通り抜けるにはそうしないとしょうがなかったからね。ともかく

その呪文は“マーちゃんが困ってどうしようもなくなったときのすてきな呪文”っていうのが正式名称だったんだ」

三人はアルマの顔を見た。アルマは赤くなってうつむいた。カイというのはあまりネーミングセンスは良くないらしい。

「考えてみたら、今ほどマーが困ってどうしようもない状況ってないだろう？ だったらそういう呪文を唱えてみたからってバチは当たらないよね。そうして奇跡は起こったんだ！」

「いったいどうなったんだよ？」

「君はウォン君だっけ？ まあそう急ぐなって。とっても素敵なんだから。まずカイはこんな状況にマーが陥る可能性は最初っから想定してたってことだ。だからそこからマーが脱出するための方策もあらかじめ組み込んでおいたんだよ。そういうわけで今の“マーちゃんが困ってどうしようもなくなったときのすてきな呪文”の中身は“マーちゃんの極悪人のアジトから脱出大作戦”って内容になってるんだ。いいだろ？」

三人はやっと自分たちが置かれた状況を理解し始めた。だがそれにしてもこの男は何か非常に途方もないことを言っていないか？ そこでイオが率直にその点を尋ねた。

「あの、ちょっと訊いていいですか？」

「もう僕たちは友達だからね。何なりとどうぞ」

「要するにあなたは、アルマを悪い奴らから逃がしてやろうとそういうことなんですよ？」

「おおむね正解だね。でもマーだけじゃなくて君たちも一緒に逃げられるように全力を尽くすさ」

「そりゃどうも。で、その場合、ゲームの中ならともかく、ゲームから抜けた後はどうするんです？ そこにも敵はうようよいるんだし、あなたはゲーム中の存在でしかないですよ？」

それに対してカイは全く動じることはなかった。

「おお、君はイオ君っていったっけ？ ナイスな質問だね。確かにゲーム外になると僕もここほど簡単には手出しできないね。だからこれから言うことはしっかり把握しといてくれよ。でないと思っても寄らぬゲームオーバーになっちゃうからね」

三人はまた顔を見合わせた。

「でも物事には順序ってもんがあるんだ。だからゲームから抜けた後の話の前に、ゲームの中での話をすべきだよ。いいかな？」

「え？ そりゃまあ……」

「じゃあ、最初にまずちょっと確認をしておこうか。ベラトリックスを稼働させるには結構な設備が必要だよ。ベラトリックスのシステムをインストールして動かさないといけないし、NSEシステムはとっても高価だし、大量生産している物でもない。だからおじさん達がマーのためだけに自前のシステムを構築するなんて、あまり考えなくていいよね。既にベラトリックスが動いてるどこかのゲームセンターを貸し切りにするとか、ゲームの開発元を占領するとかするはずさ。ってことは物理的なセキュリティはあってもそこまでは厳しくないと思えるね。軍事施設からの脱出みたいなことにはならないわけさ。でもそこにいる奴らはみんな敵だって思っておいた方がいいけど。マーが決死の脱出をするのはこんな状況からなんだ。わくわくするだろ？」

そう言ってカイはイオにウインクした。イオはため息をつきながら答える。

「あまりそういう気にはなれないけどね」

「イオ君。君って悲観的なんだね。まあ人それぞれさ。それはともかく、マーが素敵な呪文を唱えたら何が起こるか説明しようね。まず第一にマーはコンソールから四六時中監視されてるはずだね。だから彼女をまずそこから自由にしないといけないのは分かるだろ？」

「ええ、まあ……」

「で、見たかな？ 君たちのゴーストデータ。あの瞬間システムはあっちの方を本体だと勘違いしちゃったわけだ。当然コンソールにもあっちのデータがずっと映ってるんだよ。そうしたらそれを見てる奴だって、あっちの方が本物だと思っちゃうよね？」

そう言われて彼らは思い当たった。

「じゃあ、さっきの幽霊みたいなのは……」

イオの言葉にカイがにこにこ笑いながら答える。

「そうそう。あれがゴーストデータ。こうなれば本物のマーは好きなことし放題だろ？」

いろいろありすぎてさっきの霊体のことはほとんど忘れかけていたのだが、彼らはやっと納得がいった。だがそれと同時に彼らは恐ろしい事実にも気が付いた。

「はあ、なるほどね……ってちょっと待てよ！ じゃあラーンはこのことに気づいてないってことか？」

イオの問いにカイは眉をひそめた。

「ラーンって誰だい？」

「オペレーターだよ」

「あのさあ、イオ君。僕はそいつに気づかれないように必死にやってるんだぜ。あまり変なこと言うなよな」

この時になってやっと一行はとてつもなくまずい状況に陥っていることに気づいた。

《我が名はイオ・クロウリーなり。ここに真の名を以て異界の扉を開かん！》

イオは慌ててシステムコマンドの呪文を唱えてみる。当然ながら未だに効果がない。

「おいおい。僕がそんな手抜かりをするはずがないだろ？ マーの敵にこっそりと通信されたりしたら困るじゃないか。何かやりたかったら僕を通してくれなきゃ」

「じゃあ……ラーンと通信できないかな？」

「残念だけどそれは却下だね」

カイはにべもなかった。

「でもそうしてくれないとまずいんだ！」

イオは必死に頼む。だがカイは首を振った。

「うまいとかまずいとかいった問題ではないんだ。僕はカイの人格を持ってはいるけどその実体は単なるコマンドシェルであって、この事件を管理しているプロセスとは全く別物なんだよ。僕にできるのはそのプロセスにお伺いをたてることだけであって、そっちがだめって言ったら僕にはどうしようもないのさ」

「ってことは、君がそうしたくてもできないってことなのか？」

「ああ。残念だけどそうなんだ」

イオも何かわめきたくなかったが『モニターに怒鳴っても問題は解決しない』とかいう昔のことわざを思いだして、その思いをぐっと押さえた。

「……うう、わかったよ……で、何の話だったっけ？」

「そうそう。まだたくさん話さないといけないことがあるんだよね。それでさっきの続きだが、ゴーストデータを作った後は、君たちが動けないようにする必要があった」

「何でそんなことを？」

「ああ？ 簡単さ。マーが確実に君たちの首をはねられるようにさ」

一同は全員吹き出した。

「何だって？ この野郎！ どうしてそんなこと」

ウォンがわめいた。

「ああ？ 何で分からないんだい？ 普通だったら絶対マーと一緒に入ってきた奴だって敵の仲間だろ？ 当然そいつらも始末しないとイケないよね。もちろん僕が問答無用に殺すこともできたんだけど、でもいくら敵だからってただ殺せばいいってのはちょっと短絡的な考え方だよね。だって生かしておいた方が利用価値が高いってこともよくあるじゃないか。だからマーが殺すタイミングを判断できるようにしたんだ」

それを聞いてイオが突っ込んだ。

「たしかにそういう前提ならそうですけど……でもここで首をはねたって、冥界送りになるだけで……」

「はっはっは。僕がカイ・ヴェッセルってことを知らないと思うかもね。でも大丈夫なんだな。これが」

一行はまたまた嫌な予感に襲われた。

「君たちがどの程度知ってるかは分からないけど、NSE、すなわち神経情報代替技術てのは諸刃の剣なんだ。君たちの体を管理しているブースってのは、当然ながらゲームシステムにも密接につながってるんだよ。ってことはもう分かるだろ？ 僕がその気になれば君たちの本体の心臓を一ひねりすることもできるんだ」

もちろん彼らはこの道で飯を食っているから、カイの言ったことは120パーセント理解できた。

「じゃ……まさか……」

イオが枯れた声で尋ねる。

「そう。そのために僕は君たちがゲーム中に死んだら、本体まで本当に死んじゃうような仕組みを作ったんだ。とってムクールだろ？」

三人はそれを聞いて絶句した。それからウォンが激昂してわめいた。

「あのなあ！ 俺達はマーの味方なんだよ！ そんな仕組みさっさと解除しろよ！」

「ウォン君、そんな大声を出さないでも聞こえるよ。でも残念だけどそれはできないみたいだね。カイはこのコマンドを短時間でハックしなければならなかったんだ。だからそんなにかゆいところに手が届くような設計はされてないんだ。死なないように努力してもらおうしかないね」

「勝手なこと抜かしてるんじゃないぞ！」

暴れ出しそうになったウォンをスーチとイオはかろうじて止めた。イオがウォンにささやく。
『バカ、あまり刺激するなよ。何が起こるかわかんないぞ』

『す、すまん……』

その言葉を理解するぐらいの理性はまだウォンにも残っていた。

「そういうわけでこうなったらこのゲームの中ではマーが女王様なんだ。何でも言うことを聞かないと、ざっくりと殺されちゃうんだから、口の聞き方には注意するんだよ。特にウォン君って言ったっけ？ 君、言い方が何か生意気っぽいから、真っ先にやられちゃいそうだね」

ウォンは真っ赤になったが何とか自制した。

「さてゲームの中はこんな感じなんだけど、重要なのはやっぱりゲームを抜けてからだよね。ようやくさっきのイオ君の質問の答えになるわけだ。そこでまず外の奴らがマーが脱出する邪魔をしないようにしなくちゃいけないわけだ。これがゲームの中の奴らなら好きなように手加減してやることもできるんだけどね、外となるとちょっと手荒なことをしなくちゃいけないよね」

「外になって、いったいどうやって手を出すつもりなんだ？」

それを聞いてイオが尋ねると、カイはあっさり答えた。

「ああ？ 大体僕がどうして悪い奴に追われてるか知ってるかい？ 実はね、僕はその筋ではちょっとは名を知られたクラッカーだったんだよ。ある日ちょっと愛に目覚めてね、足を洗おうとしたらこんなざまになっちゃったんだけど、それはともかく僕は、オンラインであればまあ大抵の物は思い通りにすることができるのさ」

イオ達はいきなりがんと殴られたような気がした。今時サイバーネットにつながってないシステムなんてあるはずがない。

「もし空調がマクロスイート社製だったらこれが一番いいんだ。これの大気成分調節機能が間抜けでね、追加する香料の分子構造をエディットできる仕組みが付いてるんだけど、ある種の猛毒になる分子がチェックにかからないんだ。これなら眠らせるのも狂わせるのも結構自由自在なんだけど、まあそうはうまくいかないだろうね。でも普通二酸化炭素の消火システムぐらいはあるからね、これを使うことになるだろうね」

一行は今度は目の前が真っ暗になった。

「や、やめて下さい！ 外にいるのもみんな味方なんです！」

イオは叫んだ。だがカイは取り合わない。

「みんな？ そんなことあるわけないだろ？ まあそうだったとしてもこればかりはあきらめてもらわないと」

「外にはギィがいるのよ！」

スーチも叫ぶ。だがそれを聞いてカイはきっぱりと言ってくれた。

「マーが生きるか死ぬかの瀬戸際なんだよ。僕はマーを助けるんだ。たとえ世界を滅ぼすことになるうとも、ね」

「……」

もはや処置なしである。それでもイオは最後の希望を託して言ってみた。

「あのですね、そもそも前提からして違っている可能性ってのは、考えてみないんですか？ 例えばアルマがまったく違った理由であの呪文を唱えてしまったとか」

「例えばどんな理由だい？」

「ローウェルに効率よく行きたいためとか」

「そんなことのためにあの呪文を使うはずがないだろ？ だってマーはレベル99のセーブデータを持ってんだ。それを使ったほうが遙かに効率はいいよ」

「でも、そのデータはなかったんですよ。あれから1500年も経ってるんです」

「うん。そういう話はマーもしていたね」

「なら理解できるでしょ？ まず状況が根本的に違うんです。だからこのままプログラムを実行させる意味はないんです」

「うん。その点は理解はできるんだけどね。僕は単なる人格付きのシェルに過ぎないことを忘れないで欲しいね。このたぐいの処理をしたいときには邪魔されないようにプライオリティーを最優先にするよね。ということは僕ごときではこのプロセスはどうやったって止められないんだ。分かるだろ？」

「じゃあ止めるためにはどうすればいいんです？」

「そうだね。無理に止めようとするならハードウェアの非常スイッチしかないね。でもそういうことをされたらまずいから、システムコマンドを殺して中から外には通信できないようになってるんだ」

イオは頭を抱えて座り込んでしまった。今彼らは最初にアルマがどうしてへたりこんでしまったか心の底から理解していた。

「そういうわけでこのプログラムを止めてしまうのは無理だってわかったかな。じゃあその続きの話をしよう。特にマーには聞いといてもらわないとね。さっきこのあたりで中断したけど、この後の方が重要なんだから」

それを聞いてアルマは顔を上げた。だが目の焦点はあまり合っていない。それでもカイは喋り続ける。

「さて外部制圧の準備が完了したら僕が合図をすることになっている。それに対してマーの方の準備もOKだったらそう言うんだ。すると実際に外部制圧実行ということになる。そして外の奴らがみんな逝ってくれて、安全になったらまた僕が合図するよ。そうしたら……」

「ちょい待ちや！」

アルマが大きな声を挙げた。

「何だい？」

「妾の準備とは何ぞや？」

「だってマーの都合を無視して進めてしまうとまずいこともあるだろう？ 例えば捕虜からまだ聞き出さないといけないことがあるかもしれないし」

それを聞いて彼らに希望の光が見えてきた。

「ならば妾がOKせなんだったら？」

「そりゃ待ってるしかないよね。でもあんまり待たせたらタイミングを逸してしまうかもしれないよ」

「そうなったどうなるのじゃ？」

「そりゃ失敗ってことになるな。だからそんなことにならないように行動は迅速にするんだ。」

わかったかい？」

「……ああ、わかった」

「それじゃ続きを話そうか」

「結構じゃ」

「ええ？ でもそりゃまずいぞ」

「いいから黙っておれ！」

それを聞くとカイは黙り込んだ。付加されている性格にはやや難があるが、人の命令は聞くようだ。

それから一行は思いっきり安堵の息をついた。どうやら最悪の事態は脱したようだ。ともかくそこでアルマがOKさえしなければ、プログラムはその先に進まないようになっているらしい。先にさえ進まなければそのうちランかギメルが何かおかしいことに気づくだろう。ランが目を覚ましたなら当然彼らにコンタクトをとろうとするだろうし、ギメルがいれば絶対スーチと話したがるはずだ。だがあのゴーストデータが彼らの細かい記憶を持っているとは思えない。すぐにぼろが出るはずだ。

それに対してカイが天才的な回避法を考えていたとしても、最悪でも3日我慢すればいいのだ。そうすれば有無を言わずコネクションが切られるはずだ。

一同はやっとアルマの方に注意を向ける余裕ができた。アルマは真っ赤になってうつむいている。

「すまぬ。本当にすまぬ。妾が考えなしに行動したばかりに、うぬらをとんでもない危険にさらしてしもうた」

アルマの言葉に三人は口々に答えた。

「まあしょうがないだろ」

「本当にもうどうなることかと思ったわ」

「あとでゆっくりと落とし前つけてやるからな」

ウォンは冗談のつもりで言ったのだが、アルマは肩を落としたまま突っかかってこない。

「な、何だよ、お前マジに落ち込んでんのか？」

「すまぬな……」

こうなるとウォンにはどうしていいかわからない。嫌な沈黙が場を支配する。それを破ったのはスーチだった。

「ねえ、そろそろ日が傾いてきたけど、ここ夜になったら出るわよねえ」

それを聞いてアルマが顔を上げた。

「そ、そうじゃ。早いうちに街に戻っておかねば。夜中に出てくる奴は相当始末に悪いぞよ。まかり間違っても死んでしまったら大事じゃ！」

それを聞いてウォン達三人は背筋が冷たくなった。

一行は慌てて荷物をまとめると、街に向かって歩き出した。カイも後ろから付いてくる。何だかうとうしいが、追い払うわけにもいかない。

街までは小一時間かかったが、来た道をそのまま引き返したので敵は出てこなかった。

街の門が見えたとき、後から付いてくるカイに対してふっとイオが尋ねた。

「なあカイ。準備ってどのくらいかかるか聞いてなかったけど？」

それを聞いてカイはすぐに答える。

「そうだな。普通なら10分、長くてその倍ってところかな」

「な、なんだって？」

他のメンバーも驚いて立ち止まる。

「あのさ、あれから1時間は優に経ってるぜ」

ウォンの言葉にカイが応える。

「そうだね。どうも敵さんはそうとうやるみたいだね」

「やるって何を？」

「どうも制圧の試みがことごとく失敗したみたいだな。屋内の装置を使って制圧するのは不可能みたいだ。で、モードが切り替わってるね」

「モード？ 一体なんのことだ？」

「だから、別なやり方に変更したんだ。現在の結論はカーゴ・スライダーの運航管理システムを乗っ取って、この建物に1台突入させるのがいいってことだね。この建物は最上階に管理システムが固まってるから、狙いやすいんだね。もちろん潰すのは管理室だけだ。マーに危険はないよ。でもこれだと皆殺してわけには行かないかもね。マー、少し誰かと戦う必要があるかもしれないよ。すまないけど覚悟しといてくれ。やり方は教えたよね？」

一同はあまりのことに凍り付いてしまった。

「ちょっと待てい！ どうしてさっさと言わぬのじゃ！」

「だって黙ってるって言ったのはマーだろ？」

「貴様！ 妾の忍耐を試しておるか！」

「僕は単なるシェルに過ぎないんだ。だからあまり難しい判断はできないんだよ」

アルマはまたへなへなと崩れ落ちる。慌ててそれをスーチが支える。

「あ、そうそう。それでこの作戦に切り替わったんで、実行タイミングをいちいちマーに確認するわけにはいかなかったんだ。相手が公共輸送機関ではそうそう突入タイミングを自由にはできないんだよ。だからそのときはこっちの指示に従ってくれよな。捕虜を尋問したり拷問するんだったら今のうちだよ」

「アホンダラ！ やめんか！ ボケ！」

「だから僕はシェルに過ぎないんだって。このプロセスを止める権限はないんだ」

「おのれ！ そこに直れ！ 叩き殺してくれるわ！」

そう言ってアルマはカイに斬りかかった。だが残念なことにカイには実体なかった。おかげでアルマの攻撃は空を切るだけだった。

「やめてよ！ アルマ！ だめだって！」

完全にキれたアルマにはしばらく危なくて近づけなかった。そのうちアルマが疲れてへたりこんだ所をやっとスーチが子供をあやすように取り押さえる。

それからイオがカイに質問をした。

「ひとついいか？ カーゴの管理システムを乗っ取るまでにどのくらいかかる？」

「さすがにこれは結構難物なんだよ。お子ちゃま共に一番人気の標的だからね。だからあっちもアタック慣れしてるんで、普通の方法じゃ歯が立たない。でも僕はカイ・ヴェッセルなんだ。その筋では伝説を残してる男なんだぜ。時間さえあれば確実に落として見せるさ」

それを聞いてウォンが言った。

「うちの社内システムでさえ落とせなかったくせに」

「だから敵さんは相当やるなって誉めただろ？ どうもAPIの挙動がおかしいんだよね。普通なら絶対通るはずのコードがエラーで落ちこちてくれるんだ。その理由がシステム全体がケージに入ってるからだとしたならば、あまり無茶はできないよね。敵さんの思う壺にはまってしまうかもしれないからね」

それを聞いてイオが納得したように言う。

「そうか！ エミュレータで動かしてたからか！」

それを聞いて他のメンバーも納得した。ウォンでもそのぐらいの勉強はしている。アルマだけが今一つ分かってない顔だ。

彼らの入っていたベラトリックスシステムは、要するに古いOS上でないと動かないバージョンと思えば良い。それを無理矢理動かすためのエミュレータをランが不眠不休で作っていたのだ。

ところがクラックするときは通常システムの微妙な欠陥を突くことが多いが、エミュレータではそういった欠陥まで再現されないことはよくある。これがよくエミュレータではうまく動かないという騒ぎの原因になるのだが……

それに気づいたウォンがイオに言った。

「それじゃこいつ、外に行っても何もできないんじゃないのか？」

イオとウォンは顔を見合わせる。確かにエミュレータなどを持ち出さなければならなかったのは、平たく言えばこのシステムが過去の遺物だからだ。ならばもう心配しなくてもいいのではなからうか？

「どうなんだろう。なあ、カイ、アタックの手応えはどうだ？」

「すごく順調だよ」

「順調？ どこかのAPIとかで変なエラーは出たりしないか？」

「だからそういうのが出ないところを探したら、カーゴの運航管理システムだったのさ。ここは昔からクラック対策で、自前のシステムを使ってるからだろうね」

イオ達はそれを聞いてのけぞった。はっきり言って嫌な奴だ。

「そ、そうかい……で、結局どのくらい時間がかかる見込みだい？ あはは」

「そうだね6時間から9時間ってとこかな？ さすがに相手が大物だからね。ちょちょいってわけにはいかないんだ。でも千里の道も一歩から。蟻の巣穴から堤防は崩れるってね。そのの所は僕を信じて待っててくれ。だからその間あまり怪しいことはせず、おとなしくしてた方がいいよ」

「……」

一行は見事に振り出しに戻ってしまったようだ。

〈第7章〉 ドッペルゲンガー

「んで、どうするよ」

「どうしようか？」

ウォンとイオは顔を見合わせた。それから示し合わせたようにアルマの顔を見る。

「そんな！ 妾に問われても……」

「……だよなあ」

二人は同じようにしょげ返った。

「でもこのまま何もしないわけにも……」

スーチの言葉に、イオが力無く答える。

「それで絶対だめってわけでもないと思うけどな」

「どうして？」

「だって考えて見ろよ。カイの奴は実際に一度失敗してるんだぜ。何しろ1500年も時代遅れの仕組みを使ってるんだからな。今のところ順調って言っても、どこで壁に当たるか分からないだろ？」

だがそれを聞いたスーチは首を振った。

「確かにそうだけど、でもうまく行っちゃったらどうなるの？ 外にはギィやラーンさんだけじゃなくて、市長の一行もいるのよ。本来はここにはゼナさんがいたはずなのに、どうしてあたしがいるか知ってるでしょ！」

それを聞いてイオもウォンも思いだした。

彼らがいきなり割り込んできたから、ゼナが来られなくなってスーチがいるのだ。すなわち現実世界では僅か十数メートル離れたブースに市長一行が入っているはずだ。

「うわあああ！ そういえばそうだった！」

「あたしだって、そりゃカイが失敗してくれたらいいなって思うけど、でもそれで何もしないで、それでギィが死んじゃったらあたしどうすればいいの？」

スーチは一生懸命に涙をこらえている。

「そりゃそうだけど、じゃあいったいどうすればいいんだ？ ここはゲームの中なんだぜ。リセットスイッチなんて俺達にはいじれないだろ？」

「だからって手をこまねいて見てろっていの？ そんなことになったら、そんなことになったら……」

ついにスーチの目から涙がぽろぽろこぼれ始めた。

「お、おい、スーチ、だからさ……」

その時ウォンが口を挟んだ。

「なあイオ。スーチいじめてないでさ、ちょっといいか？」

イオはむっとした顔をしながら振り返った。

「なんだよ」

「俺、システムにはあまり詳しくないけどさ、さっき出てったドッペルゲンガーいるじゃない」

「ああ」

「あいつらぶっ殺したらどうなると思う？」

「はあ？」

「ゲームがフリーズして止まったりしないかなあ？」

イオは驚いたようにウォンの顔を見つめた。確かにあいつらのことは今まですっかり忘れ果てていた。四人の中ではイオが一番そういったことには詳しい。

確かにこれは考える価値がありそうな話だ。現在のベラトリックスシステムはカイの非常ルーチンが動いていて決して安定な状態ではないはずだ。特にあのゴーストデータと彼らの実データとの関わりは微妙なはずだ。従ってフリーズする可能性はあるが……

「でもフリーズしたりしたら、それこそ何が起こるか分かんないぜ。全員即死したりして……」

「だから言ってみただけだろ」

だがその会話は状況打開のための大きなヒントとなった。それを聞いてイオはゴーストデータのもそもその目的を思いだしたのだ。

「ちょっと待ってくれよ。そういえばそもそもあいつらはランを騙すために作られたんだよな。だとしたらランは、あいつらをずっと見てるってことになるよな……」

それを聞いてスーチが叫んだ。

「それじゃそこに行って手を振ればいいのね！ あたし達が2組出たらいくら何でもおかしいわよね！」

一同は顔を見合わせた。途端にウォンとアルマが立ち上がる。

「よっしゃ！ いくぜ！」

「よし！ 行くぞよ！」

それを慌ててイオが引き留めた。

「ちょっと待てよ。そんなにうまく話がいくか！ おい、カイ、そんなことになったらどうなるんだ？」

「ああ？ 君たちがゴーストデータの所に行ったらどうなるかってことかい？ もちろんどうもならないさ。何しろ君たちは表向きは存在してないんだ。だからモニター上からは見えないんだよ。そもそもゴーストが出た瞬間、まさにそういう状態になってたはずだよな」

イオはため息をつきながら両手を広げる。それを聞いたウォンとアルマは顔を見合わせると、また背中合わせに座り込んでしまった。

だがスーチがカイに続けて尋ねた。

「でも攻撃したら？ 目に見えない敵から攻撃されてるように見えるの？」

「そうだね。確かにそんな風に見えるだろうね。だからそんなことはしない方がいいだろうね」

一行は顔を見合わせた。こいつが『そんなことはするな』と言うってことは、どうやら一発決まったらしい。幸先の良い知らせだ！ 同時にウォンとアルマが同時にスーチの手を取って同時に言った。

「よくやった！ スーチ！」

「スー殿、かたじけない……」

「そ、そんなことないわよ」

今度こそ本当に何とかかなりそうだ。全員が一斉に立ち上がって歩き出そうとした。だがそこでまた重要な問題に気がついた

「で、あいつらどこにいるんだ？」

ウォンがイオに尋ねる。

「カイが知ってるだろ。なあ、カイ。あのゴーストデータは今どこをうろついでる？」

だがカイは肩をすくめて言った。

「さあ？」

「さあって、なんだよ？」

「分からないって意味だよ」

「なんで分からないんだよ！」

「覚えてるか？ 僕はただのシェルにしか過ぎないんだ。しかもカイがどこかのメモリーの間隙間にこっそりと突っ込んだ代物なんでね、君たちの名前だって最初は分からなかっただろう？」

「でもあいつらはお前が作ったんだろう？」

「創造主だからって、被造物の全てを管理しているわけじゃないんだよ。具体的に言えばあのゴーストデータはベラトリックのNPC制御システムが動かしているんであって、僕じゃないんだ。確かに僕はそいつをキックしたけど、そのあとそいつらがどこに転がっていくかは、僕にはまったくわからないんだ」

一同ははまたへたりこんだ。だが今度はウォンが打開のきっかけを作った。

「でもあいつらはまだそんなに離れちゃいないよな？」

ウォンの言葉にイオが答える。

「そりゃそうだけど、分かれてからもう1時間ぐらいいは経ってるから、あの分かれた地点から半径4キロぐらいの……」

そこまで言いかけてイオははっとした顔をしてカイに尋ねた。

「そうだ、カイ、あいつらどう見ても俺達にうり二つだったけど、あの時のデータをコピーして作ったのか？」

「そうだよ」

「じゃああの時俺達はずいぶんへろへろになってたけど、あいつらもそうだったってことになるよな？」

「そうだろうね」

「もちろんあいつらバカじゃないよな。そんな状態でもっと危ないところへ行ったりはしないよな？」

「普通そうだろうね」

それを聞いてスーチが言った。

「じゃあ、あの偽物は街に帰ったってこと？」

スーチの問いにイオがうなずいた。

「そういうこと。あの後にもっと遠くに行こうなんて自殺行為だろ？ 絶対街に戻って、怪我の治療や装備の補給をしてるはずだよ」

そして幸運にも今彼らは街のすぐ外にいる。

それは良い知らせだったが、ウォンが少しうんざりした顔で言った。

「でも街たって広いぜ。それに人がうようよいやがるし」

「じゃあ手分けして探す？」

スーチの言葉にイオが答える。

「その方が良さそうだな。でも離れてどうやって連絡を取ろう？ 確かそんな魔法もあったみたいだけど、まだ覚えてないよな」

「だったら分散するのはやばいか？」

「それならば空耳貝を買えば良いのじゃ。その辺の道具屋で売っておる」

彼らが話しているのを聞いてアルマがあっさりと言った。

「なんだ？ そりゃ」

「遠く離れて会話ができるアイテムじゃ。大昔の電話のようなものじゃ。が、ちっと値が張るぞよ」

「いくらだ？」

「確か500G」

それを聞いてスーチが言う。

「今の持ち合わせが1400Gぐらいだから、二つしか買えないわ」

「では二手に分かれるしかなさそうじゃな？」

「だな。で、誰と誰が組む？」

その組み合わせを巡ってお約束の一悶着があった後、結局ウォンとアルマ、イオとスーチということになった。カイはアルマに自動的についてくるようになっているようだ。

組み合わせが決まると一行は道具屋に行って空耳貝を二つ購入した。

「それでは妾達は街の東側を探すのでな。そっちは西側を頼むぞよ」

「ああ、わかった。気をつけてな」

それから一行は二手に分かれて偽パーティーを探し始めた。

だが簡単なようでこれがなかなか大変だ。最初の街とはいってもここは王国の首都という設定なので、街のど真ん中に大きな王宮があったりする。それを取り巻いてにぎわう街は、差し渡しが数百メートルはあるだろうか？ しかも街はいろんな人々でにぎわっている。

ウォンとアルマは最初、冒険者が訪ねそうな店を手当たり次第に当たってみたが、そこには彼らは来ていなかったようだ。

最後の店を出たところでウォンが言った。

「これは思ったより大変だな」

「そうじゃな」

「後はその辺の奴らに聞いて回るしかねえか？」

「うむ」

だがそれは更に望み薄な作業だった。この辺をうろついているのは全てシステムが操作しているNPCである。特にどういうゲームでも町の人というのはいい加減に造られているものだ。同じような顔や格好をした奴らがうろうろしているのだが、同じ顔だからといって同じキャラだとは限らない。だから以前見た顔であっても確実に期すためには再度訊いてみないといけない。でも

そうすると煙たがられたりする。

しばらくして二人はいい加減疲れてしまった。

その時ウォンは道ばたに屋台が出ているのを見つけた。そこでは串焼きのような物を売っている。

「へえ、こんなもんがあるのか。いくらだ？」

ウォンは屋台の親父に尋ねた。

「1本が銅貨5枚だ」

「じゃあ2本」

ウォンはこういう場合反射的に買ってしまう癖がある。

「なんじゃ？おのれはそんな物を……」

「いいじゃん、おもしろそうだし。ほら、1本やるよ」

アルマは串焼きを押しつけられてそれをじっと見ながら言った。

「……礼を言いたいところじゃが、これはまずいぞよ」

「はあ？」

見かけは非常においしいそうな焼き肉だ。だがウォンがそれにかぶりついてみるとこれまた反射的に吐き出さざるを得ない代物だった。

「うあっ！ペっペっペ、インチキだぜ」

まるで消しゴムに無理矢理肉の香りが付いたようなわけの分からない代物だ。

「あの野郎、とんでもないもんつかませやがって！」

ウォンが屋台の親父に報復しに行こうとするのをアルマが引き留める。

「やめておけい！ここの食べ物はみんなこのようなものじゃ。それに町人に手を出したら、警備兵が飛んでくるぞよ。今のお前では瞬殺じゃ！」

しかしその時のウォンはアルマの忠告など聞いてはいなかった。というのはウォンを引き留めるためにアルマが彼の左腕に抱きついているような状態になっていたからだ。

もちろんウォンだってここがゲームの中であることは知っている。左手に感じる彼女の胸の感触が本物ではないことも知っている。だが1500年前のシステムであるにもかかわらず、味覚に比べてこの部分の触覚のシミュレーションは極めて忠実にできていたと言って良い。

ウォンは気づいたときにはアルマの肩に手をかけていた。アルマは一瞬びくっと体をこわばらせる。今までならばここでストレートパンチか膝蹴りが飛んでくるはずなのだが……

「なんじゃ？」

アルマはまっすぐにウォンの顔を見返してきた。その反応はウォンが一番予期していなかった物だった。

「え？いや、な」

一体何を話せばよいのだ？この肩に置いてしまった手のやり場をどうすれば良いのだ？ウォンはなんだか人生最大の危機のような気がした。

その時アルマの持っていた空耳貝がちりちりという音を立てた。

アルマはウォンの手を払いのけると、貝を取りだして耳に当てる。

『聞こえる？ あたし！』

スーチの声だ。彼女は期せずしてウォンの危機を救ったのだ。

「聞こえるぞよ」

『手がかりがあったわ。偽物パーティーがね、ついさっき西門の近くの薬屋に寄ってったみたいなの』

「何と！ まことか？ して、奴らは西門から出ていったのかや？」

『ううん。北の方に歩いていったって』

「なに？ 北じゃと？」

それがひどく驚いた言い方だったので、スーチは問い返した。

『北だと何かあるの？』

「いや、北にはステーションがあるのじゃ。そこを使われたらまずいのじゃ」

『ステーションって、他の大陸に渡るところ？』

「そうじゃ」

『でもアルマ、チケットはあるんだから追いかければいいんじゃない？』

「だめじゃ。ステーションからはいろいろな大陸に渡れるのじゃが、奴らが行ってしまった後では、もうどの大陸に向かったか確かめようがないのじゃ」

『ええ？ 行っちゃったら追いかけれないってこと？』

「そうじゃ。薬屋では奴らの行き先は分からなんだか？」

『そこまでは……』

「なら、何としても奴らを渡らせてはならぬ！」

『わかったわ。あたし達も急ぐから！』

「すまぬ」

貝をしまい込むとアルマはウォンに言った。

「北じゃ。行くぞよ」

「おう」

今の会話で大体状況は分かっていたので、二人は即座に北に向かって駆けだした。ともかくステーションを押さえなければ。そこを通ることさえ阻止しておけば、あとは何とでもなる。

そのうちに高い塔のある建物が見えてきた。

「あれがステーションじゃ！」

「あ！ いやがったぜ！」

見ると見たことのある連中が塔に入ろうとする直前だった。

感心してしまうほど彼らとうり二つである。これはおもしろい戦いになりそうだ。ウォンはメイスを構えると突っ込んで行こうとした。だがそれをアルマが止める。

「馬鹿者！ おのれは下がっておれ」

「誰がバカだって？」

「当然であろう！ おのれは死んだらまずいことをもう忘れたかや？」

それを聞いてウォンは背筋がぞっとした。

「わ、忘れてなんかねえよ」

「だったらここは妾に任せよ」

「.....わかったよ」

ウォンは仕方なくメイスを収めると後ろに下がった。

「待てい！ そこな偽物ども！」

アルマは大声でわめいた。偽一行はそれを聞いて振り返る。それから偽アルマが一步前に出て言った。

「なんじゃ？ おのれは？」

「おのれこそなんじゃ！ この偽物どもめ！」

「なんじゃと？ 最近のNPCめは失礼じゃな」

「誰がNPCじゃ！ そこに直れ！ 叩ききってくれるわ！」

「ほほほ！ おもしろい！ 後悔するでないぞ！」

偽アルマは見かけだけでなく喋り方までそっくりだ。このあたりはカイがデータを仕込んでおいたのだろうか？ 大変息が合っている。

二人は剣を抜きはなした。そうやって剣を構えて相対している様は、完全に点対称になっている。

それを見てウォンがつぶやいた。

「さすが同一人物だぜ」

そこにイオとスーチが息を切らしながら到着した。起こっている状況を見てスーチが慌てる。

「ちょっと！ ウォン！ 止めなくていいの？」

「騒ぎを長く続けてる方が気づかれやすいだろ？ ラーンは寝てるかもしれないんだぜ」

実際その時もラーンは完全に熟睡していた。もし目を覚ましていたのならかなり楽しい画面が見られたのだが。

「でも.....」

「それに俺達は死んだら死ぬんだぜ」

そのことはスーチもすっかり忘れていたようだった。彼女は一瞬凍り付いたようになり、それから慌てて答える。

「そ、そう言えばそうよね.....で、どっちが本物なの？」

「手前の奴だ」

ウォン達はアルマ同士の戦いを目を皿のようにして見つめた。そうしていないと二人とも着ている物も同じであれば、武器の構えや動き方もうり二つだ。しかも二人は剣を構えたままぐるぐると回り合いながら隙を窺っている。一瞬でも目を離したら、それこそどっちがどっちか分からなくなるだろう。

そういった膠着した状況がしばらく続いた。それを見てウォンがイオにささやいた。

「どうするよ。埒があきそうもないぜ」

「じゃあ手助けするか？」

ウォンもそろそろ飽きてきていたので、足下に落ちていた石を拾い上げると、おもむろに偽アルマに投げつけた。

「！」

それで十分だった。偽アルマに生じた一瞬の隙をアルマは見逃さなかった。

「おうりゃ！」

かけ声と共にアルマは一気に偽アルマに突っ込む。偽物はアルマの剣を払いのけようとする。

「遅いわ！」

アルマは偽物の剣を打ち落とそうとした。

ところが両者の剣が触れた瞬間、なぜかバシーンという音と共に雷光のような光が走ったのだ。あたりの者はその光で一瞬目がくらんだ。

最初一行は敵の誰かが魔法を使ったのかと思った。だがそんな魔法は見たことがない。

「きゃあああ！」

一行の目が慣れてきた途端にスーチが叫んだ。同時にウォンもイオも息を呑んだ。なぜなら彼らの目の前で“アルマ”が血を流しながら倒れているのだから。

アルマは相手の剣で完全に貫かれていた。いくら相手が偽物とはいえ……だがそのとき彼らはやられたアルマの位置関係がおかしいことに気がついた。この位置だとやられたのは本物の方ではないか？ だがあの状況からどうしてこんな逆転になるというのだ？

理由はともかく起こったことを理解したウォンは体中の毛が逆立ったような気がした。

「てめえ、やったなあ！」

そう叫んでウォンが突入しようとしたまさにその時だった。一行の頭の中に次のような無性的な声が聞こえてきたのだ。

『不正なアイテムを検出したので、消去しました』

あまりのことにウォンはそのままつんのめって倒れてしまった。それから倒れているアルマを見る。彼女は確かに、何の武器も持っていない！

「なんだと？ コラァ！」

「なに？ これ！」

「いったいどういうことだ？」

三人はしばし呆然と動けなかった。それからイオが頭を抱えながら叫んだ。

「ああ、あのデータ、コピーだからか？」

このメッセージはコピーデータや改竄データを使用したときなどによく言われるメッセージだった。ゲーム内ではいかに実物っぽくても、その実体はただのデジタルデータである。従ってコピーすることは簡単にできる。しかしプレイヤーに勝手にそういうデータをコピーされてしまったら、ゲームをしている意味がなくなってしまう。そのため可能な限りそのようなデータが使えないような仕組みにするのは当然の処置だ。

だがカイのルーチンが偽パーティーを作ったとき、いろんな意味で最も手っ取り早いのがオリジナルの完全なコピーを作ることであったはずだ。カイの意図としてはそもそもオリジナルとゴーストが接触することはないはずだったので問題にもならなかったのだろうが、それがこういった形で接触してしまったことでコピーチェック機構が働いてしまったのだ。

「ふざけるなよ！ 偽物はあっちだろうが！」

ウォンが叫ぶ。だがイオが首を振った。

「だってシステムのにはあっちが本物だってカイが言ってただろ？」

もちろんその通りだ。デジタルデータというのはオリジナルとコピーの区別がつかないところが取り柄なのだ。今となっては彼らの方が偽データなのだ。

ウォンは偽物達をにらみつけた。だが状況が分かると迂闊に攻撃することさえできない。

偽物達は彼らなどこの世にいないように、そのまま塔の中に消えてしまった。

何もできなかったウォンはとにかく自分が情けなかった。

「くそ！ なめやがって……」

その時スーチがウォンの手を掴んで言った。

「ねえ、それよりアルマが死んじゃう！」

見るとアルマが倒れているあたりに血溜まりができています。彼女を助けられるのは僧侶である彼しかいないではないか。

「うわあああ！」

今アルマに死なれるわけにはいかない。ウォンが慌ててアルマに駆け寄った。

「おい！ アルマ！ 生きてるか？」

「お...の...れ……」

蚊の鳴くような声だが、とりあえず息はあるようだ。虫の息でもあると無いでは大違いだ。ウォンは慌てて治療の呪文を唱える。まだレベルが低いので効くまで時間がかかる。その上アルマが回復したときには、今度はウォンの方が魔法の使い過ぎでへたばっていた。

その間四人は往来の真ん中に放心状態で座り込んでいた。道行く人々が変な顔をしながら彼らを見ていく。だが四人にとってもはやそんなことはどうでもよかった。

それからしばらくしてからイオがぼそっとつぶやいた。

「万策尽きたか？」

それを聞いてスーチが泣きそうな声で言う。

「そんな、じゃあギィはどうなるの？」

イオは何も答えられなかった。代わりにウォンが言う。

「あいつ頑丈だから大丈夫なんじゃないか？」

その無責任な言葉にスーチが目を真っ赤にして突っかかる。

「いい加減なこと言わないでよ！」

「それにランなら悪運だけは強いから、大丈夫なんじゃねえの？」

もちろんウォンはジョークのつもりだったのだが、スーチはもう怒ったり突っかかったりせずに、ただ黙って下を見つめて言った。

「そりゃあなたにとってはどうでもいいかもしれないけど……そんなことになったらあたし……あたし……」

そう言いながら涙がぽたぽた滴り落ちる。

「お、おい、だからさ、スーチ」

ウォンはたじたじとなった。それを見てイオが言う。

「おい、ウォン。スーチいじめてないでさ、もうちょっと前向きに考えようや」

ウォンはイオの顔を睨む。

「そりゃ結構だけどね、万策尽きたんじゃないの？」

「まだ分からないだろ？ ともかくこういうときは状況確認だな……なあ、カイ、今の状況はどうだい？」

一見イオの喋り方は快活だったが、もちろん無理してそうしているのは誰の目にも明らかだ。

「ああ？ 順調だよ。今のところ障害はないね」

本当に無理していないのは今ではこいつだけだ。普通順調だと聞けば心躍る物なのだが、どうしてこんなに腹が立つのだ？

「はは。そうかよ。この調子だとあとどのくらいだ？」

「そうだな。あと5時間ぐらいでなんとかかなるかもな」

一行は大きなため息をついた。それからしばらくしてイオがアルマに尋ねた。

「あのさあ、アルマ」

「なんじゃ？」

「あいつらの行った先、本当に分からないのか？」

それを聞いてアルマは首を振る。

「七つの大陸のうちのどれかだということ以外はわからぬ」

「ローウェルのある大陸は？」

「北の大陸じゃ」

「とりあえずそこに行ってみるってのは？」

「だめじゃ。チケットは一枚じゃ。行ったらもう戻って来れぬ。それにあそこは剣呑なところじゃ。出てくる敵の強さは半端ではないのじゃ。死んだらどうするのじゃ？」

それを聞いてイオはがっくりと肩を落とした。

「畜生！ 何で俺達がこんな目に会わなきゃならないんだよ！」

ウォンのつぶやきにアルマが答える。

「すまぬ……」

声の調子にいつもの勢いが無い。それに気づいてウォンは慌てて言った。

「いや、お前を責めたんじゃないよ」

だがアルマは完全に萎(しお)れていた。

「いいのじゃ、みんな妾の責任じゃ……妾さえ来なければこんなことにはならなかったのにな……」

ウォンは何とかアルマを元気づけたいと思ったが、いいセリフを思いつかない。

「お、おい、うじうじするんじゃないよ。らしくねえだろ？」

「それは買いかぶりじゃ。所詮妾など……凍ったまま二度と目覚めぬ方が良かったのじゃ……」

「がたがた言ってるんじゃないよ！ そう言うのはあとにしやがれ！ このゲームのこと一番知ってるのはお前だろ？ お前がそんなになっちゃったら俺達どうすりゃいいんだよ！」

だがアルマはそれには答えずうつむいて肩を震わせ始める。スーチが慌ててアルマの肩を抱いて慰める。イオも慌ててウォンを引き離して苦言を垂れた。

「おい、ウォン、ちょっと言い過ぎだろ？」

だが今度はウォンまでが拳を握りしめて体を震わせていた。

「畜生！こんなときさあ、俺どうすればいいんだ？」

「ちょっと、お前まで、やめろよ！」

状況は最悪だ。あらゆる危機の中で最悪の危機がパーティーの瓦解である。今まさにウォン達はそれに直面していた。

だがそれが分かっていたからといって、残されたイオに打開策があるわけではない。彼が何とか泣き出さずに済んでいたのは、彼までが泣き出したらもう洒落にならないという事実一点にかかっていたのだ。

イオはありったけの空元気を集めると言ってみた。

「ともかくまだ時間はあるし、何か方法はあるって」

そう言いながらイオ自身が全くそれを信じてはいなかった。だがそれを聞いたスーチが、最初に泣き出して泣き疲れたせいか、気を取り直してくれた。

「そ、そうよね。こういうのって何か方法はあるはずよね。そう言う風にできてるんだから」

さすがに誰もこの場合はそうでないかもしれないと突っ込むようなことはしなかった。

「でも、どうすればいいの？ ああ、あたしなんかじゃなくて、ゼナさんが来てればよかったのに……ゼナさんだったら絶対あそこで止めてたわ。あたしがバカだったらいけないのよ」

そう言いながらスーチは再び声を震わせ始めた。

「やめろよ、みんな、こんな情けないところランやミスに見られたら、永久に語り継がれちゃうぞ！」

「見ててくれるんなら、一生言われ続けたっていいわ！」

それを聞いてウォンは急に腹が立ってきた。

「そうなんだよな。大体さっきのアルマの決闘、ランの野郎、見てなかったのかよ」

「どうなんだろう。見てたら何らかのリアクションはありそうなんだが」

「やっぱり寝てたのよ」

「ってことは、あの野郎、人が死にそうな時に自分だけぐうぐう寝てやがったってことだよな！畜生、ぶっ殺してやる！」

そう言ってウォンは立ち上がるとメイスを抜きはなした。それを見てイオが慌てて押さえる。

「おいおい、ここで暴れたって見てないんだからどうしようもないだろ？」

「じゃあ、何とかしてあいつらを見つける方法を考えやがれ！」

「お前、勝手なことばかり言ってるんじゃないぞ」

だがその時だった。スーチがはっと顔を上げた。

「そ、そうなのよ。ランさんにこの窮状を伝えないといけないんだわ」

「そりゃ……そうだろ」

他の三人がスーチの顔を見る。確かにその通りなのだが。

「でもあたし達、あのゴーストデータを見失っただけなのよね。ランさんに何か伝える方法って、それ以外には何もないの？」

三人は一瞬絶句した。確かに言われたとおりではある。彼らが失ったのは可能性の一つにしか

過ぎない。

「でも他にとって、どんな方法があるんだ？」

イオの問いにスーチはしばらく考え込んだ。それからぼそつと言う。

「例えば、クリアしたら？」

「はあ？ クリアって、ゲームのクリアのことか？」

スーチはうなずいた。

「ファイナルブレードとかだったら、どこかのパーティーがゲームをクリアしたらモニターにそういう表示が出るじゃない。知り合いだったらそれを見ておめでとうって言うでしょ？ ベラトリックスでも同じような仕掛けはないの？」

「ちょっと待ってくれよ。表示が出たところで、あと5時間しかないのにクリアなんて無理だよ」

イオがそう言うがスーチはきっと目を見開いて答えた。

「そんなの分かってるわ！ でもランさんに何かを伝える方法ってまだあったってことじゃない。他にもっとないの？ みんなで泣いてるよりも、そんなことでも考えてた方がましじゃない！」

イオはスーチの剣幕にたじたじとなった。だが言われてみれば確かに全くその通りである。イオもウォンも考え込んだ。それからイオがウォンに言う。

「うーむ。要するにゲーム内でできることで、コンソールに割り込み表示が出そうな物ってか？」

「死んだぐらいじゃだめだよな？」

「そんなんで一々出してたら、うざったくてしょうがないよ。な、アルマ、そうだろ？」

ところがアルマは心そこにあらずという風で宙を見つめてぶつぶつ何か言っている。

「ああ？ どうしたんだ？」

「おい、アルマ？」

その途端アルマはなぜか「ああっ」と声を挙げると再びうつむいてしまった。

「おい、どうしたんだよ」

ウォンの問いかけにアルマは手を振った。

「いやいい。気にせずにな」

「気になるってんだよ」

「ねえアルマ、何かアイデアがあるんだったら、とりあえずでも言ってみたら」

スーチの問いかけに対して、しばらくしてアルマは答えた。

「四聖獣じゃ……」

「は？」

「東の大陸のブルードラゴン、西の大陸のホワイトタイガー、南の大陸のレッドフェニックス、それに北の大陸のブラクトータスのことじゃ」

それを聞いて一同はうなずいた。東西南北の果てにこの種の大モンスターや精霊がいるのはほとんどどういったゲームでもお約束に近くなっている。

「へえ、それってここにもいるんだ……で？」

ウォンがそう言うとアルマが続ける。

「ああ。実はな、この四聖獣をな、どれでもよいから倒したら、スー殿が言うようにモニターに派手なメッセージが出るのじゃ」

「なんだって？ それじゃそいつをやっつけたらラーンと連絡がとれるってことか？」

アルマはうなずいた。それを聞いてイオがカイに尋ねた。

「なあカイ、そういうことをしたらどうなるんだ？」

「ああ？ 確かにコンソールにメッセージが出るだろうね。だからそんな目立つことをしちゃいけないよ」

幸先の良い答えだ！ だがこの話にはそれ以前の根本的な問題がありそうだった。それに関してスーチが尋ねた。

「でも、四聖獣って名前からしてもものすごく強くないの？」

「ああ。はっきり言って魔王などよりよほど強いじゃ。だからこ奴らを倒すことはゲームをクリアすること以上の名誉なのじゃ。だからこそ祝いのメッセージが出るのじゃ」

期待は一気にしぼんでしまった。だがアルマは続けた。

「でも実はこの中のレッドフェニックスじゃが、これをレベル1で倒す裏技があるのじゃ」

「なんだって？」

三人は身を乗り出した。

「裏技って、じゃあ今の俺達でも倒せるってことか？」

ウォンの問いにアルマが答える。

「まあ、不可能ではないじゃろうが……」

「なんだよ？ そんないい手があったんなら……」

そう言いかけたウォンをアルマは遮った。

「でも、だめなのじゃ」

「どうしてだよ？」

「どうしてって……そのためには絶対に誰かが死なねばならぬからじゃ」

三人はしばらく言葉が出せなかった。

しばらくの沈黙の後にイオが尋ねた。

「どうして……死ななきゃならないんだ？」

彼の問いにアルマは答えた。

「もちろんレベルが80とかを越えておれば死なずに済むかもしれぬ。じゃが我々はレベルが1なのじゃ。そうでもせねば絶対勝てぬ相手なのじゃ」

「もっと詳しく教えて」

スーチの問いにアルマは説明を始める。

「これはいろいろ複雑なのじゃ。まずレッドフェニックスは南の大陸のノートス高地に巣くっておるのじゃが、ここはペルナタウンから歩いて2時間ぐらいの所なのじゃ」

「ペルナタウンって？」

「ああ、南の大陸の首都なのじゃ。そこのステーションから一発で行くことができるのじゃ。そしてな、ノートス高地まではまあまあ安全なので、今のレベルでも何とかなるのじゃ。本当に危険なところといえばペルナタウンその物と、トロールの居留地だけなのじゃ」

そう言ってアルマはちょっと言葉を切る。三人は黙って続きを待った。

「ペルナタウンの方は妾が安全な道を知っておる。トロールの居留地の方じゃが、そこは実はトロールよりもその周辺に巣くう獣共のが厄介でな、でもそいつらを追い払う方法も知っておるのじゃ」

三人は黙ってうなずいた。

「そしてノース高地に行き着いたのであれば、フェニックスと戦わねばならぬのじゃが、こ奴は二つの超能力を持っておる。一つは精霊召還じゃ。奴は炎の精霊を精神力を使わずに召還することができるのじゃ」

「なるほど。フェニックスだしな」

ウォンがそう言って笑う。だがイオはあまり気に入らない様子で尋ねた。

「っていうと、召還し放題ってことか？」

「まあそうじゃが、これは気にせんでよい。召還する数が決まっておってな、こちらのレベルが5以下じゃと1匹も出てこぬのじゃ。それ故、中途半端にレベル5を越えるよりはそれ以下の方が良いのじゃ」

「なるほど。そういうことね。で、もう一つの超能力って？」

「これはスーパーノヴァという奴でな」

一同はその名前だけで大体想像がついた。

「もしかしてあたり一面火の海とか……」

「まあそんなものじゃ。全体攻撃にもかかわらず、耐熱防御を最大に上げてても、半死半生じゃ。今の我らでは骨も残らんじゃろう」

「はは！なるほど！フェニックスだしな」

「そんなの食らったらみんな死んじゃうんじゃないの？」

スーチが心配そうに言う。

「もちろんまともに食らったらその通りじゃ。しかしな。これは光の属性なので、岩の陰などについて直接見えていなければ大丈夫なのじゃ」

「でもそれじゃ、どうやってフェニックスを攻撃するんだ？」

ウォンが言うと言アルマが答えた。

「このスーパーノヴァはな、こちらのパーティーが半分以上死んでおると使ってこぬのじゃ。よってそうなればフェニックスに攻撃することができるのじゃ」

それを聞いてイオが言う。

「え？ってことは、死んでなきゃならないってのは……」

「そうじゃ。全員生きておっては、奴はこいつを無制限に使うのじゃ。それではどうあがいても絶対に勝てぬのじゃ。でも半分以上死んでおれば、奴はこれを使わぬので勝ち目が出てくるのじゃ」

一同は顔を見合わせる。大変納得のいく話だ。このたぐいのゲームでは、意図したしないに関わらず、相手の動きにはこうした特徴があるものだ。いかにそれに気づくかで戦いが有利にも不利にも展開する。

「でも半分死んでたら、残り二人でしょ？ それで倒せるの？」

「そうは簡単には行かぬのじゃ。何しろあ奴は、傷を負ってもあつという間に元通りに回復してしまうのじゃ」

「はははは！ なるほど！ フェニックスだしな」

「それじゃどうやって倒すの？」

スーチの問いにアルマが答える。

「一撃で生命力をゼロにするのじゃ。奴は生命力そのものはそれほど高くはないし、防御力も大したことがないのじゃ。それ故にレベルが十分高い戦士であれば一撃で殺せるのじゃ」

「でもあたし達レベル1よね。そんな一撃で殺せたりするの？」

「それは無理じゃ。でもここにもちょっとしたバグがあるのじゃ」

それを聞いてイオが身を乗り出した。

「バグ？ どんな？」

「フェニックスが生命力を回復するときにはな、本来であれば生命力の“上限値”にまで回復する仕様だったそうなのじゃ。でもカイが勘違いをしたせいで、奴は攻撃を受けたときの生命力の“現在値”にまでしか回復しないのじゃ」

それを聞いてイオはちょっと考え込む。

「そういう仕様でも……最初は生命力は上限まであるんだし、結局上限値まで戻ると変わらないんじゃないのか？」

「そう思っておったので放置しておったらしいのじゃ。ところが奴の回復はコンマ何秒かの時間がかかるのじゃ。わかるかや？」

それを聞いた途端にイオは手を打った。

「あ！ なるほど！ 回復中にもう一度攻撃したら、そこまでしか回復しないってことか！」

「そうなのじゃ」

その時スーチが口を挟んだ。

「でも今アルマ、コンマ何秒って言わなかった？ そんな短い間に二発も攻撃を入れられるの？」

「じゃから二人必要なのじゃ。奴の軌道に沿って並んでおいて、前の者が斬った直後に後ろの者が斬るようにするのじゃ」

それを聞いてウォンは口笛を鳴らした。

「へえ！ おもしろそうじゃん」

それを聞いてアルマがウォンの顔をにらみつける。

「おもしろいとはどういうことじゃ？ 生きるか死ぬかの瀬戸際なのじゃ！」

それに対してスーチも一見同調する。

「そうよ！ ウォン！ あなたいつもおもしろいかどうかだけで決めちゃうんだから！」

ウォンは何か言い返そうとしたが、その前にスーチはアルマの方に振り返って続けた。

「でもアルマ、そうやったら本当にフェニックスを倒せるの？」

アルマは意表を突かれたようだった。

「え？ まあ一度だけ成功したことがあるが」

「本当にあたし達にできるかしら？」

スーチの目がきらきら輝いている。

「スーチ殿、まさかやる気なのかや？」

「当然じゃない！ できることがあったんだから！」

スーチは冗談を言っている様子ではない。

「でもこれは命がけなのじゃ！」

「分かってるわ。でも30分以内に片をつけてくれれば蘇生できるでしょ。ゲーム中のこととかは忘れちゃってるかもしれないけど」

昔なら数分以上死んでいたらもはや二度と蘇生は望めなかったが、この当時の見積もりとしてはかなり妥当な線である。

アルマはショックを受けたように黙り込んだ。彼女はちょっとその可能性を考えてみたが、やはり危険すぎると思った。

「そのような保証はできぬのじゃ。妾も成功したのは一度だけなのじゃ。それもレベルが4のときじゃ。成功するという保証はできぬのじゃ」

だがスーチはひるまない。

「難しいのは分かるわ……でもね、あたし考えたの。そりゃ放っておいても何も起こらないかもしれないわ。それにカイはアルマ、あなたを助けようとしてやってるんだから、あなたは絶対安全だし、あたし達も多分大丈夫でしょうね。でもそうやって生き残ったとしても、ギィやラーンさんが亡くなってたらどうなの？ もう楽しい日なんて来ないわ。だって今あなたがとっても素敵な可能性を教えてくれたのよ。そうなったらあたし一生後悔し続けるのよ。もしあの時あの裏技をやっていたらって。あたし嫌。そんなの。アルマはそれでいいの？」

アルマはたじたじとなる。

「じゃが、そうすると少なくとも二人が本当に死んでしまうかもしれんのじゃ！ ああ、妾が死ぬことにすれば、一人で良いな。でも誰か一人は確実に一時は死なねばならんのじゃ！」

それを聞いてスーチは考え込んだ。それから決然と言い放った。

「あたしが死ぬわ」

「ちょっと、スーチ殿！」

「この作戦じゃあたしが一番役に立たないもの。あたしとアルマが死んで、イオ君とウォン君でフェニックスをやっつけてくれればいいのよ」

それを聞いてイオが言った。

「いやそれより、ウォンとアルマに任せた方がいいだろうね」

「イオ殿！ どうして？」

「だって剣の扱いは君の方が僕より上手だしね。実際に経験してるわけだし」

「でも……イオ殿が死んでしもうてはティルナ殿などがどう思われるか……」

それを聞いてイオも一瞬口ごもった。だがすぐ彼は顔を上げる。

「やる以上はそんなこと言ってもらえないさ。それにそもそも俺はそのまま本当に死ぬつもりはないんだけど。で聞きたいんだけどアルマ、その作戦って死に役が死んでからどのぐらいで終わる？」

イオの問いにアルマはちょっと考え込んでから答えた。

「始めてしまえば……多分10分もかからぬと思うが」

「それだったら保険がかけられるだろ？」

「保険じゃと？」

「ああ。作戦をカイの突入予定時刻のちょっと前に始めるんだ。死亡予定時刻が大体突入時刻の30分ぐらい前になるようにするのがいいかな？」

「どういうことじゃ？」

「カイが突入しちまったら、少なくともアルマ、君は目覚めるだろ？目覚めれば蘇生作業もできるわけだ。その時に死んでから時間が経ちすぎてなければいいわけだ。こうしておけば最悪でも30分ぐらいしか死ななくていいだろ？」

アルマはそれを聞いて目を丸くした。

「それにフェニックスをやっつけるのに成功すれば20分の余裕がある。それだけあればカイの突入に対応するにはまあ十分だろうな」

「しかし……」

アルマは困ったような顔でスーチを見た。だが彼女は言った。

「あたしも良い考えだと思うわ」

「でも……」

アルマは最後にウォンの顔を見た。だが彼も同じだった。

「じゃあ決まりだな。それで行こうや」

アルマは何度もウォンを、それからイオ、スーチの顔を見る。だが彼らの顔に迷いはない。だとすれば彼女にできることはただ一つだ。

「かたじけない……妾のためにそこまでして頂いて。分かり申した。しかしやるのであれば成功させねばならぬ。ならばせねばならぬことはたくさんあるぞよ」

そう言いながらアルマは立ち上がった。

「まずはペルナタウンに向かうぞよ。細かいことは歩きながら説明するぞよ。向こうに着いたら色々準備があるのでな」

一行もうなずいて立ち上がり、ステーションに向かって歩き出した。

〈第8章〉 ペルナタウン

ステーションのゲートをくぐって現れたのは、石造りの壁に覆われた大きな八角形の広間だった。その場所は松明で明々と照らされ、八角形の各頂点に当たる所から同様に八方に向かって回廊が延びているのが見える。

「ここがペルナタウンか？」

「そうじゃ」

彼らは今、あの必死の戦闘で得たけなしのチケットを使ってこの南の大陸に渡ってきた所だ。といってもゲートを使っての移動なので、ほとんどエレベーターで別な階に行くのとやっていることは変わりがない。だがエレベーターと違う所は、チケットなしで元の大陸に戻ろうとすれば原野や密林や荒海を越えて旅をしなければならないというところだ。

「かなり雰囲気が違うのね」

建物の内装の様子を見ながらスーチがつぶやいた。それを聞きつけてアルマが説明する。

「うむ。ここは古代ローマをモデルにしておるそうなのじゃ。だからここの浴場はゲーム中で一番出来が良いのじゃ」

「あはは。もっと余裕があるときに来られたら良かったのにねえ」

「うむ。それに闘技場に出ればかなりの小金が稼げるしのう」

今度はそれを聞きつけてウォンが口を挟む。

「へえ。そんな所があるのか？」

「出てみたいか？」

アルマはにやっと笑ってウォンの顔を見た。

「相手はどんなんだ？」

ウォンも嬉しそうに尋ね返す。

「ピンキリじゃ。じゃが前座なら今のおのれでも何とかかなろうぞ」

「へえ。そりゃ面白そうだな」

ウォンがうずうずしてきているのは明白だ。それに気づいてイオが釘を刺す。

「おい、そんなことしてる場合じゃないんじゃないか？」

それを聞いてアルマがうなずいた。

「もちろんじゃ。懐かしくてついな。さあ商店街はこっちじゃ」

そう言って彼女は広場から発している回廊の一つに皆を案内した。回廊の灯火は広間より少し減って、灯火の下げられた柱と柱の間のはかなり薄暗くなっている。その付近には昼間の明かり取りと思われる窓が何カ所もあるが、外は墨のように真っ暗だ。

「ここはもう夜なのか？」

イオがつぶやく。ゲートをくぐる前はまだ陽はかなり高かったし、この大陸は南の大陸のはずだ。こんなに早く夜になるのだろうか？ それは他のメンバーも感じていた疑問だった。それを聞いてアルマが答える。

「いやそうではないのじゃ。時間は経っておらぬ。そうではなくて、この街は呪われておるのじゃ」

「え？」

一行は振り返ってアルマの顔を見る。アルマは歩きながら説明する。

「この街にはな、かつて発狂した王に逆らった魔導師がおってな、そ奴は捕らえられて拷問された挙げ句殺されてしまったのじゃが、その魔導師の最後の呪いのせいでこうして光が失われてしまったのじゃ。それ以来、建物の多くがこういった回廊でつながれてな、その中はこうして照らされておるから明るいのじゃが、ここから一歩出れば真っ暗なのじゃ」

三人はうなずいた。彼らにとってはかなりおなじみのシチュエーションだ。

「じゃあ朝は来ないのか？」

イオが尋ねるとアルマが首を振る。

「その通りじゃ。光を取り戻すには、街の地下に広がるダンジョンの奥底に眠る、その魔導師の屍を見つけて浄化してやる必要があるのじゃ」

それを聞いてウォンが笑う。

「わはは。面白そうじゃねえか」

「ああ。面白いぞ。このダンジョンは地下9層にまで広がっておってな、全部回ろうとするとそれだけで1週間はかかるのじゃ。でも手に入るお宝はもう極めつけの物ばかりなのじゃ」

「極めつけて、どんなのがあるんだ？」

「例えばムラマサブレードというのがあるのじゃが、これがグレーターデーモンに守られておってな……」

アルマは延々とダンジョンの話を始めそうになった。その気配を感じ取ってスーチが釘を刺す。

「ねえアルマ。面白そうなんだけど、そのお話って今必要なの？」

もちろん今の彼らにそんな暇があるはずがない。それを聞いてアルマはまた我に返る。

「そうじゃ！ そうではないか！ ウォン！ 話を逸らすでない」

「あんだと？ お前が勝手に始めたんだろうが！」

「なんじゃと？」

ウォンとアルマがまたまた喧嘩を始めそうになるが、またスーチが割り込んだ。

「ねえ、やめてよ。今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ？ で、ともかくあたし達この暗闇の街を通り抜けなきゃならないんでしょ？」

それを聞いてアルマがうなずいた。

「うむ。そのとおりなのじゃ。でもそれ程心配には及ばぬのじゃ。なに、敵にさえ見つからねば良いのじゃからな」

「そんな！ 簡単に言うけど……」

スーチは心配そうだ。というかそう感じる方が普通だろう。夜間の行動はそれだけで難度が上がるし、何と言ってもここは呪われた闇の中ではないのか？

だがアルマはぽんとスーチの肩を叩いて、三人の方に向き直った。

「こつさえ呑み込めば難しいことではないのじゃ。まずやってはいけないことは、明かりをつけることじゃ。最初はみな暗いからと言って明かりを灯すが、そうするとそれ目当てに色々なザコ

共がやってきてしまうのじゃ。じゃから暗視の魔法やゴーグルを使うのが良いのじゃが、これはちょっと簡単には手に入らぬのじゃ」

何だかあまり簡単そうではないような気がする。

「じゃあどうするんだ？」

ウォンが尋ねるとアルマが答える。

「闇の中のザコ共は大体いる場所が決まっておる。そしてその場所は妾が知っておる。だからそこを避けて歩けば良いのじゃ。ここは何度も来たゆえ、目をつぶってでも案内できるわ。じゃがもう一つ問題があるのじゃ」

それを聞いてイオが言った。

「夜行性の何かか？」

アルマはうなずいた。

「そうじゃ。コウモリじゃ。奴らは強さ自体は大したことはないのじゃが、暗闇で動く物を見つけてしつこくまとわりついてきおる。そいつら相手にばたばたしていると他の奴らが物音を聞きつけて集まってくるのじゃ。じゃから奴らが来たら黙ってやり過ぎるか、瞬殺せねばならぬのじゃ」

一行はうなずいた。こういった暗い場所ではお約束のパターンだ。

「なるほど。うっとうしそうだな」

イオはそう答えたが、それほど心配した口調ではない。そういった状況だと分かっただけで対応のしようはある。

「暗闇で奴らが来たのを確かめるのって、やっぱり羽音か？」

イオが尋ねる。だがアルマが答える前にスーチが口を挟んだ。

「ねえアルマ、ここのコウモリも超音波出してる？」

アルマが訝しそうに答えた。

「え？ そりゃもちろんそうじゃ。じゃから“コウモリ耳”を買って行かねばならんと言おうとしておったのじゃ。羽音でも分からぬことはないが、それを使えば奴らがこちらを発見したかどうか分かるのじゃ」

それを聞いてスーチは微笑んだ。

「じゃあ大丈夫よ。多分」

「はあ？ 大丈夫とは？」

「そうだな。スーならOKだ」

それを聞いてウォンやイオも何故か太鼓判を押す。訳が分からぬといったアルマに対してスーチが説明した。

「あたし達ユディ族って、大体38000ヘルツぐらいまで聴けるのよ。で、普通NSEシステムって物理レイヤは素通しだから、ゲーム中でもそのまま有効なの」

「ほう？ そうなのかや？」

驚いた表情のアルマに対してイオもうなずく。

「ああ。それはその通り。でもこのシステム古いけど大丈夫かな？」

それを聞いてアルマはカイに尋ねた。もちろん誰も見ないふりをしていたが彼は彼らの後をず

っと付いてきている。アルマの問いを聞いてカイは答えた。

「ああ？ 物理レイヤの仕様？ もちろん通常の物理シミュレータをそのまま使ってるさ。わざわざ変更しても意味ないしね」

物理レイヤとは通常の三次元物体や流体運動などのシミュレートシステムのことだ。これには3000年以上昔から使われている定評あるシステムがあって、NSEのゲームシステムでの“世界構築”の基礎となっている部分だ。

カイの答えを聞いてアルマはうなずいた。

「ふむ。それは便利じゃ。ならばここのコウモリはスー殿にお任せするのが良からうか？」

「ええ。任しといて！」

「それではスー殿には奴らが来たときの警告をお願いするぞよ。それと……おお」

アルマは道ばたにゴミの山を見つけると、そこの中から空き瓶を2本手にして戻ってきた。

「これをスー殿に預けておくぞよ」

スーチは一瞬ぼかんとしたが、すぐにアルマの意図を理解した。

「これってもしかしてこうやってこするの？」

スーチは瓶を軽くこすりあわせる。アルマは微笑んでうなずいた。

「ああ。コウモリの奴らはこれで落ちるのじゃ」

「きゃ！ おもしろそう！」

そう言ってスーチは軽く飛び上がった。それを見てウォンが言った。

「なあ、スーちゃんよ。あまり面白がってる場合じゃないんだぜ」

スーチはばつが悪そうにうつむいたが、アルマがウォンに言った。

「こら、ウォン。何を絡んできておる」

「ああ？ どうしてスーだと怒られないんだよ」

「なんじゃ？ おのれはスー殿に嫉妬しておるのかや？」

「なんだと？」

また喧嘩になりそうなところで、辺りの景色が一変した。

「おお？」

気が付くと四人は広い建物の中に入っていた。その中は今までと打ってかわって人で賑わっている。ここはペルナタウンの中心部で、様々な商店が軒を連ねている。

「結構人が住んでるのね」

「ああ。曲がりなりにも南大陸の首都じゃからな」

一行は人並みをかき分けるとまず道具屋に向かった。

そこで一行はこれからの旅に不要な物をことごとく売り払った。今回の旅はそう長くはなりそうもない。だから次の作戦に必要な物だけ持っていけばいいのだ。それにまだ彼らはゲームに入って浅いので思い入れのあるような品物もない。

不要な物を売り払い終わると、まともな格好をしているのはアルマだけとなった。他の三人はシャツ一枚といった格好だ。ここは暖かいのでそれでも問題ないが。

「さて金はどのぐらいじゃ？」

アルマの問いにスーチが答える。

「2200Gぐらいかしら」

「ふむ。まあまあじゃな。ではまずウォンの装備を調べねばなるまい」

対フェニックス戦では二人の剣士が必要になる。アルマは今のままでよいとして、ウォンの装備は全て変える必要があった。もちろん彼は今は僧侶なので剣士の装備をするのは本来ミスマッチなのだが、彼らはまだレベル1だ。こんな駆け出し状態では職業に特化した特徴はまだ出でず、結果的にどういう装備をしても大差がなかった。

一行は道具屋を一旦出ると武具屋に入る。

「何かお勧めの剣とかあるのか？」

壁に掛けられた大量の剣を眺めながらウォンが尋ねる。

「いや、おのれの好きな物を選ぶが良い。できれば頑丈な方が良いでしょう。それから鎧は金属の付いておらぬ物がよい」

「何でだ？」

「フェニックスは近寄るだけで熱いのじゃ」

「そういうことね」

ウォンはうなずくと適当な武器と防具を物色し始めた。その間にアルマがウォンとスーチに言った。

「二人もそのままではちと恥ずかしいな。まあ動きやすければどのような服でも構わぬが、色は黒いのが良いでしょう」

「やっぱそうか？」

「ああ。街を出るときはその方が見つかりにくくなるからな」

それを聞いてイオは黒いローブを、スーチは盗賊衣装を物色し始める。普通だと敵の攻撃や魔法の防御がどうだということになって悩む作業なのだが、今はとにかく黒ければ良かっただけなのですぐに決まった。

「こんな感じでどう？」

黒装束をまとったスーチがポーズを取る。

「おお、なかなかにはまっておるぞ。スー殿がこんなに盗賊向きとは思わなんだ」

普通だったら怒り出しそうなセリフだが、スーチはにこにこ笑って答える。

「そんな、まだまだよ。ゼナさんとかに比べたら。でも耳が良く聞こえるってのは盗賊にとっては凄く便利なのよ。ちょっと反則だけど」

「ほう？ それでは小さな音でも良く聞こえるのかや？」

「それはそこまでじゃないんだけど、ほらこそこそ動いていても自分には聞こえない音だったらみんな平気でキューキュー言わしてるから、やっぱり色々便利なのよ」

アルマはうなずいたが、そこではっとしたように顔を上げた。

「ああ、それなら“生命力ゲージ”を買うことができそうじゃな。コウモリ耳を買わなくとも良くなったのじゃから」

「何？ それって敵の生命力を数値化する物？ 何に使うの？」

スーチの問いにアルマは答えた。

「ああ。以前やったときはそれを持たずに行ったのじゃ。ところが二人並んでフェニックスの奴をぶった切るわけじゃが、後どれくらいで倒しきれるのが全然見当つかないので、えらく不安だったのじゃ」

「あ！ それ分かる分かる。どのくらい減ってるか分かるだけでやる気出てくるものね」

「そうなのじゃ。何しろ一回一回が命がけじゃろう？ 残りどれだけというのが分かるだけでも気構えが全然変わって来るじゃろう？」

二人がそんなことを話しているとイオが戻ってきた。彼も黒いローブに身を包んでいる。

「こんなんでいいか？」

「ああ。立派じゃ。してウォンは？」

イオは肩をすくめる。

三人がウォンの所に戻ると彼はまだあれこれ選択中だった。

「こら！ おのれは何をもたもたしておるのじゃ！」

「だってどれがいいんだ？ ここのって」

ウォンはウォンで彼の役割の重大さぐらいは理解できている。そのため最も適した装備にしようとして色々考えてはいたのだ。だがアルマはにべもなく言った。

「ど阿呆が！ 今のおのれではどれでも同じじゃ。のけ！ 妾が選んでやろうぞ」

そう言ってアルマは壁に掛かっていた剣をほとんど見もせずを選んでウォンに投げ渡す。

「おい。これでいいのか？」

「それは妾が素人の時によく使ったタイプの剣じゃ。バランスが良いので扱いやすいのじゃ」

「そ、そうかよ」

「今度はこっちじゃ」

アルマはウォンの腕を掴むと武具のコーナーに行き、黒革の鎧と帽子を取るとウォンにいきなり着せる。

「サイズはどうじゃ？」

「あ？ まあまあかな？」

「じゃあ今度は靴じゃ」

そんな感じでアルマは有無を言わずウォンの装備を揃えてしまった。

当然ウォンはプロとしての誇りがある。本来ならこんな素人扱いに耐えられる男ではない。だがここでそう言って暴れるわけにはいかなかった。それ以前になぜかそうしてもらえるのが嬉しいような気もしていたのだ。

「どうじゃ？」

できあがった格好を鏡で見ながら、ウォンは妙な気分だった。こんな気分になったのはいつのことだっただろう？ ええとあれは……

だがアルマはそんな回想に耽らせてくれなかった。彼の背中をどんと叩くと大声で言った。

「うむ。立派じゃな。それでは行こうか」

そう言って彼女は支払いを済ませるとつかつかと店外に出て行く。三人は慌てて彼女の後を追う。彼らは武具屋を出ると向かいにある道具屋に再び入った。

一行は残った金でザイルやハーケン、ハンマーなどの登攀道具と先ほどアルマが言っていた生

命力ゲージを購入した。

更に道具屋を出ると今度は薬屋に行き最低限の薬品類を購入する。だがその頃には所持金もそろそろ尽きてきていてあまりたくさんの薬は買えなかった。

「大丈夫かしら」

ささやかな薬袋を見ながらスーチが心配そうに言う。だがアルマは手を振って答えた。

「高地に行くまでは戦闘など起こらぬはずじゃ。まかり間違ごうて戦いになってしまったら、まあそこで終いじゃ思うがよい。薬などあくまで気休めじゃ」

そう言われた所で心配な物は心配だ。だが騒いでも仕方がない。

「さて、これで準備はそろったのか？」

イオが残り三人を見回しながら言う。見たところ準備は万端なようだ。アルマがうなづく。ウォンも行く気満々だ。だがその時スーチが言った。

「えっとトロールへのおみやげは？」

それを聞いてアルマがこけそうになった。

「おお！ 忘れる所じゃった。これを忘れては洒落にならぬな」

アルマは近くの食料品店に行くと残った金でスモークサーモンを買い込んだ。

「トロールってそんな物が好物なのか？」

イオが尋ねるとアルマが答えた。

「全てのトロールがそうではないがな、そ奴が好物なのじゃ。これがあればそ奴が付いてきてくれるのじゃ」

まあ良くある話だ。一行はそれをしまい込むと再び装備を確認した。今度は大丈夫のようだ。

「では行くぞよ。まずは妾が先頭で案内する。スー殿が殿(しんがり)で、コウモリに注意する。イオ殿とウォンはその間じゃ。良いか？」

一行は互いに顔を見合わせてうなづく。そしてアルマの言った順に並ぶと建物の外の暗闇に足を踏み入れた。当然その後からカイも付いて来ているのだが、彼は他の誰からも見えていないようだし、荷物持ちにもならないので完全に勘定外だ。

ペルナタウンの街は真っ暗だった。一行は市場の光が届かない所まで離れたところでちょっと留まって闇に目を慣らした。目が慣れてくればそこは完全な闇ではないことがわかる。とりあえず周囲の建物の輪郭が分かるぐらいの明るさはある。だが明かりなしでは足下はかなり覚束ない。

「スー殿？ 奴らはおるか」

アルマが小声で言った。

「いいえ。大丈夫よ。声はしないわ」

「うむ。では皆、前の者の腰紐を持つのじゃ」

全員腰から尻尾のように数十センチの紐をぶら下げている。暗闇の中で利き手を自由にした状態で前の者からはぐれないようにするためだ。

ウォンはアルマの腰から下がっているはずの紐を探した。だが彼の手が触れたのは何だか丸くて柔らかな……

「おのれはどこを触っておるか！」

「わ！ すまん」

「腰紐はこれじゃ！」

そうやってアルマはウォンの手を取って紐を握らせる。ウォンはおもわず頬が緩んだ。先ほど感じたアルマの胸の感触もそうだったが、こちらの方の感触もまた大変リアルだった。味覚や触覚に関しては相当にいい加減なものが多いこのシステムで、制作者が限られたリソースをどこに投入したのかがよく分かる……などと喜んでいるわけにはいかない。

「準備は良いかや？」

アルマは全員が紐を掴んだことを確認すると、ゆっくり慎重に歩き始めた。それと同時に全員が紐の引かれる方に向かって歩き出す。こういった状況は様々なゲームの中で難度も体験してきたことなので、四人ともそれで混乱することはなかった。

一行はしばらく大きな建物の並ぶ街路を進んだ。今では暗闇に目が慣れていたのでぼうっと様子が分かるが、それでもちょっと離れてしまったらすぐ別れ別れになってしまいそうだ。もちろんそんなことになったらどれほどまずいかわからないメンバーではない。その点に関しては今も昔も同じなのだ。四人は暗闇の中を息のあった動きで歩み続けた。

アルマの足取りはしっかりしていた。彼女はほとんど戸惑うこともなく複雑な街路を導いていく。ウォンはアルマに手を引かれながら内心舌を巻いていた。

《こいつ本気でできるよな……》

アルマと共に入ったのは、あの“ファイナルブレード”でザコを殺しまくった時以来これで二度目だ。イオに至っては今回が初めてだ。それなのに今彼らは彼女のことをまるで信頼してこうして暗闇の中を移動している。このパーティーはアルマがリーダーだ。それはベラトリックスは彼女がエキスパートだからという理由だが、それを度外視しても彼女は十分に信頼に足るリーダー役をこなしていた。

こういうインストラクターをしていると様々な人とゲームに入ることがあるのだが、ゲーム経験は長いのに何故か今ひとつ信頼できない人も多い。その逆に経験は浅いのに何故かここぞという時には信頼できる者もいる。アルマには間違いなくそんな雰囲気があった。

アルマが彼らを導いて幾つ目かの角を曲がった時、彼女はしっと言って一行を押しとどめた。

「ザコがおるぞよ」

アルマがささやく。見るとアルマの指した方で微かに人影が動くのが見える。

「どうするんだ？」

ウォンが小声で尋ねるとアルマは言った。

「こっそり行って、あの手前の角に入るのじゃ。音を立ててはならんぞ」

本当ならそんなザコなどはこっそり縊(くび)り殺したいところなのだが、今回ばかりはそうも行かない。

一行はザコに気づかれないように静かにその場を通り抜けた。手前の角を入れてしばらく行くと一行は低い住宅街の裏路地のような所に入り込んだ。そこまで来てアルマがふっと息をつく足を止める。

「うむ。さすがみんな見事に静かだったのじゃ」

そう言ってアルマが小声で誉める。こういったゲームではもちろん戦うだけが全てではない。特に敵に気づかれずにすり抜けたりやり過ごすというのはほぼ必須の技能といって良い。そういった状況でのエキスパートは盗賊であるスーチだが、この程度のところであればイオやウォンでももちろん問題はない。

それを聞いてウォンが小声で突っ込んだ。

「当たり前じゃん。俺たちを誰だと思ってるんだよ」

そして彼はアルマの返答に身構えた。彼はどうせ彼女がウォンが失敗しないか一番心配だったとか言うに違いないと思っていたのだ。

だがアルマはそっとウォンの頬に触れると言った。

「うむ。そうじゃな。見直したぞよ」

「……」

ウォンは返す言葉に詰まった。顔がまたかっと熱くなる。ここが呪われた街だったのは幸運だった。そうでなければウォンが赤面したところをスーチやイオに見つけられてしまったことだろう。

その時だった。

「来たわ！」

スーチが遠くから微かなチチチチという声がするのを聞きつけたのだ。それから彼女はさっと背囊から例の空き瓶を取り出した。

「動くなや！」

それを聞いてアルマが小声でささやいた。一行はその場に身をすくめた。

しばらくして他の者にも微かな羽音が聞こえてきた。暗闇の中で黙ってその音を聞いているのは精神衛生上良くない。だがそれに慌てて逃げたりすると逆効果なのだ。コウモリは動く物を敵と認識する。しかし動きさえしなければ奴らは人と静物の区別が付かないのだ———ということを知っては理解していても、それを実行するのは難しい。しかしその点に関しても彼らはエキスパートだった。

コウモリの羽音が頭の上の方を通り過ぎていく。四人は息を潜めて待った。羽音がしなくなっただけからしばらく経ってスーチがささやいた。

「行ったわ」

それを聞いて一行は一斉にふうっと息をした。分かっているのに緊張するのは仕方ない。

四人はまた歩き始めた。こんなところで休んでいるわけにはいかない。

そうして四人はしばらくの間闇の中を歩き続けた。

「出口はまだかよ」

「急かすでない。大丈夫じゃ。もうそんなに遠くはないわ」

彼らはもう1時間近く暗闇を歩いている気がしていた。だが時間を確認してみると歩き始めてからまだ20分ぐらいしか経っていない。アルマ以外の者は闇の中を引きずり回されてほとんど方向感覚を失っていたので、更に遠いような気がしていた。だがアルマの足取りは相変わらずしっかりしている。

彼らは込み入った裏路地を抜けると広い通りに出た。途端にアルマが隠れろと合図をする。そ

の理由は他の者にとっても明らかだった。通りの向こうからカンテラを持った誰かがやってくる。

「夜回りじゃ。隠れよ！」

アルマがささやく。一同は暗がりにも身を潜めた。

やってきたのは兵士のような身なりをした二人連れだ。一行は緊張して身構える。今の状況で戦いになれば間違いなく終わりだ。

しかしその兵士達は観察力はあまりないようだった。二人はアルマ達が隠れている前を何も気づかずに通り過ぎていった。

明かりが見えなくなって四人はまたふうっと息をついた。

「あ奴らは城の衛兵なのじゃが、街の警備も担当しておるのじゃ。今のわしらではまず戦っても勝ち目はないのじゃ」

それを聞いてスーチが言った。

「でも警備担当なら隠れることなかったんじゃないの？ あたし達何も悪いことしてないし」

「暗闇をごそごそしているだけで十分問題じゃ。それに中には汚職兵士もおってな、賄賂を渡さねば言いがかりを付けられることもあるのじゃ」

「あはは。それじゃ仕方ないわね。でもそうするとやっぱりごっそりため込んでる奴もいるのかしら？」

「そりゃもちろんじゃ。で、スー殿、どうしてそのようなことを聞くのじゃな？」

アルマがからかうような口調で言う。

「え？ 何のこと？ 聞いてみただけよ。もちろん。あはは」

スーチがとぼける。それを聞いてイオが言った。

「余裕があれば色々楽しいことがあるそうだな。ここは」

「ああ。色々案内したい所はあるのじゃがな」

それを聞いてウォンが言った。

「どうでもいいけどそろそろ行かないとヤバいんじゃないかねえの？」

彼はこういったこそこそした行動は好きではなかったのでさっさと抜けてしまいたかったのだ。

「分かっておるわ。そう急くな。出口はもうすぐじゃ」

アルマはまた彼らを導いて歩き始めた。そこから次のブロックを曲がった先に、かなり広い広場があった。そのさらに向こうには城壁があってその上はうっすらと明るくなっている。

「あそこが出口じゃ。さあ行くぞ」

アルマがそう言った時だった。

「また来たわ！」

スーチが小声でささやいてまた瓶を取り出した。一行は先ほどと同じようにその場に身をすくめた。遠くからまたコウモリの羽音が近づいてくる。今回もさっきと同様に簡単にやり過ごせるはずだった。だがちょっと運が悪かったのは、彼らがいたのがあまり整備の行き届いていない道端だったことだ。

きっかけは立ち位置の足場が悪くなかったウォンがバランスを取るために少し重心を移動させ

たことだった。そのせいでウォンの剣の柄がイオの体に触れてしまったのだ。コウモリの羽音に集中していたイオはそれに驚いてびくっと体を震わせる。その途端今度は彼の足下の敷石がぐくくと傾いて、イオは側溝にずり落ちて派手な音を立ててしまった。

「わ！」

途端にスーチが言った。

「見つかったわ！」

彼女の鋭い耳はコウモリの声がチチチチという哨戒音からジーッという警戒音に変わるのを聞き逃さなかった。

「スー殿。頼む。引きつけるのじゃ」

「分かったわ」

スーチはコウモリがやってくるのをぎりぎりまで引きつけて、おもむろに手にした瓶を思いっきりこすりあわせた。ギ〜っと嫌な音がする。途端に飛んできたコウモリはいきなり変な旋回を始めてそのまま地面にぼとりと落ちた。見事成功！と思った矢先だった。

「いやああああああ！」

何故かスーチが大声で叫んで手にした瓶を放り出し、両耳を押さえてそのままぶっ倒れてしまったのだ。放り出された瓶が近くの壁に当たって粉々に碎ける。

「どうした？」

三人は慌てた。ウォンがスーチに触れると、彼女は体を震わせながら気絶しているようだ。

「何だよ？ これは？」

「分からぬ！ こんなことは初めてじゃ！」

「どうするよ？」

「ともかくスー殿を担げ！ 走るぞよ！」

言い争っている暇はなさそうだ。騒ぎを聞きつけたのか遠くから明かりを持った誰かが走ってくるのが見える。

ウォンとイオは倒れているスーチを二人で抱え上げる。

「あそこじゃ。あの門に走るのじゃ！」

言われた方を見ると城壁に微かに城門らしき輪郭が見える。二人はスーチを抱えて走り出した。

「番兵とかはいないのかよ？」

「おらぬ。大丈夫じゃ！」

三人は全速力で走った。

走りながらウォンが叫んだ。

「イオ！ てめえ何してやがる！」

「お前が動いたからだろ！」

「無駄口を叩くでない！」

三人が気絶したスーチを抱えて城門をくぐり、外堀にかかった橋を抜けると同時にぱっと光が戻ってきた。

街の外は夕暮れ時だった。目前には長閑な田園風景が広がっている。その中を1本の街道がずっと先まで続いている。彼方には山頂が水平になった高い山が見える。

「ともかくあの茂みまで行くぞよ」

三人はスーチを運ぶと近くの茂みの陰に横たえた。彼女は目を閉じて体を震わせているが、命に別状はないようだ。しばらくそうしていると彼女は息を吹き返した。

「おい、スーチ！大丈夫か？」

彼女は目の焦点が合っていないようだ。だが意識ははっきりしてきた。

「スー殿。一体何が起こったのじゃ？」

「それが、凄い音がして目の前が真っ白になっちゃったの」

「凄い音？」

残りの三人は顔を見合わせた。もちろんそんな音を聞いた者はいない。

「何かの精神魔法みたいなものか？」

イオの問いにアルマが答える。

「いや、こんな所にそんな物を使う奴などおらぬわ。それにかような魔法は妾も見たことないわ」

それを聞いてスーチも言った。

「あたしも魔法じゃないと思う。あんな音聞かされたら本当に頭が壊れちゃうわ。それともこの攻撃魔法ってあんな苦痛がするものなの？」

それを聞いてアルマが首を振る。

「とんでもない。ちょっとピリピリしたり痺れたりするぐらいじゃ。ぶっ倒れてしまったからといって意識までなくなることもないし。そんな本体に危険があるようなレベルの感覚があるはずないのじゃが……」

それを聞いてイオが言った。

「ってことはエミュレートがうまくいってないってことか？」

「というと？」

アルマはイオの顔を見る。イオは説明した。

「ええとさ、あの時スーが瓶をこすったらあんなったんだよな？ これって例えば超音波領域の処理がバグってたってことはないかな？ それだったら俺たちには関係ないけど、スーなら食らうかもしれないし。詳しくはラーンに調べてもらわないと分からないけど……」

それを聞いてスーチも言った。

「あ、言われてみれば、ほら、マイクをスピーカーに近づけるとハウリングするじゃない。そんな感じのキーンって音だったかも……」

一行は顔を見合わせた。それからアルマが言った。

「ふーむ。だとすると今後スー殿が続けるのは危険なのであろうか？」

だがスーチは首を振る。

「いやよ。あたし一緒に行くから」

「でも」

スーチは頑として言った。

「ここに残ってるのなんて嫌よ。大体あたしがいないと作戦ができないじゃない。それにさっきまではあんなこと一度もなかったんだから、ああなるのは例外的な状況よ」

その言葉には説得力があった。アルマもうなずかざるを得なかった。

「まあそうじゃな。それではスー殿。体はもう大丈夫かや？」

「ええ。もう大丈夫よ」

そう言ってスーチは立ち上がる。

「そうか。ならば先を急がねばな。予想外に手間取ってしまった故」

その言葉と共に他のメンバーも立ち上がり、次の目的地であるトロールの村に向けて歩き始めた。

〈第9章〉 トロール

一行はなだらかな丘陵の続く草原地帯を進んだ。街道から外れると腰まであるような草が茂っており、所々にこんもりとした森が点在している。草むらではぶんぶん羽虫が飛び回り、空には鳥の姿も見える。見事に長閑な田園風景だ。

だがそれ以外の大きな生き物の姿は見えない。これがルフティ・ベイの郊外であれば何の問題もないのだが、ここはゲームの中だ。こんなに平穏だと逆に何か異がないかと不安になってくる。それを感じてスーチがアルマに尋ねた。

「ねえ。このあたりって敵は出てこないの？」

「道を外れて遠くに行かねば大丈夫じゃ」

そう言ってアルマは道ばたの所々にある石像を指さした。

「これがな、獣よけになっておるのじゃ。じゃからこの道を通っておる限りは絶対大丈夫なのじゃ」

それを聞いてウォンが尋ねる。

「へえ。じゃあそいつぶ壊したらどうなるんだ？」

「言わずとも分かるであろう？ 試してみるかや？」

ウォンは慌てて首を振る。もちろどうなるか分からずに聞いたわけではない。だが彼はこの類のことはそうと分かっているもとりにあえず試してみるというのがモットーだった。だがさすがに今そうするのはまずそうだ。

そんな調子で四人は歩き続けた。しばらく歩いても風景は変わらない。

「にしても平和だな」

イオがつぶやいた。それを聞いてアルマが答える。

「当然じゃ。そうでなければ連れてきたりはせぬわ。それに街から出たらどこでも怪物だらけなんて変じゃろう？」

「まあそうだけど、短気な客も多いしな」

イオの言葉にウォンも相づちをうつ。

「1ヶ月もかかるわけだ」

現在の異界の門でプレイできるようなシステムでは、ここまで広いワールドを持っている物はあまりなかった。もちろんそういった物が作れないわけではない。しかしあくまでこれは客あつてのシステムだ。大抵の客は週末などに気晴らしにやってくるのが普通だ。そういうプレイヤーが対象となると、1泊2日程度で話が完結できるぐらいの規模が望ましいのだ。その結果、例えば敵と戦うのが目的のゲームであれば、途中だらだらと移動することなしにすぐに敵のいるフィールドに行けるようになっている。

だがこのベラトリックスというシステムのコンセプトは、その中にリアルな異世界を構築することだった。そのためゲーム内の“生活感”は今見ても素晴らしい物がある。しかしその反面無駄も多く、イベント発生の間隔が間延びしてしまうように思えるのも否めない。

「のんびりやれたら面白そうなのにね」

スーチがつぶやいた。それを聞いてアルマが伏し目がちに答える。

「うむ。こんなことにならねばもっとゆっくり案内できたものを……アリエス島の夕暮れは絶品なのじゃ。是非皆にも見てもらいたかったのじゃが……」

「終わったらまた来ましょうよ！ 今度はいろいろやりながら」

それを聞いてウォンやイオも口を挟む。

「だな。あんなザコ共から逃げ回ってんなんてのは性に合わねえしな」

「ザコ共にボコボコにされるのはもっと性に合わないけどね」

「あんだ？ 喧嘩売ってんのか？」

「だってこのゲームじゃ最初はそうなりそうだろう？」

彼らがそんな話をしているうちに道は下り坂になって幅の広い谷の中に入り込んでいった。谷の中央に村が見える。それを指さしてアルマが言った。

「あれがトロールの村じゃ」

「はあ？ あれが？」

ウォンはそれを見るなりそう口に出していた。彼がそう言ったのも無理はない。イオとスーチも同様に目を丸くしていた。

なぜなら一般的に“トロール”とは残忍で醜い巨人というイメージができています。現在のゲームでもそういう扱いなの普通だ。そのためもしトロールの村なる場所があれば、それは薄汚くて地面には人骨などがごろごろしているような陰惨な場所になるのが普通だった。

だが今目前に見えるのは、細長いとんがり屋根の建物が散在する、どこの絵本から抜け出してきたかと言えないような平和その物の村だ。そしてその村の中には水色をした丸っこいカバが立ちあがったような生き物が歩いているのが見える。

「トロールって……あれ？」

スーチが目をこらしながら尋ねる。それを聞いてアルマが言った。

「そうじゃ。うぬらの言うことも分かるがな、オブルの奴がこのゲームのトロールは絶対こうするんだとしつこく主張してな。昔の童話から採ってきたらしいが」

「オブルって？ さっき魔法使いが得意だったとか言ってた奴？ スタッフだったのか？」

イオが訊くとアルマが答えた。

「ああ。そうじゃ。モンスターのデザインなどは大体奴がやっておったのじゃ」

「でもまたどうしてあんなデザインに？」

「さあ。グログロの奴らばかりで少々うんざりしたのではないか？」

そんな話をしているうちに、一行はトロールの村に到着した。村の中は閑散としている。スーチがあたりを見回しながらつぶやいた。

「さっきの人はどこ行ったのかしら？」

だが彼女がそう言った途端に近くの茂みの中から、ぬっと水色のトロールが現れた。

「きゃ！」

そいつは丸っこい体はしているが、彼らより2回りは体格が大きい。少なくとも腕力勝負ではかなり不利と思われる。

「やあ〜」

だがそのトロールは間延びした声で挨拶してきた。何だか緊張感が殺がれる声だが、この調子なら腕力勝負になるような事態はそうは起こらないだろう。

「あ、あら、こんにちは」

スーチが慌てて答えるとトロールは言った。

「もうそろそろ『こんばんは』だよ～」

確かにそろそろ日が暮れている。

「あ、そうね。こんばんは」

「こんばんは～」

スーチの顔は少々引きつり気味だ。ともかく何だか気が抜ける奴だ。

そのトロールに向かってアルマが尋ねた。

「やあ、ちと物を尋ねたいんじゃないかな、ええと、ワンダラーは今どこにおるかの？」

「ワンダラーかぁ？ さあ、あちこちうろうろしてると思うけどなぁ。でもそろそろ夜だから酒場に戻ってるんじゃないかなぁ」

「おお、そうか。感謝するぞよ」

「ど～いたしましてえ」

そのトロールの情報に従って四人は村の酒場に向かった。酒場は村の中央にあるひとときわ大きな建物だった。しかし彼らが中に入った時はまだ客はほとんど来ていなかった。

アルマは酒場のマスターにワンダラーのことを尋ねた。

「ああ？ ワンダラーかぁ？ 多分すぐ来ると思うよ」

「すぐとはどのくらいじゃ？」

「まあ5～6分もかからないと思うけどねぇ」

それを聞いてアルマがほっとした様子で答えた。

「そうか。それではここで待たしてもらおうぞ」

「構わないよお」

四人は酒場の隅に陣取ってその“ワンダラー”が来るのを待つことにした。席に着くとスーチがアルマに尋ねた。

「そのワンダラーって人が案内してくれるの？」

「いや、案内は妾が行う。ワンダラーは獣よけじゃ」

「獣よけ？」

「ああ。先ほども申した通り、この領域は街道筋と村の周辺は獣よけの彫像があるせいで安全じゃ。じゃがそれから一步外に出れば、それこそ今の我らでは手に負えん奴らがぞろぞろ出てくるのじゃ。じゃが、トロールが同行しておればそ奴らが寄って来ぬので安全なのじゃ」

それを聞いてイオが尋ねた。

「安全って、じゃああのトロールって魔よけの魔法か何かがかかっているのか？」

だがアルマは首を振った。

「いや、単に獣共は奴らを恐れておるだけじゃ」

「恐れる？ あいつらを？」

ウォンが思わず訊き返す。あのトロール達がそんなに危険な存在とは到底思えないのだが。だ

がまたアルマは首を振る。

「いや、あ奴らをなめてかかってはならんぞ。ここのトロールはな、普段は穏和なのじゃがいざ怒らせたら途轍もなく恐ろしいのじゃ。獣共はそれがよく分かっておるからトロールの気配がただけで逃げて行ってしまうのじゃ」

ウォン達三人は振り返って酒場のマスターを見る。どう見たって冗談にしか見えないのだが...

...

「一体どこがそんなにすげえんだよ」

ウォンの問いにアルマが答える。

「まずはあの体じゃ。あれは実はゴムみたいになっておってな、剣とかがほとんど効かぬのじゃ」

「へえ。じゃあ離れて魔法でやっつけるしかないのか？」

だがそれを聞いてアルマは首を振る。

「いや、それもだめじゃ。魔法の耐性の方が高いぐらいじゃ。じゃから接近して剣で戦うしかないのじゃ」

「はあ、結構うっとうしそうな奴らだな」

それを聞いてウォンも納得した。

「まあ、こちらから喧嘩を売らぬ限りは、向こうから襲ってくることはないからのう。ああ、展開によっては奴らが狂って襲いかかって来ることもあるがな」

「あんまり願い下げだね。そりゃ。で、攻撃は何してくるんだ？ でっかい棍棒か何かをぶんまわすのか？」

こういう見知らぬ種族に出会った時は可能な限りその特徴について聞き込むというのは彼らの性となっていた。そのことは当然アルマも理解していたはずだが、ウォンのその問いに彼女は少し妙な表情をして口ごもった。

「ん？ どうした？」

「いや、ちょっとな。オブルがやられた時を思い出してな」

「どんなやられかたしたんだよ？」

ウォンだけでなく他の二人も興味津々の顔でアルマを見る。アルマは口ごもりながら答えた。

「.....喰われたのじゃ」

「喰われた？」

驚き顔の三人に対して、アルマはジェスチャー付きで説明を始める。

「ああ.....奴らの攻撃なんじゃが、あの体がうにゅっと伸びてきてな、こうろくろ首みたいになって、口がこうがぱっと1メートルぐらい開いて、そのまま一呑みにされてしまうのじゃ.....うわあ、思い出しただけでも気色悪いわ」

それを聞いてウォンが呆れて言った。

「それのどこがトロールなんだよ！」

「ここのトロールとはそういう物なのじゃ！」

「プ！ 何かさあ、こいつらのデザインした奴頭が沸いてたんじゃねえのか？」

それを聞いてアルマが真っ赤になって叫んだ。

「悪かったのう。そのアイデアを出したのは妾じゃ」

「はあ？」

三人は驚いてアルマの顔をのぞき込んだ。それに気づいてアルマは恥ずかしそうにまくしたてた。

「大体カイの奴が悪いのじゃ！ 妾は嫌じゃと言ったのじゃぞ？ 奴らがネタ切れになったのは妾のせいではないわ。大体トロールなどさっさと普通ののろまな腕力バカにしておけば良かったのじゃ！ なのにオブルが昔の童話なんぞを見つけ出してきてからに」

それを聞いてスーチが不思議そうに尋ねた。

「じゃあその童話のトロールがそんなだったの？」

だがアルマはまた首を振る。

「いや、童話じゃからそいつらが他人を襲ったりはしないのじゃ。でもゲームに出す以上攻撃手段が必要じゃ。で、ああだこうだ言っている所に妾が、首が伸びて相手を一のみにするようなだけは嫌じゃと言ったのじゃ。そしたらカイもオブルもそれがいいと言い出しおって！ あの外道共め、こういった嫌がらせとなればもう手段を選ばんのじゃ……」

そう言いながら何故かアルマの勢いは段々トーンダウンしていった。

アルマの目前にはその時の光景がありありと浮かんでいた。そしてその結果として生まれたトロール達もまた目前をうろついている。だがそのあった時というのは今から1500年前なのだ。いくらリアルな思い出であろうと、それはもう二度と戻らない時なのだ……そう思った瞬間アルマは泣き出したくなった。だが今そんなことでめめめしているわけにはいかなかった。

アルマがそんな葛藤に襲われていることに気づいてか、スーチが言った。

「あはは。すごい！ でもそれってそんなに変？ あたし見てみたいわ。それ」

それを聞いてアルマが驚いてスーチの顔を見る。

「ああ？ スー殿は大丈夫なのかや？ 妾はもうああいう軟体動物系は気色悪くてだめなのじゃ」

それを聞いてウォンがにやにや笑いながら言った。

「へえ。お前ってナメクジがダメだったんだ」

「何じゃ？ おのれは？ 人の弱みにつけ込む気かや？」

「何を言いやがる。仲間の弱点は知ってないと困るだろ？ べつにお前を騙してナメクジの穴に放り込もうなんて思ってても口に出すもんか！」

「こ、このガキが！」

そう言ってアルマがウォンをはたき倒そうとした時だった。

酒場の扉が開くとトロールが一人入ってきた。それを見て酒場の主人が言った。

「ワンダラーが来たよ」

四人は顔を見合わせる。それからアルマが軽くうなずくと立ち上がり、荷物からスモークサーモンを取り出した。そして彼女はワンダラーに近寄っていった。他の三人も後に続く。

「やあ、ぬしがワンダラーかや？」

アルマは笑みを浮かべながら言った。

「ああ。そうだよ。何か用かい？」

ワンダラーがぬぼっとした声で答える。アルマはワンダラーにスモークサーモンを差し出しながら言った。

「ぬしがこれが好物だったと聞いてな、それでちょっと頼みがあるのじゃが……」

しかしワンダラーの答えは彼女の予想外だった。

「いや、別に好きじゃないけど？」

「は？」

アルマは驚いて訊き返す。だがワンダラーの答えは変わらなかった。

「いや、別に好きじゃないよ」

「好きじゃないって……」

「オイルサーディンだったら欲しかっただけだね。僕はスモークサーモンはあまり好きじゃないんだ」

それを聞いたアルマは大口を開けたままたっぷり10秒間ほど凍り付いた。それから三人の方を向き直ると言った。

「間違えたのじゃ……」

それを聞いた残りの三人も同様だった。同じように10秒ほど凍り付くと、ウォンが言う。

「おい、間違えたって、スモークサーモンとオイルサーディンをどうして間違えるんだよ！」

「だ、だってな、名前が似ておるではないか！ 同じ魚だし……」

アルマの声はほとんど泣き声だ。

「あのなあ、アホか！ お前は！」

「おいおい、どうするんだよ」

「あはは、アルマって結構慌てんぼなんだ……」

アルマの答えを聞いて三人が口々にそう言った瞬間、彼女は手にしていたスモークサーモンをウォンに押しつけると、酒場の外に駆け出して行った。

「あ、アルマ！」

スーチが慌てて彼女の後を追う。呆然としていたイオとウォンもその後を追った。

酒場から出るとアルマが四つんばいになって地面に頭を叩きつけながら泣き叫んでいた。

「ああああああああ！ バカじゃ！ 妾はバカじゃ！！」

「ねえ、アルマ、落ち着いてよ」

「皆の苦勞をみんなふいにしてもうた！ ああ！ 何をしておるのじゃ！ このたわけは！」

そう言いながらアルマは地面に頭を叩きつけ続ける。ここがゲーム内で、しかもその地面には柔らかな草が生えていたから良かったような物の、これがもしリアルワールドだったら彼女は顔面がぐちゃぐちゃになっているような勢いだ。

あまりのアルマの落ち込みようにかける言葉が見あたらない。それに実際これはどうすればいいのだろう？ ここでトロールを仲間にできなければ、計画はここで頓挫と言う他はないのだが。

スーチが大慌てでアルマをなだめようとしている間、ウォンとイオは呆然とそれを見守ることしかできなかった。

「うう、済まぬのじゃ。本当に済まぬのじゃ……」

しばらくしてアルマはやっと落ち着いてきた。泥だらけの顔をスーチが拭いてやっている。そ

れを見ながらウォンがイオを指さしながら言う。

「まあそう気を落とすなって。ボケてんのはこいつだって同じだし」

「ああ？ なんでそうなる？」

「だってさっきのだって、あそこでお前がひっくりこけなきゃスーがあんな目に会うこともなかったわけだろ？ 下手すりゃリアルに危なかったわけだろ」

イオがむっとした顔をするが、そのこと自体には反論できなかったのも何も言わなかった。だがもちろんそれでアルマの気が晴れるわけではない。

「何という愚か者なのじゃ、妾は……ああ、本当に目覚めて来ねば良かったのじゃ……」

このままではまたアルマがだめになってしまいそうだ。そこでスーチがアルマに尋ねる。

「ねえアルマ。他に方法はないの？」

「ああ？」

アルマが顔を上げて焦点の合わない目でスーチを見る。

「例えばほら、街道に獣よけのおまじないがあったじゃない。あれを抜いて持っていったら？」

それを聞いてイオがぽんと手を打った。

「なるほど。そんな手があるか？」

だがそれを聞いてウォンが言った。

「ああ？ あんな石像、誰が担いでいくんだよ！」

「二人で持ったら何とかならないか？」

だがそこにアルマが割り込んで言った。

「いや、だめじゃ。あれは抜いたら効力がなくなってしまうのじゃ」

三人はがっくりとうなだれた。だがまたすぐにスーチが顔を上げて言う。

「じゃあ、トロールさん達に来てもらえるように頼む方法って他にはないのかしら？」

それを聞いてイオも言った。

「そうだよ。要するに誰でもいいから来てもらえればいいんだろ？」

二人の言葉を聞いて、アルマも涙を拭いて考え込んだ。だがしばらくして首を振った。

「……確かに村長の頼みを聞いてやれば村全体から信頼されるようにはなるのじゃが、そのためだけに1日2日は確実にかかってしまうのじゃ。手っ取り早く親しくなれるのはあれだけなのじゃ」

その答えを聞いて今度はウォンが言った。

「ここの雑貨屋にオイルサーディン置いてたりしない？」

だがアルマはウォンをぎろっと睨むと冷たい声で答える。

「ないからあ奴が欲しがっておるのじゃ」

まあその通りだ。だがそれを聞いてイオが言った。

「でもせめて確認ぐらいはしておいても悪くないんじゃないか？」

かなり無駄なような気がしたが、そこで座り込んでいても仕方がないので一行は雑貨屋に行くことにした。

もちろんその予想通り、村の雑貨屋にはオイルサーディンは置いていなかった。雑貨屋の主人に尋ねると彼は答えた。

「そうなんだよう。仕入れても仕入れてもワンダラーの奴が食べちゃうんだよう」

四人は雑貨屋の前でがっくりと座り込む。

外はもう夜だ。星空が綺麗だ。それを見上げながらウォンが言った。

「考えたら置いてたってもう買う金もなかったよな？」

彼らはペルナタウンの買い物で有り金を使い果たしていた。もちろんその後にお金が必要になる予定がなかったからだ。それを聞いてスーチが答える。

「それだったら大丈夫よ。いざとなったらあたしが盗ってくるから」

「ハハハ。確かにスー殿はそれが本職じゃからな」

スーチの冗談にアルマが笑う。だが彼女の笑い声には元気がない。無理をしているのが見え見えだ。このままではまた彼女が落ち込んでしまうのでは……とスーチが思った矢先だった。いきなりイオが尋ねた。

「なあアルマ、あの店で何かかっぱらったらあの親父どうするんだ？」

アルマは驚いてイオの顔を見る。

「はあ？ そりゃ怒るじゃろう。そんなこと考えたくもないぞよ」

「いや、そりゃそうだが、逃げたらどうするんだ？ 追いかけてこないか？」

「もちろん追いかけてくるぞよ。村中のトロールがな」

その答えを聞いてイオがにたっと笑った。残り三人はイオの顔を訝しそうに見つめる。

「何がおかしいのじゃ？」

アルマの問いにイオは答えた。

「いや、あいつらに追っかけられるってことはさ、それって一緒に来てもらってるってことだよな？」

「は？」

一瞬残りの三人はぽかんとした。次いでイオの言わんとすることが理解できてきた。

「要するにトロールが追っかけて来たら、獣とかも怖がって逃げちゃうってこと？」

スーチがイオに尋ねる。イオはそれにうなずくとアルマの方を向いて言った。

「ああ。どうなんだ？ アルマ」

「そ、そりゃそうじゃが……」

アルマは目を見開いてそうなった場合のことを考えているようだ。

「それに奴らって多分領域の外までは追ってこないよな？」

「……確かにそうじゃ。でも奴らは結構足が速いぞよ」

「全力で走っても追いつかれるか？」

「そこまでではないが……奴らのスタミナは化け物じみておるのじゃ」

「じゃあさ、そこの店で疲労回復薬をたくさん万引きしてさ、そいつを飲みながら逃げたらどうだろう？」

それを聞いてアルマは驚いたようにイオを見つめて、それから下を向いてぶつぶつと何か考え込み始めた。

しばらくして彼女は顔を上げると言った。

「これは……いけるかも知れぬぞよ」

三人は顔を見合わせた。

「本当か？」

イオが得意満面といった笑みを浮かべる。それを見てアルマは言った。

「じゃがそうなるらと疲労回復薬の他にびっくり玉も必要じゃな。裂け目を越えるには必要であろう」

「裂け目って？」

イオが尋ねるとアルマは説明を始めた。

「ああ、この領域の境界部には深い裂け目があるのじゃ。そこを飛び越えねばならんのじゃが、それにはイオ殿に大ジャンプの魔法をかけてもらわねばならんのじゃ」

「ああ？ あれか？ でも今のレベルだとそんなに長い間は効かないけど」

「なに、裂け目を越えるだけならそれで十分じゃ。じゃが、後ろからトロールが迫って来ている状況じゃ。奴らを足止めできねば呪文を詠唱できぬであろう？」

「ああ、そうだね、それにびっくり玉ってのをを使うのか？」

「そうじゃ。びっくり玉はもの凄いな音と光を出すのじゃ。あ奴らは意外に小心じゃから、詠唱時間程度ならば十分稼げるであろうぞ」

そう言ったらアルマは三人の顔を見た。

「よっしゃ。それじゃまあ行ってみるか？」

ウォンの言葉に一行は立ち上がると、更に細かい手はずを決める。それが決まると一同顔を見合わせ、それから雑貨屋に押し入った。

〈第10章〉 フェニックス

それから30分後、四人は暗闇の中を全力で走り続けていた。

「アルマ！ まだなの？」

スーチの疲労はかなりのようだ。

「もうすぐじゃが、薬はもうないのかえ？」

「さっきので使っちゃった！」

「喋れるぐらいなら大丈夫じゃ。もう一息じゃ」

先頭を走るアルマが松明を振り回しながら叫ぶ。今ここで止まるわけには行かない。もちろんそれはみんな分かっている。何しろ後方からはトロールの団体様がやってくるのだ。肩越しに見ると松明が軽く数十個は見える。ちょっと今の状況ではお近づきにはなりたくない。

それからどのぐらい走り続けたのだろうか。スーチだけでなくウォンやイオもそろそろ限界だと思えた頃、先頭のアルマが急に立ち止まった。三人も慌てて走るのを止める。見ると目の前は断崖になっていて、深い谷間が行く手を遮っている。遙か下の方で急流が渦巻いているのが微かに見える。

「ああ！ よかった！」

スーチが息を切らせながら歓喜の声を挙げた。だが喜んでばかりはいられない。アルマは対岸を指さして叫んだ。

「よし！ 目標はあそこじゃ！ ウォン、まずは奴らを！」

「おっしゃ！」

それを聞いたウォンは懐からびっくり玉を取り出す。見かけは大きめの手榴弾というところだ。懐の内部でごろごろして邪魔だったが、これでやっとおさらばだ！ そう思いながらウォンはびっくり玉のピンを抜くと、思いっきり後方に向かって投げた。

玉はしばらく弧を描いて飛んでいたが、やがて空中で大爆発を起こした。それを見てウォン達まで腰を抜かしそうになった。

なにしろそのサイズからして彼らは大型の花火程度だと思っていたのだ。ところがどうだ？ この爆発の規模は小型の核爆弾並だ！

「うわああ！」

「きゃああああ！」

三人は慌てて体をかばう。だがそれを見てアルマが叫んだ。

「何を呆けておる！ イオ殿！ 呪文を！」

「お、おお！」

そう言ってイオが何かつぶやき始める。

その時にはウォンやスーチも気づいていた。あれほどの音や光がしたというのに、爆風はやってきていない。これは物理的な実体のある爆発ではないのだ。

しかし後方のトロール達はそれで大混乱を起こしたようだった。

「よし！ いいぞ！」

アルマが拳を握りしめながら叫んだ。だがトロールのうちの何人かが混乱にもめげずに突進し

てくるのが見えた。

《げ！ やばい》

それを見てウォンとアルマは目配せしあうと剣の柄を握った。最悪の場合はこれを使う羽目になるかも……そう思った時だった。急に四人の体が軽くなった。イオの魔法が効いたのだ。こうなれば前の峡谷を飛び越えるのは簡単だ。

「このレベルじゃ20秒しか持たないぞ！」

イオが叫ぶ。だがもちろんみんなこの程度のことには慣れている。一人一人落ち着いて谷を飛び越えていった。

対岸に着いてから振り返ると、今まで彼らがいた場所にトロールが何匹か集まって彼らに向かって吼えているのが見えた。

「けっ！ バーカ」

もはや手を出せないと思ってウォンは舌を出して挑発した。だが途端にアルマがウォンの襟を掴むと地面に引きずり倒した。

「こら！ 馬鹿者！」

「何しやが……」

ウォンはアルマに食ってかかろうとした。だがそれ以上文句は言えなかった。何しろ今までウォンがいた所に、細長く伸びて大口を開けたトロールの首がぱっくりと食いついていたのだから。

「ひええええ！」

「逃げるのじゃ！」

ウォンは慌ててアルマの後を追った。その後を追うようにトロールの首が追いかけてきたが、ぎりぎりのところで範囲をはずれたようだ。ウォンの後ろでげふっと嫌な音を立ててトロールの口が閉じる。

だがさすがに今度はウォンもからかう気にはならなかった。

そこからさらにしばらく走って、やっと一行は立ち止まると地面にへたり込んだ。

「なんて首だよ」

「だから言ったであろうが！ 気色悪いと」

「あの距離を届くのかよ？」

「そうじゃ！ おのれはもう少しで喰われる所だったのじゃ」

そう言われてさすがにウォンも返す言葉がなかった。

それを見ながらスーチが言った。

「ともかくちょっと休ませて」

「ああ、そうじゃな。ここでしばし体力を回復させようぞ」

そう言ってアルマも座り込んだ。

「ああ？ 時間は？ 急がなくていいのか？」

ウォンの言葉にアルマが行く手を指さしながら答えた。

「これからあそこを登らねばならんのじゃぞ。へ口へ口では落ちてしまうじゃろうが」

ウォンはアルマの指した方を見て少しげんなりした。それまでは視界が悪くて見えなかったのだが、今ははっきりと月光の中にフェニックスの住処であるノートス高地を囲む絶壁がそびえ立っているのが見て取れる。

「げえ、あの上かよ」

「そうじゃ。怖じ気づいたか？」

「誰が！」

「それと村からここまで思いっきり走ったせいで、予定より30分は早く来ておるのじゃ。焦ることはないわ」

「なるほどね」

それを聞いてウォンも地面に座った。実際彼もかなり疲れていたのは間違いない。一行はしばらくそうして星空を眺めていた。

その時スーチが息を呑んだ。イオもウォンも同時にそれを見ていた。絶壁の上をすうっときらきら輝く物が飛んでいったのだ。

「あれがそうじゃ」

一行は黙ってうなずいた。

「この先は敵は出ないのか？」

イオが確認する。

「ああ。夜ならば大丈夫じゃ。昼じゃとハーピーがいてうるさいがな。奴らは鳥目ののじゃ」

それを聞いてウォンが言った。

「フェニックスは鳥目じゃないのかよ？」

「さあな。だったとしても自分の光でいつも明るいから関係ないのであろう」

「なるほどね。やな野郎だ」

ここに来て一行はこの“裏技”が修正されずに残された理由を身をもって感じていた。そもそもアルマの案内がなければここに来ること自体が不可能だった。闇の街ペルナタウンの脱出は彼女が裏道や敵の属性を熟知していたからこそ可能だった。今のトロール居住地の突破も同様だ。少々予定外のことはあったとはいえ、そもそもこのポイントで対岸に渡れることを知らなければそんなことをしようとさえ思わなかっただろう。

「さて、そろそろ行くかや？」

アルマの言葉に、残り三人は黙って立ち上がって歩き始めた。絶壁まではかなりあるように見えたのだが、実際に歩いて見ると思いの外早くたどり着いた。

絶壁の下から見上げながらアルマが言った。

「ここは落ち着いて登れば大したことはないのじゃ。登攀道具なども一応買ってはおるが、ほとんど使うこともないじゃろうな。でもイオ殿、重力低下の魔法の準備だけはしていて欲しいのじゃ」

「ああ。まかせとけ」

「それでは行くぞよ」

そう言ってアルマは崖を登り始めた。残りの三人も彼女の後に続く。

こういった崖登りというのはちょっと難しいゲームなら当たり前のように出てくる障害だ。だ

から登攀その物には全く困難はなかった。それどころかその崖が見かけほど急ではなく手がかりも豊富だったことが分かるに連れて、みんな余裕が出てきたぐらいだ。

「明るければ景色はいいのかしら？」

スーチがアルマに尋ねる。

「ああ。南の大陸が一望にはできるがな。じゃが多分ハーピー共につきまとわれてそんな余裕はないぞよ」

「あはは、そうね」

今は夜だ。眼下は漆黒の闇に閉ざされている。トロールの村と思わしき方向に、かがり火らしき物が見えるだけだ。そんな中を登り続けていたので、その距離は非常に長く感じられた。下からざっと目測した限りでは100メートル前後だったろうか？この程度なら20～30分あれば登れるはずなのだが。

「まだか？」

ウォンがとうとうしびれを切らしてアルマに尋ねた。

「もうすぐそこじゃ。上が見えておる」

ウォンも目を凝らすと、絶壁の上端のシルエットを見て取ることができた。

アルマは最後の部分を器用な身のこなしで上がっていく。彼女は最上端まで行って、ちょっと上に顔を出し、それからすぐ慌てたように頭を引っ込めた。

「おお！結構近くにおったな」

「見つかったのか？」

「いや、大丈夫じゃ。ぬしらも上がってくるが良い」

ウォンはそこまで来ていたイオとスーチに目配せする。二人は黙ってうなづく。それからスーチが先頭になって登り始めた。

「スー殿、そこが良いぞ。一番飛び出しやすい」

「ありがと」

アルマがスーチとイオに隠れ場所を指示する。まず彼らの行動の成否が全体の成功に大きく関わっているのだ。出だしで文字通りにつまづかれては洒落にならない。

それからウォンも上がってきて、アルマの横に並ぶ。一行は崖の縁から怖々頭を出す。ノートス高地と言うだけあって、絶壁の上はあちこちに小さな尖峰やクレバスなどがあるものの、おおむね平地になっている。

「あ！右の奥手を飛んでる」

「うひょー。綺麗な奴だね」

夜空を飛ぶフェニックスとはなかなか見られない光景だ。こういうことがあるからゲームはやめられないのだ。たとえそれが人工的な創造物であっても。いやこの時代ではそれが人工物が自然物かという区別その物がほとんど意味を為さなくなっていた。

少なくとも彼らの前を飛翔しているフェニックスが一つの芸術作品であることは間違いない。

「時間は？」

イオの問いにアルマが答える。

「30分は余裕があるぞよ」

そしてアルマは後から付いてきていたカイに向かって尋ねた。

「で、カイ、そっちの方はどうじゃ？」

もちろん彼も今までずっと付いてきていたが、話していると腹が立ってくるだけなので、たまに状況を尋ねる時以外はみんなずっと無視していた。

「こっちも順調だぜ。ほぼ予定通り突入できるさ」

「はあ、そうかい」

それを聞いて一行は複雑な気持ちだった。だがここまで来た以上後はやるしかない。しばらくの間四人は黙って時を待った。その沈黙を破ったのはスーチだった。

「これって何だかまるでいつもと同じね」

それを聞いてウォンが訊き返す。

「いつもって？」

「ほら、例えばこの間のエルガストルムへの突入待ちしてた時と同じよね」

「ああ？ まあそうだな。あん時も余裕なかったしな」

「でも結局うまくいったじゃない」

そんな二人の会話を聞きながらイオが言う。

「おい、命がかかってるんだぞ。もっと緊張した方がいいんじゃないか？」

「って言われてもなあ……こう言うのっていつだって命がけじゃん」

ウォンの答えにイオもあまり反論できなかった。彼もまた同じだったのだ。

彼らは皆これから文字通りに“命がけ”の勝負に出ようとしていることを、頭の中では理解していた。だがそう言われても誰も本当の危機感を感じてはいなかったのだ。最初のうちはもっと緊張しようと努力したぐらいなのだ。だがなぜか気づいたらやっぱりいつもの調子になっているのだ。

そもそも“命がけの勝負”などというシチュエーションは彼らの大好きなNSEゲームの中ではいつだって出てくる代物だった。彼らは、最も経験が浅いスーチでさえ既に何十回もそんな勝負をしてきている。もちろんその勝負で本当に命がかかっていたわけではない。それは仮想現実の上の話なのだ。死んだって何度でもやり直せる。だからこそ気楽に命を張っていられたのだ。

しかし今回は違う。死はすなわち真の死を意味し、失敗は破滅を意味する。そのことは皆百も承知だ。なのに彼らはそれを信じるができなかった。死だの破滅だのと言われても、彼らはそれをうんざりするほど経験してきているのだ。まさにオオカミ少年状態だ。今度ばかりはいつもと違うとか言われても、はっきり言って全然ぴんと来ないのだ。

その代わりに彼らを感じていたのはこれが掛け値なしに徐々に熱くなれそうなシチュエーションだということだった。

『へえ、おもしろそうじゃん』

それはアルマが“裏技”に関する説明を終えたとき、最初にウォンが発した科白だ。結局彼にとってこれは単に面白そうな状況に過ぎなかった。アルマはそれに対して苦言を呈した。だがそれはイオにとってもスーチにとっても、そして実のところアルマ自身にとっても同様だったのだ。

アルマはウォンとイオに向かって話しかけた。

「そう言えば二人に言うておくことがあったのじゃ」

二人はアルマの顔を見た。ウォンが訊き返す。

「なんだ？ いきなりあらたまって？」

「聞けばうぬらはフリーダムバケーションをゲーム三昧で過ごしたそうじゃな？」

それを聞いて二人が赤くなる。フリーダムバケーションとは前にも述べた通り、義務教育を終えた物に連邦から与えられる特別な期間だ。これをゲームなどに費やしてしまうというのは、例えて言えば卒業祝いにもらったお金で駄菓子や部屋一杯買い込んで食べていたのと同じぐらい間抜けな行為と思っいい。

「え？ あはは！ 何のことかな？」

イオは慌ててごまかそうとする。だがアルマは不思議な笑みを浮かべながら言った。

「この間スー殿から教えてもらったのじゃ」

それは二人をからかっている口調ではなかった。それからアルマはイオとウォンの顔を交互に眺めながら微笑み続ける。ウォンもイオも、それにスーチも彼女の笑顔の真意を図りかねた。

「な、なんだよ。好きなことしてたんだからいいじゃねえかよ。お前には関係ないだろ？」

「いや、違うのじゃ。実はな、妾もそうだったのじゃ」

「ああ？」

三人は驚いてアルマの顔を見た。今度はアルマの方が少し恥ずかしそうに下を向く。

「妾もな、期間中はずっとロクス・エテルナをやっておったのじゃ。じゃから妾は今までベレンを出たことが一度もないのじゃ。で、ぬしらはまあその、あまり他人事とは思えんでな」

アルマがそう言うとスーチが驚いたように言った。

「ええ？ じゃあアルマもそうだったの？」

「ん？ どうしてじゃ？」

アルマが驚いて顔を上げると、スーチがアルマの手を取って言った。

「だって、あたしもそうだったもの」

「え？」

今度はアルマが驚きの表情でスーチを見やる。だがスーチはいたってまじめな顔だ。それを見てウォン達もにやにやしている。

驚いているアルマにスーチは言った。

「あたしもね、フリーダムバケーションの間ずっとゲームしてたのよ。ユディ族のスキンを作るためって建前はあったけど。でも本当はね、そっちの方が面白かったから」

「なんと！ スー殿もかや？」

そして四人は互いに顔を見合わせて吹き出した。

ここに奇妙な四人が集まっている。一人一人の生まれや生い立ちはおろか、種族までもが異なっている。そんな時間も空間も遠く離れた所で生まれた四人が今この不思議な場所で圧倒的な一体感で結ばれているのだから。

これはもう奇跡と呼んでも良いのかもしれない。ただその四人を結びつけていた絆が、救いがたいゲームバカという絆だったのは、ちょっと何だったわけだが……

そうこうしているうちに時が満ちた。

「そろそろよ。イオ」

スーチがささやいた。心なしか声が震えている。

「スー殿、大丈夫かや？」

それを察してアルマがスーチにささやいた。

「大丈夫よ。大仕事するときはずっとこの調子。気にしないで」

「ああ。スーの言う通りだぜ。こいつも最近結構修羅場くぐってるからな」

それを聞いたウォンも太鼓判を押す。

「ともかく変なところでこけたりするなよ」

「それはイオもね」

計画の最初の頃は、ある意味スーチが一番気楽な立場だった。このメンバーの中では彼女が一番先輩であったし、自分で言い出そうと言い出すまいと死に役の一人は彼女に決まりのようなものだったからだ。死ぬというのはその瞬間だけは嫌な気分がするだけで、その後はどうということもない。だから彼女もこれを実行するよう強く推したのだ。もちろん彼女が体験したことがあったのはバーチャルな死亡だけだったわけだが。

だが彼女とイオの死に役が意外に重要だということを知って、今では若干後悔をしていたりもしていた。

「それではもう一度確認するぞよ。フェニックスがあのとがった岩の上を通り過ぎたら妾が合図する故、スー殿は飛び出してあの三角の岩に向かって全力で走るのじゃ。それからイオ殿はスー殿の後ろから10メートル程離れて走るのじゃ。岩の手前の足場の良い所を何としても確保するのじゃ」

アルマの言葉にイオとスーチはうなづく。

「大丈夫よ」

「任しとけ」

それを聞いてアルマは二人の手を取って言った。

「二人とも、頼むぞよ」

二人は黙ってうなずいた。それからイオがウォンの方を見て言った。

「じゃあ後頼むぜ」

「おうよ」

ウォンも特に気負いなく答える。こんな風に後を頼まれることは今まで何度もあったことだから、あまり今回が特別という気はしなかった。

「じゃあ始めるぞよ」

そう言ってアルマは岩陰から頭を出してこっそりとフェニックスの様子を窺った。フェニックスは悠々と上空を旋回している。そのルートは複雑なようだが、彼女はそれがどういう軌道になっているのかを理解しているようだ。

「そろそろじゃ。二人とも良いか？」

スーチとイオは息を呑んだ。さすがにこうなると緊張してくる。

フェニックスがゆっくりと周回して近寄ってくる。それから旋回して前方のとがった岩の上を通り過ぎた。

「今じゃ！」

アルマの指示と同時にスーチは飛び上がると脱兎のごとく駆けだした。それを追うようにイオも駆け出していく。

その時スーチとイオはフェニックスの姿を始めて間近に見た。

《きれい！》

スーチは思った。

その姿は人の想像力が創り出したものに過ぎないとわかっていても、その毅然とした姿はいかにも世界を支配する王者にふさわしかった。彼女はその姿をずっと見ていたかった。

だがフェニックスは走ってくる二人に気づいたようだ。途端にその輝きが増してくる。これが噂のスーパーノヴァという奴に違いない。

「もうちょっとだ！」

イオが叫ぶ。二人は最後の力を振り絞って走った。

それから目の前が真っ白になったと思った瞬間、それ以上は何も分からなくなった。



「隠れよ！」

アルマが岩陰に身を隠し、なおかつべたっと地面に身を伏せる。ウォンもすぐに彼女の真似をする。

それと同時に目を閉じていても分かるような凄まじい閃光が輝いた。一瞬遅れてからずどーんと激しい音が響きわたる。同時に熱風が二人を包みこむ。

「ぐああ！ あちち！」

「我慢せい！ 死にやせん！」

思わず呻いたウォンをアルマが小声で制する。今度の爆発はさっきのびっくり玉とはわけが違った。熱風が収まった後も二人はしばらく動く勇気が出なかった。

「ど、どうなった？」

しばらくしてウォンがつぶやくとアルマも恐る恐るといった様子で頭を出す。それからウォンに手招きした。ウォンがその下から顔を出すと、フェニックスは相変わらず悠々と上空を旋回している。その下には真っ黒な消し炭のような塊が二つ転がっているのが見える。

「ひでえ！」

ウォンは思わずつぶやいた。

「でも言うたとおりであろう？」

そう言ってアルマはフェニックスを指さした。

「ああ。本当だ。あの場所でいいのか？」

「十分じゃ」

フェニックスはそれまでの軌道と違って、今は元スーチとイオであった消し炭の上をゆうゆうと周回している。これは簡単に死体を復活させられないようにするためだという。

「ふん。何でか知らないけど、不死の輩のくせにずいぶんせこい奴だな」

「ぐだぐだ抜かすな。妾が合図したら行くのじゃ。良いな？」

「ああ。いいぜ」

それからアルマはじっとフェニックスを睨んだ。フェニックスは相変わらず悠々と夜空を旋回している。

だがアルマはなかなか合図を出さない。ウォンは不思議に思ってアルマの肩に手をかけた。

「おい、どうしたんだよ？」

だがその時ウォンはアルマががたがた震えているのを感じ取った。

「す、すまぬ。さすがに緊張してな、体の震えが止まらぬのじゃ……」

「お前なあ、こんな時に……」

アルマは何度も深呼吸するが、やはり震えは止まらない。それを見てウォンの方が焦ってきた。ここで彼女がパニックになってしまったら全てが水の泡なのではないのか？

《おい、どうするよ？》

ウォンは自分に問いかけた。このまま放っというていいのだろうか？ この程度ならそれで問題ないはずだ。アルマだって素人じゃない。そのうち立ち直るだろう……だが今、イオとスーチは文字通りに死んでいるのだ！ 30分ぐらいの間なら問題なく蘇生できるとはいえ、それでも一刻一秒を争う状況であることには間違いないのだ。やはりゆっくり待っていては間に合わないかもしれない……ならばどうすればいいのだ？

だが考えてもまともな回答は出てこない。一つだけとんでもなく下らないネタだけは出てきたが……

《バカ野郎！ 冗談やってる場合じゃねえぞ？》

ウォンは首を振った。でもこのまま時間を浪費するわけにはいかない。

《大体そんなところ見られたりしたら……》

そう思った瞬間、ウォンは彼の行動を見ている物など誰もいないことに思い当たった。誰も見てくれていないからこそ彼らはこんな苦勞をしているのだ。それに気づいた途端ウォンは気が大きくなった。

そしてアルマの肩に手をかけると言った。

「緊張を解くおまじないしてやるぜ」

「な、何じゃ？」

アルマが驚いて振り返る。ウォンはそれには答えず、彼女の両肩を抱き寄せてキスをしようとしたが……なぜかそれは壮絶な鼻と鼻の激突という結果に終わってしまった。

「な、何をするか！ 痛いではないか！」

アルマが鼻を押さえながらウォンに張り手を食らわす。

「い、痛えな！ 何しやがる！」

ウォンが頬を押さえながらアルマに食ってかかろうとすると、アルマはウォンを地面に押しえつけながら言った。

「黙れ！ 見つかるではないか！」

「お前がやったんだろ！」

反射的に立ち上がりそうになったウォンを、今度はアルマが全身で押さえつけた。その結果アルマはウォンに馬乗りになって押し倒したような格好になってしまった。ウォンの目の前に彼女の胸の谷間が間近に見える。ウォンは目のやり場に困ったが、その時彼女がもう震えていないことに気がついた

そこで彼はその格好のまま言った。

「で、震えは収まったか？」

アルマはたっぷり3秒ほどウォンの顔を見つめて、それから慌てたように彼から離れた。

「どうやら直ったようじゃ」

それから彼女は何事もなかったかのように、再び頭を出してフェニックスに注意を向けた。

「あ奴が背を向けたら行くぞよ」

「おお」

それから5秒後、二人は一気に飛び出した。

フェニックスはすぐに彼らに気づいたようだ。方向を変えると、彼らの方に急降下を始めた。だが明るくはならない。予定通りだ。

それを確認すると二人は剣を抜き放つ。

「そこじゃ！ 一直線になるようにな！」

「おお！」

アルマとウォンはスーチとイオの死体を結ぶライン上に立って剣を構える。フェニックスはきっちりとそのライン上を通過して彼らに突っ込んできた。

ウォンはアルマの説明を思いだしていた。

『フェニックスの奴はな、攻撃を始めてもまだ死体にこだわるのじゃ。そのため攻撃する経路が決まってくるのじゃ。位置がばらばらの場合は、なんだかややこしいそうじゃが、死体が一直線に並んでおればその直線上を通過して攻撃してくるのじゃ』

だからこそスーチとイオの死に方が重要だったのだ。彼らがうまい位置で死んでくれていれば、フェニックスのやってくる経路が制限されて、二人の攻撃が非常にやりやすくなるのだ。

だがこれは“やりやすい”というよりは“できなくはない”という言い方が妥当だった。剣を構えたウォンの側をフェニックスがものすごいスピードで通り抜けていく。

「うへえ！」

その瞬間アルマは何とか一太刀食らわしていたが、ウォンは避けるだけで精一杯だった。

「やったか？」

アルマが振り返らずに言う。

「すまん。しくった」

「なんじゃと？」

「最初は練習だよ。な？」

「じゃあ次回からが本番じゃぞ？」

「わかってらって」

だがそう言いつつウォンはちょっと自信がなくなってきた。あのスピードは半端ではないのでは？

アルマはウォンの不安を感じ取ったのか、こういうこと言いだした。

「うまいこと当てたら、褒美にもっと上手なキスをくれてやるわ」

それを聞いてウォンはずっこけそうになった。

「何をしておるか？」

「あのなあ、こんな時に冗談抜かしてるんじゃないよ！」

だがアルマは振り返らずに答える。

「ほう？ いらぬのか？」

「……もらえる物はもらっとくがな」

そう言いながらウォンはすっかりやる気満々になっているのに気がついた。ウォンは常々自分のことを決して複雑な人間だとは思っていなかった。だがこんなことでこんなにやる気が出るなんてちょっと単純すぎないか？ という気もしたが、まあアルマだってさっきのキスもどきで平静を取り戻したりして、単純さという意味では同類かもしれない……などと考えている暇はなかった。

フェニックスは彼らの横を大回りすると、また最初の位置に戻ってさっきと同じ経路で降下を始めた。経路とタイミングが分かっているかどうかわからない自信がない速さだ。もし毎回でたらめな方向から突っ込まれたらもはやお手上げだったろう。

《イオ！ スー！ お前らの死は無駄になってないぜ！》

ウォンはフェニックスに精神を集中した。フェニックスが一気に大きくなってくる。

《今だ！》

ウォンは横に弾け飛びながら剣を振った。手応えがある！

「やったぜ！」

「まことか？」

そしてすぐにアルマが懐から生命力ゲージを取りだした。スーチの特殊能力のせいで買うことができたあれだ。彼女がそれ越しにフェニックスを見ると、嬉しそうに言った。

「確かに減っておるぞよ！」

それを聞いてウォンもほっとした。うまくいきつつあるのだ。

「で、どのくらい減ってるんだ？」

「これは…… 1割程か？」

ウォンは天を仰いだ。

「1回で1割？ じゃああと9回も当てないといけないのかよ？」

「そういうことじゃな」

「お前確か6回ぐらいって言ってなかったか？」

「あの時はレベルが4じゃったと言ったであろうが！」

ウォンは気が遠くなってきた。これはかなりきわどい勝負だ。決して手が出ないと言うわけでもないが、一步間違えたら体ごと持って行かれそう。これをあと9回も間違えずに繰り返せるのだろうか。

だがくよくよ考えている暇はない。フェニックスは再び飛来しようとしている。

「来るぞよ！」

「おう！」

ウォンはともかくフェニックスに全神経を集中する。そしてすれ違いざま思い切り剣を振ったが、今度は身を引くタイミングが少し遅すぎた。

「うわ！」

ウォンの肩に激痛が走った。フェニックスの尾羽がちょっとかすっただけだったのに。

「大丈夫かや？」

呻き声を聞いて慌ててアルマが振り向く。みるとウォンの肩からかなりの血が噴き出している。

「この程度どうってことないぜ」

ウォンは強がったがこれは決して軽い傷ではない。だが今この程度で治療しているわけにもいかない。

「気を抜くでないぞ。尾羽でこれじゃ。あのくちばしだの爪だのに引っかけられたら、簡単に手足が吹っ飛ばされるぞよ」

アルマの表情は真剣だ。

「わかってらって」

ウォンもうなずいた。これはあらゆる意味で本気でかからねばならない状況だ。

だが彼は焦りは感じていなかった。なぜなら彼はこのぐらいの敵ならば今まで何度も渡り合ったことがあったからだ。今の交錯でウォンは、落ち着いて戦ってさえいれば決して手が出ない相手ではないことを肌で感じ取っていた。もちろんここまでせっぱ詰まった状況だったことはなかったのだが。

「また回ってきたぞよ！」

「おう！」

ウォンは再び剣を構えてフェニックスに集中した。フェニックスが飛来する。アルマがフェニックスを斬り、間髪を入れずにウォンが再度斬りこむ。フェニックスは一瞬で通り過ぎ、またすぐに体勢を立て直してやってくる。二人はまた剣を構え……このようにして二人はひたすらにフェニックスの生命力を削り続けた。

そのうちそれは果てしなく続く作業のような気がしてきた。なにしろ二人が共に攻撃を当てなければならないのだ。どちらかがしくじっただけでその回は無効なのである。なんだかんだで成功する率は5割もいかない感じだ。

ウォンは最初の頃こそ回数を数えていたが、10回を超えたあたりからはもう何回やったか分からなくなってしまった。アルマが生命力ゲージを欲しがったのも当然だ。

「今のはちょっと浅かったか？ あと、どのぐらいだ？」

ウォンは喘ぎながら訊いた。アルマが同様に喘ぎながら生命力ゲージでフェニックスの残り体力を調べる。

「あと、3割ほどじゃ」

二人は荒い息をしながら剣を構え直す。残り3割……マラソンなどで言えば最もきついのがこれからだ。

果たして次の攻撃は二人ともしくじってしまった。

「おのれ！」

アルマが毒づく。あれから羽にかすられるようなことはなかったが、二人ともそろそろ緊張の限界に達しつつあった。普通だったらここでちょっと一休みしたりするのが正しい判断なのだが、今そんな時間があるはずない。ウォンは一応ここでは僧侶だったので緊張を解く魔法も使えたりはするのだが、怪我をした時のことを考えると精神力を迂闊に消費するわけにはいかなかった。

「あと三発当てりゃいいんだ！ がんばれよ！」

口での応援しかできないのは歯がゆいが、仕方ない物は仕方ない。

後から考えればこの時無理してでも緊張緩和呪文を唱えておけば良かったのかもしれない。もちろん後からなら何とでも言えるわけだが。

フェニックスはまた同じ経路を描いて急降下を開始した。それを見てアルマが身構える。だがその構えを見てウォンは何か不安を感じた。それは彼がインストラクターとして長年やってきた経験から得られる勘だったのだろう。こういうときに得てして大事故が起こるのだが……

果たしてその勘は当たっていた。アルマは疲れてきていた。また捗らぬ作業に少々焦ってもいた。そのため突っ込むのが少々早すぎた。彼女はそこで逃げておけば良かったのだが、また1ラウンド失うのが惜しかった。アルマはバランスを崩しながらもフェニックスに一太刀入れた。

だがフェニックスはそんな状態で相手できるほど甘い敵ではない。彼女が気づいたときはフェニックスの爪が胴体に食い込み、次いで体は宙にはじき飛ばされていた。

その姿はウォンの目の隅にも入った。

《やべえ！》

そう思った物の、もはや退くことはできないタイミングだ。彼は既にフェニックスの経路に沿って思いっきり剣を振った後だった。そこに爪に引っかけられたアルマが吹っ飛んできたのだ。アルマはウォンの構えた剣にもろにぶち当たり、ウォンの手にぎっくりと肉が断たれる感触が伝わってくる。

《やっちゃまった！》

ウォンは剣を放り出すと慌ててアルマのそばに駆け寄った。見ると彼女は肩口から腹にかけてがぱっくりと割れて口から真っ赤な泡を吐いている。かなり危険な状況だ。

「あ、す、すまん」

それはこういうときのセリフとしては最高級に間抜けだったが、もちろんもっと気の利いたセリフを考える余裕などない。

アルマはフェニックスの爪とウォンの剣のダブルパンチを食らって、もう動けそうもない。

「アルマ！」

アルマは弱々しくウォンの顔を見ると、口をぱくぱくさせた。何かいおうとしているらしいが、肺が傷つけられているせいか声にならない。アルマは力無く手を持ち上げようとする。

「しっかりしろよ」

そう言いながらウォンはアルマの手を取った。とにかく彼女の治療をしなければならない。だがウォンの知っている魔法では治療効果は知れている上、時間もかかる。薬の類はここに来るま

でに使い果たしている。

その時アルマは口をぱくぱくさせながら、ウォンの手を自分の胸に引き寄せた。

「おい！ 何やってるんだよ、そんな場合かよ！」

こんな状況でなければ、ある意味非常に嬉しい行為のような気はするが……

そしてウォンは心を決めた。彼は治療魔法を唱え始めた。この期に及んで役に立つかどうか分からない。だがこのまま滅び去るよりはなんぼかましだろう。

だがそういうウォンをあざ笑うかのようにフェニックスが襲いかかって来る。

《くそ！ やられる！》

ウォンはアルマに覆い被さった。

だがその途端アルマがウォンを突き飛ばしたのだ。不意を突かれたウォンはひっくり返って近くの凹みに転がり込んでしまったのだが、そのためフェニックスの攻撃を避けることができた。だが最後の力を使い果たしたアルマはそうではなかった。彼女は再度フェニックスの爪に引っかけられるとまた10メートルばかり吹っ飛ばされて、もはやぴくりとも動かなくなった。

「ええ？」

ウォンは慌ててアルマの元に駆け寄る。

「アルマ！」

だが彼女は何も答えない。

「おい！ アルマ！ ふざけんじゃねえ！」

だが彼女は何も答えない。その目にはもう輝きは失われている。

それが何を意味するかはもはや明白だった。そう。ゲームオーバーだ。彼らの力は及ばなかったのだ。残された彼一人ではもはや何もできない。イオとスーチはやっぱり無駄死にだったのだ。

ウォンは振り返った。遠くの方にカイが幽霊のように浮かんでいるのが見える。

《あとはあの野郎が成功するのを待つしかないのかよ？》

そう思った途端ウォンの心の底から真っ赤な怒りがわき上がってきた。

《こん畜生が！》

ウォンは立ち上がると剣を構えた。

希望だの何だのといったことはもうどうでもよかった。二人掛かりでなければこの相手にはダメージを与えられないといったこともすっかり忘れ果てていた。ウォンはとにかく相手に一発入れることしか考えていなかった。

そんなウォンの想いとは裏腹に、全く無感動な様子でフェニックスは突入してくる。

「く・た・ば・り・やがれえええ！」

かすれたようなウォンの声が虚空に響く。ウォンの剣が一閃する。ざっくりとした手応えがある。すごい力で剣が引きずられたがウォンはそれに食らいついた。普通の相手ならただでは済まないはずの手応えだ。

だが相手はフェニックスだ。次の瞬間にはまた元通りぴんぴんしているだろう。

《だったらどうだって？ 何度でもぶっ殺してやる！》

ウォンは再び剣を構え直す。もはや理屈もへったくれもなかった。来た奴をぶった斬る、ただそれだけだ。

ウォンは待った。もう少ししたらフェニックスはまたあの岩陰から出てくるはずだ。そいつに対して彼の剣を叩き込んでやるのだ。それが無駄だろうと何だろうともう関係ない。力尽きるまでぶった切りまくってやる！ウォンの頭の中はもうそれだけだった。

「はやく来やがれ！」

ウォンは叫んだ。フェニックスの奴は一体何をしているのだ？いつもならさっさとやってくるはずなのに……だがなぜか次の攻撃はやってこない。ウォンは何かがおかしいことに気が付いた。

《え？》

そのときあたりが急に明るさを増し始めたのだ。ウォンが振り返るとフェニックスが全然違うところをふらふらと飛んでいるのが見えた。そしてその明るさがどんどん増しているのだ。

「なに？スーパーノヴァか？」

ウォンは慌てて隠れるところを探した。だがそれはもはや手遅れだった。彼らは戦いやすいようにと広くて障害物の少ないこの場所を選んだのだ。ここからでは一番近い岩陰でもずっと先だ。だが輝きはもう目も眩むばかりとなっている。ウォンはそのままがっくりと膝をついた。

これでパーティーは全滅である。ベラトリックスのゲームオーバーシーンとはどんな物なのだろう？ウォンはそう考えたがすぐにこれから死ぬのだからそんな物は見られないことに気がついた。

ウォンは吹き出した。終わりとはこんな物なのだ。もちろん彼は数え切れないほどのゲームオーバーを体験している。少なくともやることはやったということで、これはその中ではかなりましな方ではないだろうか？

ウォンはそんなことを想いながら最期の時を待った。だがなかなかそれはやってこない。大体フェニックスの輝きは増すのに、熱さがぜんぜんないのだ。さっきは岩の陰でも熱風に焼かれたというのに。それとも彼はもう死んでしまったのだろうか？

《おい、まだかよ？》

そう思った瞬間だった。今度は急にフェニックスの輝きが薄れていったと思うと、その姿がかり消すように消えてしまったのだ。あとから、一枚の羽がひらひらと落ちてくる。

「なんだ？こりゃ？」

ウォンは呆然とそれを手に取った。その羽は彼の手の中で七色に輝いている。

それこそがベラトリックスをプレイした者なら誰でも喉から手が出るほど欲しがったというレアアイテム“フェニックスの羽”だったのだが、今のウォンにとってはどうでもよいものだった。

彼は未だに何が起こったのか良く理解していなかった。そんな彼が我に返ったのは耳元で聞き慣れた声がしたときだった。

『ありゃ？ウォン君ですか？』

この声はギメルだ！ウォンは慌てて立ち上がってあたりを見回した。だが彼の姿はない。

「どこだ？見えるのか？」

ウォンは当てずっぽうな方向に叫ぶ。すると返事が返ってきた。

『見えますけど、どこです？そこは？ダンジョンにいたんじゃないんですか？』

ウォンはがっくりと膝を落とした。このままぶっ倒れて眠ってしまいたかった。だが最後にやらなければならないことが残っている。ウォンは最後の力を振り絞って叫んだ。

「ギィ！ゲームをシャットダウンしろ！ブースにいる奴らをみんな出せ！それから外に通じる回線もみんな切れ！」

『はあ？ちょっと待って下さいよ、そんなこと……』

「うるさい！でないと死んじゃうんだよ！」

『死ぬって、いったい誰が？』

「お前だ！クラックされてるんだ！でないとカーゴが突っ込んで来るぞ！」

『はあ？あの、もっと詳しい状況を……』

だがウォンはそれ以上は答えなかった。なぜならそこでぶっ倒れて気絶してしまったからだ。

〈エピローグ〉

ウォンが次に気づいたのは見知らぬ部屋の中だった。

そこで彼が最初に思ったことは、今度はどこに飛ばされたのだろうかということだった。ゲーム中ではこんな感じで場面転換してくれることは良くある。だが妙だ。この部屋のデザインは何ともファンタジー世界には似つかわしくない。まるで病院みたいだ。いったいどういう設定なんだ？

そこまで考えたとき、もしかして彼は現実世界に戻ってきたのでは？ という可能性に行き当たった。

ウォンは体を起こした。窓の外には逆さになった極彩色ピラミッドが見える。

「まじか？」

こんなイカれた建物はルフティ・ベイの市庁舎しかあり得ない。ゲームの中の建物というのはもっと落ち着いたまともなデザインをしているに決まっている。

では本当に彼はあそこから生還したのか？ ものすごく嬉しくても良さそうなのに、なぜかそういう感情は湧いてこない。まるで夢を見ていたようだ……

その時だった。

「おお？ 目覚めておったのか？」

この声は？ ウォンは部屋の入り口を見た。そこにはアルマが立っている。

「全くおのれは心配させおって！ いきなりぶっ倒れてしまったから、死んだと思ったぞよ」

「……」

「そうしたら何じゃ？ 緊張が解けて気絶しておったじゃと？ 冗談もたいがいにせい！」

そんな元気そうなアルマを見てウォンはぼかんとして問い返した。

「お前、大丈夫だったんだ？」

「はあ？ あれはゲームであろう？ 大丈夫に決まっておろうが？」

アルマがおかしな顔でウォンを見る。言われてみれば当然だ。初めてゲームをやった初心者じゃあるまいし、こんなボケをかますなんてどうかしている。ウォンは慌てて話を逸らした。

「……はは、そりゃそうだよな。でもイオは？ スーチは？」

それを聞いてアルマはがっくりとうなだれた。

「それなんじゃが……」

「ど、どうしたんだ？ まさか……」

「何を言っておる！ 両者ともびんびんしておるわ！ 確かに20分ほど死んではおったから少々頭がぼけておるがの」

それを聞いてウォンは心の底から安堵のため息をついた。

「あのなあ！ おどかすんじゃねえ！ だったら何萎れてやがるんだよ？」

それを聞いてアルマがウォンを睨んだ。

「おのれはギィ殿にあんな剣幕で怒鳴られて平気なのかや？ もう妾は殺されるかと思ったぞよ。トロールなんぞよりよっぽど恐ろしかったわ」

ギメルは身長2メートルを優に超え、ウォンを片手で軽々と吊り上げることも朝飯前な怪力を

誇るが、異界の門では最も心優しい男だ。だから普段なら恐れることなど全くない。ただしスーチに危害が加えられるようなことさえなければの話だが。

「あはは、なるほど」

「その上にイオ殿の見舞いに行ったら、ティルナ殿にいきなり詰め寄せられたのじゃぞ！ゼノス族の大アップじゃ！フェニックスなんぞよりもっともっと恐ろしかったわ」

「あ、そ、そうか、そりゃそうかもね」

ゼノス族とはその存在自体が神のようなものなのだ。なぜイオにそんな彼女がいるのかはともかく、話しかけてもらえるだけでも畏れ多いとしたものである。

「その上じゃ！それが終わったらこんどはゼナ殿とラーン殿とミス殿に吊し上げられておったのじゃ。もう少しで大惨事になるところじゃったというてな」

それを聞いてウォンは背筋が冷たくなった。

「大惨事って……もしかしてカーゴが？」

「そうじゃ」

「ま、まじかよ？」

「結果としてはニアミスが何件かあっただけで事故はなかったそうじゃが……」

その時になってウォンは急に怖くなってきた。ではあのときフェニックスが死んでくれなければ本当にカーゴが突入してきていたのか？

「ははは！まあ、その、終わりよければって言うじゃない」

だがそれを聞いてアルマはむっとした顔でウォンを睨みつける。

「そういうわけにはいかぬであろう？」

「ああ？」

「今回はたまたま奇跡が起こったから良かったよのう？」

「奇跡？」

訳が分からないという様子のウォンにアルマがにじり寄る。

「そうじゃろう？ だいたいおのれは何であそこでフェニックスに斬りかかるのじゃ？」

ウォンはあの時のことを思い起こした。

「いや、まあ……」

「あれでやっつけられたのを奇跡と言わずして何というか？」

ウォンは言葉に詰まる。1回に1割ずつしか体力削れない相手なのだ。あの時のフェニックスは少なくとも3割以上体力が残っていたはずだから……

「でもさ、結局やっつけられたじゃないかよ」

それを聞いてまたアルマはウォンを睨みつけた。

「そういう問題ではない！ 一体何を根拠に奴を倒せると思ったのじゃ？」

そう言われてウォンは言葉に詰まった。もちろん根拠などない。単にあの時はぶち切れていただけなのだから。

「え？ だって、だってな……精神を集中したらダメージが上がるって言っただろう？」

もちろん出任せである。それを聞いてアルマは真っ赤になってウォンの胸ぐらを掴んだ。

「お・の・れ・は・そんな物に賭けておったのか？ そんなんでフェニックスが倒せば苦勞などせんわ！」

「じゃあどうすりゃ良かったんだよ！」

アルマはウォンの襟から手を離すと言った。

「あの時妾はまだ死んでおらなんだのじゃ！ 妾を回復させるのが先じゃろう！」

そう言って彼女は胸を叩いた。

「え？ 俺はてっきり……」

「ちゃんと確認せい！」

ウォンは返す言葉がなかった。確かに二度目に彼女が吹っ飛ばされた後、ぴくりともしなかったのだからそれで彼女が死んだと判断してしまったのだが……

「でもあれじゃ、俺の治療魔法ぐらいじゃどっちにしたって……」

その途端アルマはまたウォンの胸ぐらを掴んでわめいた。

「そうじゃ！ 大体おのれはどうしてあそこで呪文などを唱えおったのじゃ？」

「はあ？ だってお前が死んだらまずいだろう？」

「おのれは気づかなかったのかえ？」

アルマの目は完全に据わっている。

「な、なにを？」

「妾がおのれの手を取った時じゃ！ 妾は懐に薬を持っておったのじゃ！ じゃからそこにおのれの手を導いたのじゃ！」

「え？ え？」

ウォンはあの“感動的な瞬間”を思いだした。ということは、あれは死を前にした女性が最後の想いを伝えようとしていた……はずがないに決まっている。

「ま・さ・か・妾が血迷うたとでも思ったのではなからうな？」

ウォンは口をぱくぱくさせるだけで何も答えられない。それを見てアルマはウォンが想像通りの誤解をしていたことを確信したようだった。

「おのれはなあ！ あのような状況で乳を触らせてどうするか！ このおやごだわけが！ いっぺんその脳味噌引きずり出して洗濯してくれるわ！」

そう言ってアルマはウォンの頭をぼかぼか殴り始めた。

「いて、いてて！ だあから、ちゃんと戻って来れたんだからいいじゃねえかよ！」

「そんなに行き当たりばったりで、よくインストラクターなどを勤められたものじゃ！」

「なんだと？ 言わせておけば言いたい放題……」

だがその途端アルマはウォンの両肩をぎゅっと掴むとじっとウォンの目を見据えた。

「そうなのじゃ……戻って来れたのじゃ……」

「え？」

急に改まった口調にウォンは驚いてアルマの顔を見た。彼女の目は潤んでいる。

「ウォン。特にうぬには感謝しておる……」

そして驚いたことにアルマは、そう言うウォンの肩に顔を埋めてきたのだ。

《え？ ああ？ えーと？》

こんな状況に免疫のある人間はそうはいないだろう。もちろんウォンはそれ以前の免疫さえ乏しかったので、彼の手は宙に広げられたまま、アルマを抱くでなく押しのけるでなく、痙攣のような意味不明の動作を行っていた。

そのままアルマはウォンにつぶやいた。

「そういえば、褒美の話があったよな？」

「褒美？」

何のことやらといった様子ウォンに、アルマは少しむっとした顔をした。

「敵に攻撃を当てたときの褒美じゃ！ いらぬのなら良いのじゃ」

そのときウォンはやっと思いだした。だがちょっと、なんだっけ？ 本当にいいのだろうか？

ウォンは恐る恐る答えた。

「い、いや、いる……」

それを聞いてアルマは微笑んだ。

「ウォン……うぬがノートの奇跡を呼んだのじゃ……」

それからアルマは目を閉じるとそっとウォンの唇に唇を重ねた。

ウォンはまるで天国に昇ったような気分だった。

その時後ろの方からせっかくの雰囲気をぶち壊す声がした。

「えーっと、ちょっといいかしら？」

戸口に立っているのはラーンだ。

「うわああ！」

ウォンは慌ててアルマを押し離す。

「い、いつからいたんだよ？」

「さっきからずっとよ。忙しいんならまた後にするけど」

「そんな！ こっそり見てるなら見てるって言えよ」

ウォンは混乱の極みだ。だがアルマの方はちょっと顔は赤いが遙かにしっかりしている。アルマは平然とラーンに言った。

「もしや妾に用かや？」

「ええ。さっきの調べが付いたわ」

「おお、でどうじゃった？」

「やっぱりだめね」

「あはは！ そうであろうな。あまりにも虫が良すぎる話じゃな」

「ああ？ どうしたんだ？」

話が見えていないウォンが尋ねると、アルマが答える。

「実はな、ローウェルタウンでカイから本来聞くはずのメッセージじゃが……」

その時ウォンは初めて今回の旅の目的を思いだした。

「そういえばそんなのがあったな」

それを聞いてアルマが笑う。

「そうなのじゃ。実はな、あのカイと最初に話したことがそれだったのじゃ。でも本当にどうでもよい話じゃったので、妾もすっかり忘れておったのじゃ」

「へえ。で、どんな話だったんだ？」

「それがな、奴が妾のために秘密の銀行口座を残しておったと言う話でな」

「銀行口座？」

「戻ってきて考えてみたのじゃが、そんな物があつたとして、もし今も残っておつたらどういふことになると思うかや？」

アルマの言わんとすることは、ウォンにも簡単に推測がついた。

「まさか、1500年分の利息とか？」

「そうじゃ！ そうなっておれば妾は大金持ちではないかえ？」

それを聞いてウォンはこう言っていた。

「まじかよ？ じゃあもうここをやめるのか？」

だがそれを聞いてアルマはウォンの頭を小突いた。

「おのれは何を聞いておるのじゃ？ ラーン殿はそれがだめだったと言いに来て下さったのであろう？」

それを聞いてラーンがうなずいた。

「あ……だよな」

「だから仕方がない故、妾はもう少しここで働かせてもらうのじゃ」

そう言ってアルマは微笑んだ。

「あ、そう。せいぜい頑張るんだな」

口ではそういいながらもウォンはもう顔がにやけてしまうのを止めることはできなかった。

そんな二人を見ながらラーンが妙な笑みを浮かべながら尋ねた。

「ところで二人とも、こういうクイズ知ってる？ 深さ10メートルの穴に芋虫が落ちこちて、昼間に3メートル這い上がるけど夜に2メートルずりおちるっていうの。芋虫が脱出できるまでに何日かかるかって」

それを聞いてウォンが答える。

「ああ？ 10日じゃないのか？ 3メートル上がって2メートル落ちれば結局1日1メートルだろ？」

「アルマは？」

「妾もそう思うが？ どうしていきなりそのような話をされる？」

それを聞いてラーンはさらに妙な笑いを浮かべながら言った。

「ま、奇跡の方がドラマチックかしらね？」

「？」

「？」

かくしてこの事件は異界の門では“ノートの奇跡”と言う名で未永く語り継がれることとなってしまったのだった。

〈あとがき〉

ども。ここまで読んで下さってありがとうございます。

この作品は遙か未来の“異界の門”と呼ばれるバーチャルゲームセンターを舞台にしたお話で、何年前かに書いてた物に今回加筆訂正したものです。

SFとかファンタジーってのは設定を作るのが結構大変なんで、一度設定ができればその上で何本か書かないと元が取れない分野です。従いましてこの作品ではウォンとアルマのおバカなペアが主役となっていますが、今後イオとティルナがどうして出会って仲良くなれたのかとか、スーチやギメルが何でこんなところでラーンにこき使われているのかとかいった話をたらたら書いて行けたらいいなと思っています。

2005/11/13 by Thor

◆あとがき追記

この作品は上記のように5年以上前に自分のサイト(プロフィール参照)で発表していた話ですので、もしかしたらご存じの方がいらっしゃるかもしれません。

それにしても今読み直してみると何だか感慨深い気がします。作品の舞台が要するにネットワークゲームなのですが、ここで出てくる物と現在のMMOなどとは随分と違った概念の物になっています。

というのは、この話は今から5年前から見ても更に随分昔の、作者がウィザードリーとかマイト&マジックとかの初期のRPGにハマっていた頃に『こんな世界の中で冒険できないかなあ……』などと妄想していた頃に遡るわけで、要するにあの頃想像した未来のネットワークゲームのお話だったりするんですが……予想とは随分違った方向に来てしまったなあと感じていますが……

まあ予想するのが目的ではないので、それにそもそも5000年くらい先の話だし、そういうところでドタバタしているウォン君達の活躍を楽しんで頂けたらと思います。

2011/2/28 by Thor

◆追記の追記

カテゴリーは前はSFだったんだけどファンタジーに変えて無料化してみたらどういうことになるだろうかというテスト。

2011/03/28 by Thor